

上杉謙信

吉川英治

青空文庫

生ける驗あり

この正月を迎えて、謙信は、ことし三十三とはなった。

まだ弱冠じやつかんといつていい。それなのに、服色も装身のすべても、ひどく地味好みであった。長袖の羽織も山繭織やままゆおりの鶯茶うぐいすちゃの無地ですましている。大口に似た袴はかまだけが何やら特殊な織物らしい。またいつも好んで頭巾ずきんをかぶり、新春の装い綺羅きらやかな群臣のなかにあつて、にこにこ無口に衆を見まわしている。——どう見ても臨濟りんざいの若僧がひとりそこに交まざっているようであつた。

「どうです、他愛ないものではありませんか。これですから、わが部下というものは、可愛くてなりません」

座を隣りあわせている右側の人へ、謙信はこう話しかけた。

関東管領かんりようの上杉憲政は、

「まったく」

と、うなずいて、更にまた、その右隣にいる貴人へ向つて、

「越後衆の義勇に富むことや辛抱強さは、夙に、四隣に聞えています、かように無邪気で、多芸の士が多いとは、いや初めて知りましたな」

と、微笑を伝えた。

貴人というのは、この中に、ただひとりの都の公卿だった。熊野どの、熊野どのと仮称しているが、実は関白家の嫡、近衛前嗣なのである。——ことし永禄四年という天下大乱の中を、いかに正月とはいえ、こうした荒武者ばかりの席に平然と臨んでともに酒を酌み、ともに歓を尽しているこの公卿も、いわゆる花鳥風月だけしか解さない堂上の人とはすこし類を異にしているようである。またそれには、こういう武人の一群に対して、何らか求める大志を抱いているものということもほぼ想像がつく。

しかもここは、上州厩橋の城内である。京都からいえば、まだ多分に地方的野性のみを想像されやすい坂東平野の一角である。すくなくも当時の貴顕がこんなところまで旅するには、よほどの覚悟と目的がなければできなかった。

初春なれや 明けたり

おもしろの世や 今日なれ

生れあはせつるものかな

よくこそ今に。

国々こぞり立ち 国々たゝかふ

よべの夜雲と 消ゆあり

暁の出づ日と 燃ゆあり

神代を今と。

いまなれや ものゝふ

生きてこそ 人みな

またとはなき 生がひかな

草の根も喰め。

正月七日は吉例の賜酒の宴だ。お国訛りを交せてこんな長歌を今様調で謡っていた越

軍の若ざむらい達は、ついに挙つて起ちあがり、手拍子あわせながらこの城楼第一の大広間も狭しとばかり、輪をなして踊りめぐり踊り流れ、きょうの生命を、心ゆくまで楽しませていた。

信玄の影

「連年、正月は征途で迎えるのが、このところ吉例となったようです。去年は越中の陣中でしたが、さて、来年はどこでするやら」

謙信が、ふと述懐しながら、隣へ杯を乞うと、上杉憲政は、甚だしく済まないような顔して、

「関東のしめしを統べる管領たるわたくしに、その力がなく、四隣御多事のなかを、遠く御援軍を仰ぎ、恐縮にたえませぬ」

と、いった。

謙信は、彼の心事を察して、

「あなたからそんなお言葉を聞こうとて、申したわけではない。わるくおとり下さるな」と、なぐさめた。

積年の宿敵、甲斐の信玄とは、三年前の永祿元年、ひとまず和議が成って、

（今後は善隣として）

と、親睦の約定をとりむすんである。

だから表面、越軍にとって、この方の患はまずないように見えるものの、結果としては、

かえつて、干戈^{かんか}を交えていたときよりも、彼の敵性は、陰性となり、謙信にとつて、始末のわるいものとなつていた。

信玄の政治的手腕は、あの 峽^{きようざん} 山^{さん}の国にありながら、実によく諸国の内部へまで喰ひこんでいる。わけてその外交的な遠謀と智慮にかけては、若い謙信のごとき、到底、あの百鍊の功を経^へた緋衣^{ひい}の僧將の頭脳には敵すべきもなかった。

去年、越中へ出征したのも、富山城^{とやましやう}の神保一族がうるさく国境を侵^{おか}すので一揉^{ひと}みにふみ潰^{つぶ}すべく出馬したものであつたが、平定の後、それらの残党どもを縛^{くく}りあげてみると、信州訛^{なま}りの者がたくさん兵の中にいたり、信玄の息がかかつている門徒^{もんと}の僧兵が交じつていたり、また、常に往来した機密文書などが無数に発見され、結局これも、躍^{はら}らされた信玄の影——なるものであつたことが明らかにされた。

だが、この影なるものは、始末がわるい。一方を掃^{はら}えば、またべつな一面に躍^{はら}つて出るのだ。世上^{せじやう}でよく、

(信玄には七人の影武者がいて、誰^{だれ}が信玄とも分らない仕組^{ざく}になつてゐる)

と沙汰^{さた}するのも、彼のこういう謀略的性格の変^{へん}幻^{げん}出没をさしているのかもしれない。さて去年、越中に出馬して、辺境の乱を討伐した謙信は、居城^{かすがやま}春日山^{かすがやま}へ歸つて、鎧^{よろい}を

解くいとまもなく、またまた上州うまやばし厩橋うまやばしの管領上杉家から、

（至急、関東へ来援を乞う）

という出兵の要請ようせいに接した。

敵は小田原の北条氏うじやす康である。北条の勢威は、しきりに近境の里見、佐竹などの小国おびやを脅かし、いまはその圧迫にたえない状態にあるが、管領の上杉憲政に訴えても、すでにそれを抑える実力もないし、放置しておけば、ついに乱は上州一円にも及んで、管領家の自立すら危うく思われ出したための悲鳴であつた。

然ぜん諾だく、ただちに謙信は、春日山を雷発して、上州へ南下して来た。それが去年の八月。ここ厩橋城を本拠として、房総ぼうそうの小国を糾合きゆうごうし、彼の小田原攻略の大策は、いまその半途にかかりつつ、明けて永祿四年の新春を、この城中に迎えたわけであつた。

遠征すでに四カ月、戦いの前途はまだ期し難い。こう長陣となれば、士気を倦うまさぬことが肝要である。――で、今日のように時には大いに飲んで高吟放歌こうぎんに気をはなつのも意義がある。そう眺めやりながら謙信は満足そうであつた。客の近衛前嗣も楽しげに見えた。ひとり上杉憲政だけは、
（こんなことでもいいのか？）

と、ひそかに思^{うれ}えているものらしく、いつまでも酔えない顔いろであつた。

しかし、この歓宴も、紊^{みだ}れるまでにはならなかつた。各自、限度を心得ているのだ。まず、最も放逸^{ほういつ}に踊つたり謡つたりしていた者から真つ先に、

「よいほどにしよう」

「これくらいにしておいて」

と杯^{はい}を納め、そして配膳の係へ、食事をうながすと、各、大茶碗をかかえこんで、真面目に飯をたべ始めていた。

——と、そこへ、四、五名の同僚とともに、寒そうに鼻を赤らめて、外^{そと}から戻つて来たものがある。末座から遠く主君や客のほうへ礼をすると、その一組は、大勢の中へ割つて入り、すぐ箸と茶碗を持つとうとした。

謙信は、遙かに見つけて、

「下野^{しもつけ}ではないか」

と、呼びかけた。

咎^{とが}められたと思つたか、その中のひとり斎藤下野守は、あわてて容^{かたち}を正し、

「ただ今、戻りました」

と、礼をし直した。

「すぐ飯はならぬ。まだそちは飲んでおらぬらしい。これへ来い」
と、謙信は、杯で磨いた。

斎藤下野

斎藤下野^{しもつけ}はおそろるおそろる主君と貴賓の前にすすんで行った。そのすがたを、近衛前^{さきつ}嗣^ぐは眼もはなたず見ていた。どうも驚いたという顔つきである。越後にもこんな侍がいるのかと思つたらしい。その斎藤下野とは、一口にいえば、見ツともない小男というしかないが、その上に、左の一眼はつぶれているし、足は跛行^{びつこ}をひいている。

だが、謙信としては、可愛い部下に代りはないらしく、下野が貴賓に対して、極めて遠慮がちに坐りかけると、

「もつと寄れ」

と、手ずから盃^{さかずき}を与え、そしていうには、貴様は大の酒好きではないか、折角^{せつかく}、きょうの好機を逸して、朝からどこへ行つておつた、日ごろの口ほどもない不手柄者ではある

——そういつて、謙信は、笑いながら叱る真似した。

下野は、いただいた盃に、拝をして、飲みほした後、

「実は、御先祖の墳^{つか}へ、墓まいりに行つてまいりました。早晩に出て、御酒宴の前までには立歸つて来るつもりでしたが、古^{いにしえ}の蹟は草に埋もれ田と変り、なかなか見つからないものですから、つい遅く相成りました」

と、答えた。

「あ。そうか」

謙信はふと嚴^{げん}肅^{しゆく}に眉をひき緊めた。思い出したからである。この斎藤下野なるものの祖先は越後ではなかった。この厩橋城から数里の東にある生品郷^{いくしなごう}の産れである。上毛の平野生品の郷^{さと}は、建武二年、時の朝賊足利尊^{あしかがたかうじ}氏を鎌倉に討つべく新田義貞とその一族が天兵たるの忠誠を誓つて旗上げしたところとして誰知らぬものはない。

わけて謙信は、この上州へ出馬してから、二度もその地へ行つて義貞の霊^{たま}を弔^{とむ}つていた。彼は、建武の忠臣が、いかに憤^こつて草莽^{そうもう}からふるい起つたか、あだには把^とらぬ弓矢^{あえ}を敢^{あえ}て把^とつたか、そしてついに国に殉じたか——を征途の夜々の眠りにも考えずにはいられなかった。そして草むす生品の辺をさまよい、幾多の英魂に心からな血涙を手向けては歸つ

た。二度目にはその地の辺に仮ながらの宮祠みやほくらを建てたほどである。

この人こそ

由来、謙信は多感な質である。激しやすく感じやすい。二十歳ごろまでは、まま女のごとく泣くことすらあった。その前後には、多感なるばかりでなく、多情の面も性格に見られたが、翻然ほんぜん、禪に入つて心鍛しんたんをこころざしてから一変した傾きがある。といつても多情多感な性は、もとより持つて生れたもの、禪によつてそれが血液から失なくなるはずはないが、その強烈を挙げて、将来の大事へ打ちこめて来たのである。大義には哭なくが、小義には哭かない。怒れば国の大事か武門の名かで、平常は至極無口になった。たいがいなことは、切れ長な瞼まぶたの辺で笑っている。ちと、壮年者には似あわないがそういう風格に變じて来た。

そのかわり理想とするところへは独往邁進まいしん、着々と無言で進んでいる巨歩のあとが窺うかがえる。そのもつとも偉なのは、上洛じょうらく朝拜の臣礼を、彼のみは怠らずにしていることである。京都と越後との距離は、小田原の北条より、甲斐の信玄より、また駿府の今川家よりも、

どこよりも遠かった。けれど信玄も義元も氏康も、各 自国の攻防と一身に氣をとられて、まだその拳きよのないうちから、謙信は、天文二十二年のまだ弱冠のころに逸いはやく上京し、時の將軍義輝を介して、朝廷に拝し、天盃てんぱいを賜わり、種々の献上物を尊覧に入れなどして、臣謙信の把とる弓矢の意義を世に明らかにしていた。

つづいて、おとし永禄二年にも上洛した。度々の彼の忠誠に、朝廷におかれても、御ご感悦かんえつはいうまでもなかったが、関白かんぱくの近衛前嗣さきつぐなどは、ひそかに彼のために案じて、（遠隔の地、こうお留守になされては、御本国の領も、さだめしお心もとなないことでしょう。あとの御守備はだいじょうぶなのですか）

と、訊ねたことがある。

すると、謙信は、

（ほかならぬための上洛。領土のことなど、一向に捨て置いてもかまいません）

と、答えた。

いま割かつぎよ拠する諸国の群雄にとつて、血まなこ、血みどろな、第一の関心は、その領土である。寸土尺地にも鎬しのぎを削りあつて他事もない有様の折である。そのなかで謙信のこのことばを聞いた関白前嗣さきつぐは、

(この人こそ)

と、彼に真実を認めた。見込んだのだった。応仁以来の道義のみだれと、朝廷と臣子の道すら怠られている国風のすたれを嘆いていた折なので、謙信の一言はいたく前嗣の胸をうった。かかる武将なれば何を打明けまたどんな大義を託しても——と、以来、熊野牛王の誓紙をかわして、ふたりは深く朝廷のために誓いあうまでとなった。

この正月を期して、遙々、前嗣のほうから下向して来たのも、表面の理由よりは、かねてふたりの胸にそういう心契もあるからだった。

「ほう……。ではお許の御先祖は、この地の新田一族のものか」

前嗣は、ふと、謙信と下野とのはなしへ、傍からことばをさしはさんだ。

祖恩

直接、声をかけられたものの、答えてよいかわるいか、下野が恐懼している容子に、謙信が、

「お答え申しあげよ」

と、^{うなが}促した。

下野は、片眼を、ちらと、貴賓に向けて、

「おたずねを賜わつて、畏れいます。祖先齋藤藏^{くらんど}人は、名もなきものにござりますが、義貞公お旗上げの折より、御一族の脇屋^{わきやどの}殿の手について、鎌倉攻めに参加し、後、^{のち}分倍河原^{ぶばいがわら}のたたかいに、討死をとげました。——首を埋めた墳は故郷の宅^{たくし}址にありと聞き、同じ土地の出の衆五、六名を誘つて、あちこち尋ねましたが、よう分りません。……茫^{ぼうぼう}々、いずこも田や草原と変り果て、土地の農夫どもすら、たれも弁^{わきま}えおりません」

「では、越後へ移られてからは、もう数代になるのじやな」

「四代になりまする」

「ああ、それでは……。越後にはなお、新田一族の裔^{えい}が多くおられますか」

これは、謙信に向つて、直接に問うたのである。謙信は、思案までもなく、

「ここだけでも、下野を初め、五、六名もおるとあれば、春^{かすが}日^が山^{やま}城^{じょう}には、まだ何十家も、同じ流れのものがおりましょう」

と、すぐ答えた。

前嗣は、大きくうなずいて、

「さ」そ。さ」そ」

と、繰返し、

「ほまれある御裔とも思いもよらず、さきほどからの率爾そつじはゆるせ。盃をとらそう。下野とやら」

と、自身から進んで来ないばかりにいつて、手をさしのべた。

下野はいよいよ恐懼きょうくして身をちぢめた。四、五十名の一小隊をあずかる侍頭さむらいがしらに過ぎない身分を顧みて、思案に余るものらしく見えた。

「おうけせい」

主君のゆるしに、ほつと、面を上げると、下野は、こういった。

「何の功もありませぬに、身に余るお盃は、おそらく祖先の功を思召されてかと存ぜられます。てまえ一個がいただいおくには過分。お盃ぐるみ頂戴して、ほかの五、六名の衆にも頒わけ、帰国のちは、春日山城にあるほかの衆にもいただかせたく存じます。……願わくばどうか、そのお盃ぐるみてまえに」

「よろしかろう」

前嗣さきつぐは、自身の懷紙を取り出して、盃を包み、あらためて下野にそれを授けた。

釘付けくぎづ

整備はととのつた。上毛、房総の兵をあわせた管領軍は、謙信の指揮のもとに、北条氏康の罪を鳴らして、

「降伏か、滅亡か」

を、小田原の城下に迫った。

その年、三月から四月にわたつての、攻防戦はつづけられた。花も散って、春は徂ゆこうとしていた。

陣中の客、近衛前嗣は、

「一日も早く、宇内うだいに大志を展のべられるよう、陰ながら祈っています。四民のために」

と、ここで別れて都へ帰って行つた。

合戦の際であつたが、謙信は足柄あしがらぎ境までこれを見送って、

「いずれまた都においてお目にかかりましょう」

と、自信をもつていった。大きな将来の自信をもつて。

しかし当面とうめんの小田原一城も、容易に陥落しなかった。理由は、逸早くいちはや甲州から信玄の有力な部隊や参謀が城内に入っていて、氏康に協力していたからである。

それらの甲州参謀は、

「なおなお兵力も軍需も、いくらでも甲州より後詰ごづめ申さんとお館やかたの仰せであれば、飽くまで、この要害に拠よつて、守るを主とし、城門を出て戦うことはせぬが得策」

と、主張していた。

よせて
寄手をここに釘付けにし、わけでも遠征の越後勢を疲労せしめ、謙信をしてまったく施す策なからしめんとする方針だった。

五月になった。

しかも城壁の一角すらまだ奪とれない。城方の計は図あに中あたつたといえよう。謙信はついに一度軍を退ひいて、味方の倦怠けんたいを一新し、敵の変を待とうとした。

彼が、上杉憲政とともに、鎌倉八幡宮へ参詣したのは、この期間であつた。憲政は、その機会に、

「以後は自分の同族ともなつたつもりで、上杉の姓を名乗られよ」と、すすめた。

それまでの謙信は、あらためていうまでもなく、管領の一被官^{ひかん}で、姓は長尾、職は越後の守護代^{しゅごだい}であつた。

空文一灰

そのころ、甲州の精銳が、或いは隊伍し、或いは分散して、北へ北へと動いていたことは頻り^{しき}なものであつた。

大軍団の移動は、当然、四隣を刺戟するからである。ちぎれ雲のように、八ヶ岳道、諏訪^わ道などから、善光寺方面へさしてゆく人馬は、ことごとくそれだったが、この方面に監視を怠らない越後の謀者も、

「はてな？」

ぐらいで、その目的を不覚にも観破^{かんぱ}できなかつた。

彼等^{かれら}が気づいた時は、世間一般も同時に知っていた。それは青天^{せいてん}の霹靂^{へきれき}にも似て世の耳目^{じもく}を愕^{おどろ}かしたからである。

「すわ。また甲越のあいだに」

巻雲まきぐものように揚つた戦雲の突然に、その理由も汲めず、百姓はただ往年の恐怖をあらたにしていた。

場所は、野尻湖のじりこの東南で、越後信州の国境にあたり、山地ではあるが、北するも、西するも、南するもここを分岐点ぶんきてんとする交通の要衝ようしゅうで、割ヶ嶽わりたけの嶮よに拠つて、越後勢のたてこもっている一城じやうがある。

割ヶ嶽わりたけの城しろ。

ここの圧おさえは、越後にとつても絶対的なものであると等しく、甲斐の武田家にとつても、最大価値をもつて見られているものだった。

もし、武田方に、一朝、ここを奪われれば、越後軍は東進南出すべて封じられる運命におかれなければならないし、越後によつてそれが扼やくされているかぎり、甲山の猛虎信玄も、ついに野尻湖以北——裏日本への展開は将来に望み難いものになる。

で、甲越両国の本能は、いつもこの地方に摩擦ましていた。奪とりつ奪られつ、南へ生き出ようとする生命と、北方へ伸び振わんとする生命とが、峽門に激しあう奔流にも似て、数度の血戦に相搏あひうつて来たものであった。

けれど、その宿命も、四年前の永禄元年このかたは熄やんでいた。將軍足利義輝のあつか

いで和睦わぼくが成立したのである。相互、誓紙をかわし、神文しんもんに誓って、干戈かんかを収めおさめたのだ。
——その割ヶ嶽の城に揚つた突然な戦火である。世間一般が、

「またか？」

と、怯おびえたのも無理ではない。霹靂へきれきをうけたように、耳目をしびれさせたのも、両国間の和睦を、永久なものと、余りに過信していたからであつた。

悲行熱汗

「なに、割ヶ嶽が？」

遠征の地で、第一報をうけたとき、上杉謙信は、やはり一般民間の者と同じような、寝耳に水の感をいだいた。

——さもあらん。

とは決して考えられなかつたのである。信玄と取り交してある条約の上からも。また、人間の通念からも。

若くして、禅味をふくみ、才識さいしきのひらめき、三略りやくの学胆がくたん、すでに彼は、名将の器うつわと、

一般から見られていたが——こんな事にもびくとも愕かずにいられるほどな偶像的人格ではない。

いきどお
憤った。

めずらしく、その面には、怒気赫々たる血色を示し、

「足長め！」

と、罵った。

信玄をさしてである。これは謙信が名づけた綽名ではない。甲州の足長どのとは誰もいうのだ。その外交ぶり、その疾駆ぶり、あの山峡の国にしながら、実にまめな早足や早業を見せるところから起ったものらしい。

しかし、その疾風迅雷にかけては、謙信も信玄に劣らないものだった。謙信の迅さは、行動よりも、心機にある。事にぶつかって、悔いたり迷っていない果斷にある。

「ひきあげよう。即刻」

六月、三国越えを、彼のひきいる人馬は、奄々と、汗みどろに、北をさしていた。

「無念です」

「割ヶ嶽は、ついに落城しました。お味方はのこらず、城と共に、討死をとげて」

相次ぐ悲報を、謙信は、その山道を喘ぎ喘ぎ行く途中で聞きとった。

「そうか」

汗を払って、雲の峰を仰ぐ。烈日は、彼の悲涙を焦きつけた。

「……そうか」

黙々、行軍をつづけてゆく。

彼の憤怒悲痛を察して、その馬前馬後を囲んで行く——直江大和守、長尾遠江守、鮎川摂津、村上義清、高梨政頼、柿崎和泉守などの諸将も、いまは何も激声を発しなかった。

黙々、また黙々……。ただ或るものを、後日に固くちかいながら、雲のように、山また山を越えていた。更に、詳報が入った。

「敵は、割ヶ嶽を陥すと、城郭を焼払い、石垣も城壁も、跡かたもなく打壊して、はや甲州へ退去したとの事です。城中のお味方は全滅をこうむりましたものの、敵方の死傷は数倍にのぼり、甲軍の名だたる大将、原美濃守、加藤駿河守、浦野民部などまで傷を負い、とりわけ原美濃守は、この一戦に十三創の重傷で後退したといわれ、また同じく敵方の旗本、新海又三郎、辻六郎兵衛は討死。多田淡路守もまた討死と聞えております

る」

せめてもと、謙信に向つて、つぶさに戦況を告げる早打ちの者に、

「そうか」

と、答えは、依然、短かった。しかし、この言葉をかさねるたびに、彼の語気は、静かに、莊重に、何かしら濁りにごの澄んでくるようなものがあつた。

詳報がつたわると、全軍のうえに、明らかな動揺がうねつた。沈湎ちんめん、馬上に暗涙を嚙のむ老将もあれば、憤涙を拳こぶしで拭つて、

「残念っ」

と、声を放つて哭く多感な旗本輩はたもとばらもある。

荷駄、小卒の端までが、口々にいうことには、

「このまま、越後へ帰るのか」

であつた。

そしてまた、

「空しくは帰られぬ！」

意気を炎々と汗の頭からいきり立たせた。

そうか、そうか、とばかりで黙々たる謙信に対して、全軍の将士が物足らなきの騒音を漂^{ただよ}わせたのもむりではない。見よ、この山越えの嶺から西をのぞめば、そこに割ヶ嶽の煙かとも思える雲の峰が見えるではないか。一鞭^{むち}、左へ指せば、野尻は遠くない。さらに長駆して川中島を突破し、敵の一拠点、海津^{かいづ}を抜き、附近を席捲^{せつけん}し、少なくとも信玄勢力圏の一端に報復を与えて引揚げても遅くはあるまい。

「何で、このまま」

歩み歩み彼等は地だんだ踏み足ずりして止まなかった。割ヶ嶽の一城には彼らの血もつながつている。ここにいる或る者の父はそこに居た。また或る者の兄や弟や叔父や甥もここに居た。それは凝^こつて一つに越軍の名にむすばれ、甲軍の不信にたいする正義となつて、ひたぶるに、

「ここからでも」

と、追撃^{はや}を逸^{はや}るのだった。

「駒を止めい」

謙信は、何思ったか、前後の諸将へ、こういつて、急に自身も、馬首を横に向けた。

橋流水不流

「止まれつ。全軍、西へ向け」

つづいて、謙信からの命が、次々の部将の口から伝えられた。

ぴたと、埃^{ほこり}が沈む。

蜿蜒^{えんえん}たる横列は、何事かと、西方へ向いて、静肅に顔をそろえていた。

そして、主将謙信のすがたへ、近く遠く、一様に眸^{ひとみ}をそそいでいた。

「……………」

謙信は、馬の鞍つぼに、手綱をはさみ、胸に両掌をそこに合せていた。西方の空へ向つて――。

老将たちも旗本も、列の遠い端にある荷駄の者までが、みなそれに倣^{なら}つて、しばし黙禱を送っていた。

終ると、謙信は、馬から伸びあがるように、

「――橋^{はしながるるもみずながれず}流水不流――行こう、ひとまず、春日山のわが本城へ」

そういうと、左右を促^{うなが}して、ふたたび北へ北へ峠を越えた。

謙信が大きい声でいった初めの一句は、どうも皆にはよく分らなかった。何か禅語のうちにあることばらしい事だけは想像されたが、意味がよくわからない。

「……橋ハ流ルルモ水ハ流レズ。そんなふう^にに聞いたが？」

と、自問自答するのだった。

案^{えとく}を会得して、いう者もある。

「水は流れるもののなに流れずといっている。それはつまり永遠のすがたをさしている意味ではないかな。架^かけたかと思えば流され流されたかと思えば架ける。眼前の悲喜にとらわれるな。そうお館は仰つしやつたのではあるまいか」

ともあれかくて遠征の越軍は、ひとまず春日山の城へはいった。謙信はかく期すところがあるらしく、帰城の後の生活は朝夕常のごとくであつた。

むしろ諸将以下、越後全土の人心は、武田の不信行為にたいして、日ましに憤激^{たか}を昂めていた。和睦の条文を破棄^{はき}したばかりか、遠征の留守をうかがって虚^{きよ}をつくとは、卑劣極まる、武門の列に加えておけない信玄入道である、百姓町人の困難も顧みてやらない地上の乱賊である。越後では武士でない領民までが、齒^{うかが}がみしているのだった。

——にもかかわらず謙信には容易に起つふうも窺^{うかが}われなかった。七月もすぎ八月に近い。

春日山の城は蟬しぐれにつつまれて再度出征の気ぶりもないのだ。もちろん城下の鍛冶とか、兵具とか、兵糧そのほか、軍需の方面は、活潑にうごいているが、これは上杉家として何の異例な事でもない。兵事すべて平常のことだ。

「我慢がならぬ」

「どうしたというものだ」

上層の意志が酌めない下級の士たちほど、やりばのないものを、ともすれば口に発したがる。そして、退城して来たものをつかまえては、

「どうだ……御評議のもようは？」

と、訊く。

それを窺い知ることができる程度の側近者であると、

「さあ、知らん」

としか答えないし、

「何かきょうも、お奥では、御一族と老臣方だけで、御評議があつた。しかし相かわらず、和戦区々らしい」

などと、見て来たようにいう者には、何も実際は分っていないのであつた。

けれど、何となく、和戦両様の空氣が城将間にあることを感じると、

「和とは何だ、この期ごになつても、まだ和を考える余地がどこにある。腰抜けめ」

一般の激昂げつこうはいやが上にも燃え募つつた。忿懣ふんまんのうえに重なつた忿懣である。それも

こんどは誰へ向けていいやら分らない怒りだ。天へ向つて哭なくしかないものであつた。

そうした家かちゅう中の人々は、ふと、自分たちのまわりに、端はしなくも一つの不審を見つけ出

した。何かというに、それは例の片目、足なえですぐ目につく斎藤下野の姿が、近頃とんと見当らないことであつた。

和の密使

「下野殿には、どこへ行かれたのか？」

と、斎藤下野の家人けいじんに訊いても、口をつぐんで一切知らないというし、日頃、親しい友人にたずねても、

「一向いこうに存ぜぬが」

と、共に不審がるばかりであつた。

邸を窺うと、病気で寝ているふうもない、召使は嚴重に口止めされているらしい。こうなるとなお知りたいのが当然な心理である。

「わかつた！」

ひとり、衆へ伝えた。

もう秋ぐち、つい二、三日前から八月だった。旗本 辛崎からさき図書之助ずしよのすけが、同じ組の血氣な中堅ばかりの寄っている城中の用部屋ようべやへ来て、

「——見えないはず、彼は和睦わぼくのお使いとして、ひそかに甲州へ赴おもむいている」

と、声を大にして告げたのだった。

そう物事には愕おどろかない面がまえばかり揃っていたが、これには啞然というよりは、頭上から磐石でも加えられたように、ぐつと、いちど息を呑んでから、眼を大きくして、

「えつ。ほんとか」

と、いった。

「かような重大事が、戯たわむれに口に出せようか」

と、図書之助は、大小にかけていいきつた。

かれのことばによれば、かれの叔父にあたる黒川 大隅守おおすみのかみも先頃からいなくなってい

る。病中病中といつていたが不審のかどがあるので、従弟妹にあたる娘をおどかしてついに真相を聞き出したというのである。

「では、斎藤下野について、黒川大隅も甲州へ行つたというのか」

「さればだ。密々、下野に正使を仰せつけられ、副使には黒川大隅が添い、もう十日も前に、この春日山を出立しているという」

「……知らなかつた」

「知れようわけではない。もし漏れては、家中の異論や動揺まぬがれ難しと案じて、老臣衆が相計あいはかつて、極秘裡ごくひりにお使者を甲州へ遣やつたものらしい」

呆れはてて次のことばも吐けないでいる顔ばかりだった。――が、そのまま冷却できるような薄い血ちの気けではない。しばらくするとその沈黙は勃然ぼつぜんとここ数旬にもなかつた危険な形相をおびて爆発した。

居睡り柱

「なぜ、甲州へ向つて、越後から使いを立てねばならぬか」

「御当家は、武門をお捨てになる覚悟か。屈辱だ。恥を知れ」

「使者を送つて、なお恋々、和を講じようなどとは。——ああ、弓矢とる身もいやになる。道義のすたりだ。いずれはこれ、なるべく現状にありたい重臣たちが、お館の御決意をにぶらせたものだろう。ゆるし難い。断じて看過できぬ。——直江大和守どのか、柿崎和泉どのの邸か、いずれへでも押しかけて、真意のほどを糺してみねばならん。同意の者は、みな来い」

「行かいでか！」

「行こう」

いあわせた十名以上の者がことごとく起つて大廊下へ出た。ところがただ一人、なお隅の大きな柱へ背を凭せかけたまま、眼をとじて、起とうともしない者があつた。

ひとりが気づいて、

「弥太郎。なぜ来ない？ 早く来ぬか」

と、うながした。

眠たそうに上げた顔には、白あばたがぼつぽつあつた。鬼小島弥太郎は、その顔を横に振るのも懶そうに、

「わしは行かん」

と、いったきりで、腰を起てるふうもなかった。

この時・この秋

「なに」

一同は、色を作^なして、戻^もつて来た。弥太郎の凭^よりかかっている柱を囲んで、

「行かん、というのは、行く必要はないという意味か」

それに対して弥太郎は、

「そうだ」

と、はつきり答えて、

「無用な騒^{さわ}ぎ立てはせぬがよろしい。親のこころ子知らずということもある」

と、居住^{いずま}いもあらためずにいった。

その態度も、また訓^{くん}戒^{かい}口^{くち}調^{ちょう}も、甚だしく一同の気にさわった。上杉家の鬼小島弥太

郎といえ、四隣^{りん}にまで聞えている春日山の十虎のひとりである。十虎というのは、謙信

麾下^{きか}の旗本の精銳中からまた精銳を選^よつて、誰かが十人を挙げて名づけたものである。

それとて、ここにある同輩たちは、その弥太郎に絶対比肩^{ひけん}できないものとは誰ひとり考えていないのだ。折あれば各ひとに劣らない武勲をあげて、十虎の組には入らなくても、双龍、十龍、どんな名誉でも克^かち獲^えてみせるだけの自信はみな持っているものばかりである。

——白あばためが。

当然、同輩たちは、彼の不遜^{ふそん}に怒りを示した。いちど上げた腰をすえ直して、左右から口々に、

「無用な騒ぎとは何だ。無用とは」

「積年の敵国甲州、不信極まる信玄に対してこの際、使者を送つて、和を乞うなど、無念とは思わないか」

「この越後、わが上杉軍、すべての屈辱とは考えないか」

「これが、坐視^{いたす}していられるか。徒らに騒ぐのではない。腑^ふ拔^ぬけな、ただ計数的な、腰のよい老臣衆へ、勇氣と猛省を与えにゆくのだ。決断をうながしに行くのだ。なぜ、それが無用か」

と、つめ寄った。

弥太郎が、ふたたび、

「無用だ」

と、断じていつて坐り直すと、

「まだいうか」

と、中には、太刀をつかみ寄せて、眉に険けんを示す者もあつたが、弥太郎は箇々の顔を箇々には見ずに、全体へ向つて、極めておつとりと説いた。

「まあ聞け、落着いて。——過日來の御評議は、われら末輩まつばいには知るよしもないが、およそ興亡に関わる大事な軍議が、老臣の衆だけで決定されるはずはない。かならず君前行われ、君前に於いて一決した御方針にちがひなからう。——さすれば、甲州へ使者を送るも、和議を求めるも、お館のお旨ではないか。謙信公の御方寸ごほうすんではないか。貴公らは、君意にたいして不平を鳴らすか」

「いやその君意を晦くろうし、いたずらに無事を祈つて、弱音を吐きならべたものこそ、老臣の一部にちがひない。そのために」

「ばかをいえ」

と、弥太郎は、衆口を圧し伏せて、

「さむらいが、命をさしあげて、お仕え申し上げている御主君。——そのお館の御精神が、どこにあるか、日ごろからどんな御氣性か、それくらいなことも弁えずに、おぬしらは、よう御奉公が成るな。命をさしあげられるな。——兵法とは押太鼓うち鳴らして敵へかかるときだけのものではない。親のこころ子しらずといったのはその辺の微妙にある。へたな息り立ちをして騒ぐ事は、かえって君意を煩わし、いわゆる這般の妙機を邪魔するだけだ。……ここ暫く関東の遠征から戻って来たばかり、またすぐ戦陣には赴きたくない、というような顔して、各、随分ぼんやりしておられたほうが忠義でござろう」

と、笑つて、また、

「見たまえ。その甲州へは、選りに選つて、斎藤下野という者を遣つてある。藩中人も多いのに、あの下野を遣わされるなどは、老臣方の眼鑑では決してない。お館の御拔擢だ。——以て、畏れ多くはあるが、君公のお胸三寸下に、何があるか、分ろうではないか。察するに難くないではないか」

と、むすんだ。

もう誰も、それに息り立つものはなかった。いや、その場だけではなく、さしもごうご

うと喧^{やか}しかつた春日山城の内外をつつむ悲憤の声も、屈辱のさけびも、以来、急に鳴りをひそめてしまった。そして再出征の布令はもちろん軍備の気^けぶりも見えなかった。春日山城を中心とする諸所の支城への往来も緩慢だし、村々の秋祭は、平年よりは賑わつて、戦時なら遊んでなどいないはずの鍛冶、具足師までが、この秋は、踊りの輪に交じつて踊つていた。

信玄

四方の空、いずこを見ても、山ならぬはない盆地だが、城郭は平^{ひら}城^{じろ}だった。規模の大きなことは言語に絶している。そしてここを甲館とも呼び、躑^つ躑^つヶ崎の館ともいう。武田信玄のいる甲府の本拠である。

この時、信玄は四十二である。頸^{くび}の根太く、肉^しむらの固肥りな体つきをしている。頬はゆたかで、色の黒い皮膚の下から少年の如き血色を照らし出している。手の甲を見ても、頬^{かみそり}やもみ揚げの剃^あ痕^{あと}を見ても、多毛質なことがわかる。

そうした風貌から判断しても、絶倫な精力家であることや鉄のような意志の持主である

ことはすぐ感じるが、冷徹した理性は努めてあらわすまいとしている。眼じりに皺しわをえがいて、優しく見せているのがそれである。にも関わらず、いかに彼が努めて——春風人ニ接シ、秋霜シユウソウ己レヲ持ス——の態を心がけても、その大きな黒瞳をもった瞼まぶたは、涙と
いうものに濡れた例しを知らないかのように見える。

おおい「大炊。使者は見えておるか」

きようそく脇息へふかく肘ひじをのせながら、信玄はかたわらの跡部大炊あとべ おおいへ向つて、その耳へ口を寄せるほど近々と顔をさし伸べてささやいた。大炊もまた小声で、

「いえ、越後の使いが、使者の間へ通りましたときは彼方かなたのお小姓部屋で鈴を振つて、お知らせすることになっております」

「まだ鈴は聞えんな」

「されば、まだお次へ、通つて参りませんから」

「使者のすがたも見たいが」

「御覧になれましょう」

と、大炊は立つて、すでに二寸ほど開いている大襖おおぶすまのさかいを、更にもう少し開けてもどつて来た。

ここは城中の毘沙門堂びしゃもんどうとよぶ一閣である。堂作りの建物であるが、信玄の居室、書院、評議の間、使者の間など悉く備わっている。先頃からこの国へ特使として来ている越後の家臣斎藤下野なる者を、きょうここへ呼んで、あらかじめその面だましを覗き見してから対面しようというのである。他国の使臣にたいしては儀礼的な鄭重を極める半面に、まこういう非礼もよくやるものらしい。――殊に一方は優越を自負じふして役に臨む場合には、こんどの如きも、信玄としては、かならずや謙信が赫怒かくどして、上州から碓氷方面うすいへ伐りき入って来るなり、或いは、手薄な信州方面にたいして、報復手段をとって来るものと予想していた。

それもなく。

悠々、彼は小田原城の攻囲を解といて、上州から三国越えを経、遠く越後の春日山へひきあげてしまった。

――出直すか。

と観みているに、容易に、その気はいもない。越後へ入れてあるたくさん密偵からも、そのうごきの見えない証しるしばかり報じてくる。さてはと、信玄は、

（一昨年このかた、越中への出陣、つづいて無理な上洛、また半歳以上にのぼる相州への

遠征など——打続いての東奔西馳に、さしもの謙信も、つかれ気味とみゆる）

と内心、いささか安んじたり、また謙信の用兵の拙を、嗤っていたりしていたところである。

越後の臣、斎藤下野なる者が、副使黒川大隅以下をつれて、この甲府へ入つて来た。

そして、謙信の書を呈し、

「主人謙信より篤と申し授かつて参つた議は、事重大にござりますれば、お館へ御直談申しあげたく、いつなりとお目通りの日までお待ちいたしております」

と、宛てがわれた城外の使館にきようまで、呼び出しを待っていたものである。

謙信の書簡は、使者の信任状にひとしいもので、目的には触れていない。ただ辞句鄭重に四年まえに結んだ和睦のことに言及して、以来、異心なきにかかわらず、自分の遠征の留守に、割ヶ嶽の城を攻められたのはいかなるわけか——と、極めて、慇懃に糾しているのである。すこしも激越でなく。また、抗議的でなく。

貴下の良心に訴える。

と、いう程度にである。

こういう事理や情をつくした辞句に、顔あからめる如き信玄ではない。すでに両国が修

好を締結するまえ数年に互^{わた}つて、信越国境では三度も彼と激戦を交えているので、越後勢の精鋭、謙信の端^{たんげい}倪^いすべからざるものであることは充分に心得ているが、それにもかかわらず信玄のどこやらに、彼にたいする軽視が除ききれなかった。何といつても謙信は彼より九ツ年下なのと、その領土、財力、軍備、あらゆる角度から見ても、

——謙信何する者ぞ。

と、弱小視する気もちを制しきれなかった。

で、使者が来たと聞くと、その書簡を見るまでもなく、

(和をまとめに来たな)

と、直感した。

(戦う気があるなら、使者などよこす要はない。こちらも虚^{きよ}をついたのだ。虚を衝^ついて出てくるのが必然——)

その考えの下に、謙信の書簡をひらくと、

(果たして!)

と、思うものがあつた。

信玄としては、万事、予想どおりであつた。ともあれ、口上を聞き、返事も与えてやら

ねばならぬが——その特使の男がまた少々変っていると家臣から聞かされたので、

(どんな人物か)

信玄は、好奇心も手伝つて、面謁を与える前に、使者の間の次まで来て、跡部大炊としよにそつと覗き見したのであつた。

つなぎ烽火

他国の使者が着くと、その日から接伴役、案内役が付ききりになる。もちろん目付だ、鄭重なる監視人である。

逗留数日、きよう信玄が会うというので、斎藤下野は、ひとりだけゆるされて、毘沙門堂内の使者の間へ通された。当日の案内接伴役は、初鹿野伝右衛門と曲淵庄左衛門であつた。

「ただ今、主君へお告げしておきましたから、しばらくこれで」

と、控えさせて、甲州の二臣は、わざと下野へ雑談をしかけた。

下野の風采というものは、何分にも、彼の国元においてさえ、あまり薫しくないもの

である。まして甲州の歴々は、一見してみなあきれた顔であつた。こんな見ツともない小男を——と思った。しかも片目足なえという不具者だ。いまだ曾^かつてどこの国からもこんな使者は迎えたことがない。

「貴国の越後は、海七分の小国とわれわれは伺つておりますが、事實は、もつと大国でござろうな」

接伴の曲淵が訊ねると、斎藤下野は悪びれるふうもなく、
「されば、仰せの通り、海ばかり帯びて、至つて小国です。当甲州は、強大無比と聞いていますが、たとえばどれほどな大きさでしょうか」

「国の広さは、南北八日路^{かじ}といわれています。大国の証拠には、日々、街道すじの往還、荷駄千匹ずつありと申す。以て、御推量がつくでしょう」

「はははは。それは意外」

「何をお笑いめさるか」

「でも、荷駄千匹の往来と御自慢あるが、越後においては、出入りの船、日々千艘^{にちにち そう}。一艘の船には、馬千疋が負うほどの荷は積みます。してみると甲州は、存外な小国とみえま
すな」

曲淵は赤面して黙ってしまった。初鹿野伝右衛門が、それを救うように、

「下野殿。つかぬことを承るが、越後では他国へのお使いに、貴殿のような小男を、わざと選んでお出しになるのかな。失礼ながら、何尺おありになりますか」

下野は、少しも動ぜずに、すぐこう答えた。

「わが越後では、使者を他国へ向ける場合、先が大国なれば大なる男を、先が小国なれば小なる男をつかわすことが例になっています。たとえば、貴国へはそれがしのような小男を遣わされたように」

二の句も出ずに、伝右衛門が口をとじていると、下野はなお、

「身長をおたずねでござったが、こう見えましても、それがしは五尺にわずか一寸ぐらいしか不足ではござらぬ。お見うけするに、御両所はいずれも五尺五寸はおありらしい。それがしより勝ることそもそも何尺。おふたりを合せても、失礼ながら生涯に、それがしほど御奉公をなし得るや否や。剣は三尺に足らずといえども物干し竿より勝りましょう。お館には勿体ないものに美々しい衣裳を着せてお用いではある」

耐えきれなくなつたとみえる。襖の内ふすまで信玄が笑ってしまったのだ。さすが卑屈でない。呵々かかと高笑しながら、

「大炊。^{ふすま}襖をひらけ」

と、命じ、

「上杉どのの使者か。斎藤下野というか。なかなかおもしろいことをいう。むかし淳于^{じゆんう}は^{こん}齊^{せい}王^{おう}の命をうけて、楚国に使いし、その途中、楚王^{そおう}に贈る^{がら}鷲^{じう}鳥^{よう}を焼いて食べてしまいながら、空籠^{くろう}を奉じて楚王にまみえ、詭弁^{きべん}をふるってかえって王をよろこばせ、齊王は廉直な臣をもつて倖^{しあわ}せであると感心させたとかいう。——その方はあの淳于にも似たる男よ。上杉家において、禄はいかほど貰つておるか」

と、早速、信玄も打解^{うちと}けて、話しかけた。

下野は、遙かへさがつて、拝礼をしながら、

「六百貫をいただいております」

と、謹んで答えた。

信玄は、聞いて、

「過分なくれようかな。上杉どの^{しも}は下に厚いとみえる」

と、つぶやいた。

それから、片目はどうしてつぶれたかとか、足はどこで跛行^{びつこ}になったかなどと、露骨に

たずねたが、下野の答えは、機智縦横でしかも相手を不快にさせない程度に自己の見識と鋭さを持っていた。

「小兵者ながら、なかなか利^きけ者。わが家へ使いにさし向けられた者ほどある。上杉どのの祖先、鎌倉の権五郎景^{かげ}政^{まさ}も、鳥海弥三郎の矢に片目を奪われ、しかも武名かくれもなかった。おそらくその方の如き人物であつたかも知れぬな。はははは。大炊大炊」

「はい」

「使者に、酒を与えろ。大いに犒^{ねぎ}つてつかわそう」

「お待ち下さい」

下野はさえぎって――

「御酒をいただく前に戴かねばならぬものがあります」

「何か」

「割ヶ嶽の一城です」

「……ふうむ」

信玄の眼が、初めてちゃんと光った。眼じりの小皺^{こしわ}は、この時利剣のように芴^はね上がっていた。下野は、たたみかけて、

「おそらく、お館のさしずではなく、出先にある甲州の将士が、無断の乱暴と存ぜられませんが、あの一儀は、実に、わが上杉家と親睦のちかい固き武田家の御名のために、深く惜しまずにはいられません」

「いや、割ヶ嶽を攻めたは、信玄のさしずじや。決して出先の独断ではない」

「ほ。左様なお下知を、どうしてお下しになりましたか。永禄の元年、互いに、爾後^{じご}は干^か戈^{んか}を交えまいと、神文^{しんもん}を交わし、約定を取結んである御両家のあいだがらなるに」

「その以前、割ヶ嶽の城は、当武田家の所領であつた」

「御理由にはなりません」

「使者！」

「はいっ」

「そちは、酒をのむか、のまんか」

「いただきます。御返辞を頂戴いたした後で」

「信玄の返辞はすんだ。ふくろに納めた弓も、取出せばいつでも出せる。酒をとるか、弓をとるか。そちは謙信どのから、何と申しつかって来たか」

「もとより、それがしをして、これへお遣わしあるからには……」

「そうだろう。ともあれ飲め。永禄元年の誓紙せいし条文ようもん、そのまま両家にとめ置きたくば」
「御無態です。左様なお答えのみを持つて、何で使者たるものが帰られましょう」
「いやいや、そちはなかなか、君命を恥かしめてはいない。賞めつかわしておるではないか」

「ゆめ。甲州の御大将などから、お賞めにあずかりたくはありません。今日はまず御拝顔を
を得たこととし、明日、また明後日、十日でも半月でも、御意を待つて伺い直します。改
めておねがいます」

「ねがいとは、何を」

「明確なる御謝罪の証しるしを」

「ははは。むだであろう」

「むだかも知れませぬが」

「酒が出た。のむか」

「こんどは戴きます」

下野は、大盃を取った。彼の痛飲はまた敵国の君臣に眼をみはらせた。

けれど、それなどは、些細ささいな愕おどろきに過ぎない。その夜、躑躅つじじヶ崎へはいった飛報には全

城みな耳を疑うような震駭しんがいをうけた。信越国境の方面からつなぎ烽火のろしで一刻の間に伝わって来たことである。つなぎ烽火というのは、一里距おき二里距きに備えてあるのろし筒が、次々と轟煙ごうえんを移して甲府の本城へと、

——敵軍襲来しゅうらい！

の急を忽ちのうちに警報して来る組織のものであつた。

斎藤下野、そのほか使者の一行は、それとともに、馬をとばして、府外遠くへ、遮二無二、鞭を打って、逃げ出していた。

雷発

信濃しなの入り——

と聞くだに、血は鳴り、肉はうずき、武者ぶるいを禁じ得ないのが、越後上杉衆の常であつた。

相手にとって不足のない敵国。うらみかさなる敵国。かぶと、具足ぐそくの緒おを締めながらも、「このたびこそ」

と、みな誓い、

「徳栄軒信玄の首を見ずには」

と、みな思う。

それは部将以下の平侍から足輕にいたるまでの一貫している精神だった。

天文、弘治以来、連年といつてよいほどな両国間のたたかいに、親を討たれ、子を亡くし、或いは兄弟を失っているなど、箇々の宿怨は小さくもあれ、国是として、

（武田の阻害あるうちは、この国の成長なり難く、この国の生命もなし）

という謙信の信条が、全家中の骨髓に刻みこまれていた。火の玉のような一団の信念になっていた。

いわんや、こんどの出陣。待ちに待っていたものである。

この四、五十日間を、足ずりしてただけに、いよいよ八月十四日、春日山を雷発、信濃へ、信濃へ、と合言葉のように軍令が伝わるやいな、

「わあつ……」と、越後城下にはおのずからな声海嘯が捲きあがったものだった。そして電瞬のまに各、物の具をつけ、馬を曳き、軍需の物を積み、馬揃いに群れ集まって、貝が音、太鼓の音とともに進発する軍隊に対して、領下の老幼男女は、いつまでもいつ

までも声涙を抑えて見送っていた。その中には一万三千の軍勢に伍して行く者たちの妻もいた、老父もいた、妹もいた、母もいた、友もいた……。

海津城かいづじょう

ひと口にいえば一万三千といえる兵数だが、これが山を越え、谷をめぐり、峰に攀じ、里に炊ぎ、越後から信濃へ殺到するには、壯觀も壯觀だが、たいへんな難行であつた。

しかもその難行の道は、生きてはふたたび帰るまい——とみな誓っている道だった。

行軍は、先鋒隊の前に、放ち物見ものみ、大物見を先に、四段に備え立て、中軍をまん中に、鉄砲隊、弓隊、槍隊、武者隊とつづき、兵糧ひやうろう、軍需の物を積んでゆく荷駄隊は、最後方から汗をふりしぼってそれに従って行つた。

「ふた手に分れよう」

富倉峠の手前まで来ると、主将謙信はそういつて、前後の幕將を見まわした。

長尾遠江守——中条越前守——柿崎和泉守——甘糟あまかす近江守——宇佐美駿河守——和田喜兵衛——石川備後びんご——村上左衛門尉義清——毛利上総介かづさのすけ——鬼小島弥太郎——阿部掃か

部——直江大和守——鮎川せつつかみ撰津守——高梨政頼——新発田しばた尾張守、同じくいなばのかみはるな因幡守治
長がの兄弟など、いわゆる智将、猛将は、雲集していた。

「誰と。誰と。誰は——」

と、謙信はいちいち名ざして、部将を分け、軍を二分した。そして、

「一軍は、野尻を越えて、善光寺へ出でよ。一軍は謙信みずから率いて、富倉峠をこえ、
千曲ちくまの畔ほとりへ出るであろう」

と、告げた。更に、

「いずれから行くも、落会さかいう先は、犀さい、千曲の流水ながれを遠からず、川中島のあたりと知れ。
十六日の夕までには、謙信はかならずそこに着陣せん。べつの道を行く者共も、その時刻
におくるるな」

と、厳令した。

こうして、二軍となつて、わかれた時が、すでに十五日の午ひるだった。あすの夕刻までに、
犀川、千曲川のあたりまで行き着くには、不眠不休の行軍をつづけなければならないだろ
う。

が、たれひとり「無理」とつぶやく者もなかった。行軍の苦しさは出ばなにある。最初

の二、三日に苦しんでしまうと、何か、自分とはべつな、鉄の五体ができて来る気がするのだった。わけて越後衆は、合戦といえ、いつも国境を出て戦うことが定則になっていたから、かかる急行軍とて、決して、異とはしなかった。

謙信の統率する本隊は、翌る日のまだ陽の高いうちに、高井郡をよぎって、敵の海津城を牽制しつつ、候可峠から東条方面へ蜿蜒うねって行つた。

ここはもう完全なる敵地——信玄の勢力下であり——海津の城には、甲軍の猛将として聞えている高坂弾正昌信の精銳がたて籠っているのである。

「追うや、いかに？」

と、謙信が、その動静を計っていると、城の望楼に、豆つぶのような武者の影が二、三、小手をかざして、こつちを眺めている様子だった。

途中から軍を二つにして、謙信自身、わざと迂回うかいして来たのは、自分の選ぶ基地を有利に占め取るまで、この城から側面へ行動されとうるさいし、十分な布陣を取れないおそれもあるので、その牽制けんせいと示威せいゐとを目的にしたものだった。

城頭のやぐらに登って、それを見ていた小さい人影の中には、かならず城将の高坂弾正もいたにちがいあるまい。

「——来たな」

と、見ているが、彼のほうも沈着だった。すでに甲府表へは、つなぎ烽火で報らせてある。軽々とうごくべきではない——とじているようだった。

「はてな……。どこまで進む気か？」

むしろ、怪しんでいるかのごとく、城方の者は、いつまでも手をかざして、越後軍の行くてを凝視していた。

なぜならば、謙信の率いてゆく旌旗は、犀、千曲の二大河をこえ、城から約一里ほど東南の妻女山に拠ったからである。見れば、善光寺方面から真黒に流れて来たべつな一軍も、同じ地点に合し、いよいよそこを足場とするもののごとく、最後の荷駄隊も、馬背のものや牛車の物を降ろしている。そして、夕陽の赤々とうすずいて来るころには、妻女山一帯に、各隊その部署につき、旌旗はしきりに風をよび、軍馬はいななきぬいていた。「妙なところに。……有るまじき布陣だ。あんな危地へ深入りして来るとは」

高坂弾正の兵学では、これを解釈できないものだった。敵の意をはかりかねた彼は、いよいよ城を固くして、ひたすら信玄の来るのを待つと極めていた。

はつ雁

八月十六日、犀川、千曲川を抱いたひろい善光寺平の夜は、昼の残暑を一掃して、風も冷やかな星月夜だった。夜に入っても、渺びようとして、仄ほの明あかるかった。

謙信の本陣は、中腹の陣場平じんばだいらに置かれている。

兵は、飯を炊かしぎ、馬に飼糧くさをやっている。

「ぞんぶんに、こよいは寝ておけよ」

彼は、左右の将士にいい、自分の肉体へも告げていた。

けれど、心ある幕将たちは、甚はなはだ心もとない顔いろをしていた。うかとは眠られぬ——
というような緊張を顔から容易に解とかないのである。

海津の敵城は、すぐ眼のさきではないか。

しかも、この妻女山の地位たるや、余りに敵地へ深く入りすぎている。

ひとたび、高坂弾正が、信玄味方の信濃衆を糾きゆう合ごうして、同時に、その城戸きどを開いて

襲いかかつて来るならば——事、決して容易ではない。

いわんや、長途の疲労をもつ、今の虚を衝つかれたら。

誰も、そう思った。そう考えられるのが、常識だった。

その常識から推^おして人々は、

「このたびに限って、お館の軍配には、解^げしかねるものがある。いつにない御浅慮。心もとない事ではある」

と、ひそかに憂^{うれ}えた。

だが、謙信には、この危地も、すぐその海津城も、眼中にないものようだった。兵と同じ粗末な糧食を摂^とって、一椀の湯を箸^{かがり}のそばですすり終ると、中条越前守へ、

「物見の報告は、そちが聞いておけ。兵はなるべく十分に眠らせるように、また半夜代りの者共も、夜は寒い、明々と箸を絶やさず、身を温^{ぬく}めて居眠るがいい」

と、いつつけ、自分もすぐ、夜霧に絞るほど濡れている陣の幕を壁と、楯^{たて}を床として、ごろりと身を横にしてしまった。こういう簡素な生活には馴れきっている寝すがたである。そして草に枕し、露にまどろむ間に、彼は時折、詩を作り、歌などもくちずさんだ。

能^の登遠征のときの

霜満軍営秋気清

数行過雁月三更

は、ずっと後年の作であるが、青年ごろの作かと思われるものに、次のような一首がある。

ものゝふの

鎧の袖にかたしきし

枕にちかき

はつ雁^{かり}の声

重き陣幕

小荷駄奉行の直江大和守は、ふもとの土口^{どくち}に陣していたが、やはり、油断ならずと、部下は寝せても、ひとり寝もやらず、床^{しょうぎ}几にかかったまま、篝へ向って居眠っていた。
——と。小銃のひびきがした。

近い。

らんと、眼をあげて、余韻^{よゐん}を聞いている大和守のひとみに、篝の火が、煮えていた。

「どこだ。方角は」

陣幕の外にゆくと、哨兵のひとり、

「多田^{ただご}越えの方らしく思われます」

と、答えた。

ちやうど海津城とのあいだに当る。多分は——味方の物見と、敵の斥候との、さぐり撃ちだろうとは思ったが、念のため、大村附近へ出張っている味方の前衛へ、

「変りはないか」

と、問い合せに、兵を走らせ、その返辞を待っていた。

すると、同じような、危惧を抱いて降りて来たものか、妻女山に陣している柿崎和泉と新発田尾張守のふたりが、

「直江殿。それにか」

と、彼方から近づいて来た。

大和守が、うなずくと、ふたりは、憂いをおびた小声で、

「あなたも眠られないのではないか」

と、いった。

そして、なお、

「全軍の部将みな、こよいは恐らく、同じ思いで、安きここちもござるまい。こんな敵地ふかく凸^{とつしゅつ}出して、千曲、犀川の二大河を股^{また}ぎ、ほとんど孤塁にひとしいこの山に拠つて、いつたい如何なる戦^{いくさ}をなさろうと遊ばすのか、お館のお胸を推し測^{はか}りかねておる。：まさには、兵法でいう死地というものであるまいか」

「お館には、いかが遊ばしておられるか」

「御熟睡に窺われる」

「いつそのこと、一同して、御心中を糺^{ただ}してみてはどうであらう。御意をおそれて、ただ恟々^{きようきよう}としているはよろしくあるまい」

連れ立って、加地安芸守を訪うと、安芸守も同意という。

長尾遠江守も、ここへ着陣したときから、しきりと地相のよくないことを主張していたひとりである。

誰や彼、いつか七、八人になった。深夜ではあつたが、旗本から近^{きんじゆう}習へと取次を仰いで、

「ちと、お目通りを仰ぎたく」

と、謙信へ通じてもらった。

陣幕の内が、明るくなった。篝火^{まき}へ薪を足したのであろう。謙信はすぐ起き上がって、

「何事か、打揃うて」

と、一同を見まわし、まだ眠らないのかと、咎めるような眼^{まな}ざしであった。

長尾遠江守から、ことばを切つて、一同の不安を訴えてみた。併せて、自分たちの意見として、

「やがて、近々に、甲州表の信玄が、大軍をひきいてこれに参るとせば、この拠地^{きよち}は、いよいよ不利となりましょう。いまのうちに、ぜひとも、他のよき場所へ、御陣替えねがわしく、御秘策もあることとは存じますが……」

と、畏^{おそ}る畏る希望を陳べた。

謙信は笑つて、

「その儀か」

と、いった。そして、

「こよいは、将士みな疲れている故、ゆるゆる身をやすめて、明日にでも、評議せんと思つていたが、それほどみなが不安と存ずるなれば、直ちに、謙信のこころを打明けておかねばなるまい……。まだ、これでは顔が揃わんな。ここに見えぬ村上義清、高梨政頼、中

条越前守たちも、すぐ呼ぶがよい。謙信の胸を申し告げるであらう」

と、いい渡し、しばし猶予をおいて、そのあいだになお、篝火に薪をまきを加えさせていた。

死地の陣

ひしひしと、幕將の姿がつめ合つた。具足の膝と膝を、大きな円えんにつなぎ合つて。

一同の揃つたのを見ると、謙信はやがてしずかに、

「各は、この山を、死地なりと相さうして、謙信の布陣を案じておらるるそうだが、いかにもここは安全な場所ではない。死地ともいえよう」

と、まず口をひらいていった。

「――が、思え」

と、ここから、語氣を昂たかめて、

「自身、死地に入らずして、いかでか敵の死を制せられよう。いわんや相手は名だたる智謀老巧の信玄である。我れこのたびの出陣には、かならず老虎信玄に近々と一会して、彼を討つか、われ討たるるか、雌雄しゆうを一挙に決せんものと、出陣の際、春日山の武神にたい

し奉りても、ひそかに、お誓い申して来たことであつた」

いつの戦にでも、その出陣には、春日山の城中で軍神を斎いっき祭り、武諦ぶたいの式を執り行つて出ることは、上杉家の慣ならわしである。——その時の、謙信のすがたを、部将たちは、もういちど眼にえがき直していた。

「各も知るがごとく、信玄の戦ぶりは、つねに重ちようこう厚に軍をたたみ、深く内に潜ひそんで、旌旗せいきをうごかすや敏、転ずるや速。そして容易にまた動かず、もつぱら深慮遠謀、いやしくも軽々と兵を用いぬ大将である。天文以来、すでに幾回、干戈かんかのあいだにまみえても、容易に、彼の中核を粉碎ふんさいしあたわぬも、つまりは彼の用兵の妙と、その智謀の並ならぬにある。——一挙、そういう敵に迫り寄つて、無二の一戦をなさんには、到底、尋常一様な兵略をもつては難しい。かえつて彼に謀られるのみである。——謙信、若じゃくねん年なるがために、このたびのわが行動を、無謀とも案じるのであらうが、怪しむをやめよ、謙信は決して、軽躁けいそう、功をあせているのではない。人の眼に、九死一生の重地とも思われるところまで、敢て軍を入れたのは、信玄に対し、これを何と解くや？ 禅の一案を、我れから彼に示したのじや。彼の解く禅機、われの信ずる禅機、それによる変と動き、それらの事は、口をもつてはいい難い。——そのときわが軍配に見よというしかない」

と、口をむすんで、めいもく瞑目、ややしばらくの後、

「そもそもこのたびの戦端は、非義彼にあり、正義われに有り、ひたすら謙信が今日を待つあいだも、汝らをはじめ全軍のものは、この謙信が容易に起たぬを、憤懣たのしていたほどではないか。ここに至つて、安全を恃む陣地に拠らんとは、誰も心から思うてはおるまい。ただ必勝を期しているのみであろう。必勝を期すには、必死を期すこと当然である。――

こう観じて来れば、一見、不利無謀にも似るこの陣所も、妙機変通のある山とも見えんか。……はははは。まず、こよい寝て、もういちど夜暁よあけの下に大観してみい。犀川の広さ、千曲川の長さ、ここは敵地ながら、ここの眺めはいつも好きだ。わしも早く起き出いでよう。みな、解つたら順に陣所へもどつて眠れ。……何の、海津城、こよいはおろか、明日とて、もうこいて来るものか。出て来るものか」

そっくり終つて、謙信はもう一度、声を放つて笑つた。

かりね雁の音は、しきりと、雲を縫つていた。

敵府脱出

——つなぎ烽火の警報に、寢耳に水の愕おどろきをうけて、国中、わけても、府館の中心地甲府は、上を下へと、混乱を極めていたその夜——十五日の夜半だった。

二騎、三騎、また七、八騎。

辻を曲がり、また辻を曲がり、おそろしい勢いで、龍王道りゅうおうみちの木戸へ向つて、疾走して行つた士たちがある。

平常なら、何事かと、すぐ人々の注目をうけるところだが、この宵からの騒動中である。——あれも出陣の一組か。或いは、各地の味方へ、参陣の催促に行く早打ちかと、誰あつて、怪しむものはなかった。いや、怪しんでいるいとま違もない空気だった。

「退どけ退けっ」

「木戸の扉を払え」

「木戸側わきを退のいておれっ」

まるで、敵の中へ、斬りこんで行くような喚わめきだった。いわゆる武者声というものである。夜ながら、白い砂けむりを立てて約十騎、一団になって、街道口の木戸へ、ぶつかつて来たのだつた。

ここは、町の関門だ。滅多に通すべきではない。だが、真まっ先の一騎が、

「火急の際、無断、まかり通る」

と、いきなり馬の背から降りて、その門かんぬきを勝手に外し、さっと押開いて、

「それ行け」

と、すぐまた鞍の上に跳びつくやいな、まるで弾丸のように駆け抜けて行つた。
もちろん、番の将士は、

「待てつ」と、ささえ、

「何者だつ」

と、咎とがめることも怠りはしなかった。

しかし、次々と、関門を駆け抜けてゆく騎馬の士は、

「君命だつ、君命の急用だ」

と、呶鳴つて行つたり、

「初鹿野伝右衛門の家来」

と、大たいせい声で名乗つたり、また、

「詳しくは、帰りに、お届けに及ばん」

などといつて行くので、時しも今夜という非常時なので、番の将士も、無むげ下なこともや

りかねて、

「——では何ぞ、お館の御命をおびて、初鹿野殿の御家臣が、急用にでも向うのか」と、ついその後の闇に灰白く曳ほのしろいている馬けむりを見送っていた。

ところが、またふたたび、同じような馬蹄の音が、町の方から聞えて来た、簇々ぞくぞくとかたまり合つて駆けて来る具足のひびきも耳を搏うつ。忽ち、眼に見えたのは閃々せんせんたる長柄の刃、素太刀、槍の白い穂さき、それから弓、鉄砲なども入り交じった百人ほどの軍隊だった。

「木戸の者、木戸の者つ。たつたいま敵国の使臣斎藤下野、黒川大隅おおすみ、その余の者が、御城下の使館から逃亡いたした。——よもや通しはいたすまいな。これへ来たら、縛からめ捕とるのだ。汝らも物の具とつて、ここを固めい」

と、先頭の一部将は、そこへ来ると、急に手綱を締められて苦しげに足掻あき狂う駒をなだめながら番所のうちへ呶鳴った。

山中禅

「下野どの。うまく行つたな」

黒川大隅は、すこし先へ出たので、駒足をゆるめながら、続いて来る斎藤下野と、そのほかの面々をふり向いた。

ここまで来ると、道はまっ暗だった。ただ前面に、壁のような山岳が折重なっていることと、附近に、溪流の末らしい流れのあることだけが、水音で察しられる。

「まだ、まだ、わからん」

下野の返辞である。

おたがいの顔も見えない。そのくせ、星はキラキラ仰がれるのに、星明りも透さとおないほど、闇が厚いのである。

「たれも、落伍はないか」

同じ声が、案じていう。

副使の黒川大隅が、

「各 《めいめい》、名をいえ。名をいえ」

と、随員にいった。

越後を出て来るときから、正使の斎藤下野を初めとして、副使以下、小者まで入れて、

十名の一行だった。

「——おります。十人、一人も欠けなくおります」

やがて、誰かが、答えるのを聞くと、下野は、

「そうか」

と、安堵したようにうなずいて、しばらく沈黙していたが、やがて駒を下りた。

「——これから先は、雨乞あまごい、鞍掛くらかけ、鳳来ヶ嶽ほうらいだけと、山また山ばかり。それを避けて、八ヶ岳のふもとを、真つすぐに、一条の早道はあるが、これは信玄が、度々国境へ出馬するため、拓きり開いた道で——信玄の棒道ぼうみち——と呼んでおるもの。当然、諸所に柵さくや砦とりでがあつて、通ることはできない」

下野は敵国の地理を、わが家の庭のように説明した。そして、

「所詮しよせん、山また山を踏み越え、道なきところを、落ちられるだけ落ちてゆくしか方法はない。各も、駒を捨て、徒歩かちになられい。この溪流を渡り、彼方の山地へ入ろう」

と、いった。

悲壮な気もちが、自然、一同を無口にさせた。黙々として駒を捨てた。下野は、随員の中の小者へ、十頭の馬をひとまとめにして、附近の林の中へかたく縛くりつけておけと命じ

た。

「どうせ、敵方の馬、どうなろうと、抛ほうつて行けばよいでしょう」

先へ気の急ぐ人々はいったが、斎藤下野は、かぶりを振って、

「農家の駄馬ですら、わが厩を知って田からひとりで帰る。まして飼ひ馴れたこれらの馬は、放せば忽ち元の道へ飛んで帰ろう。さすれば、追手の手引になる」

といった。

しかし、こうした彼の智慮と周到な用意も、それから後は、いかんとも施すに術すべもなかった。

城外の木戸口を守る者の拔かりから、すでに斎藤下野の一行が、そこを突破したと知つた初鹿野伝右衛門の手勢——曲まがり淵ぶち庄左衛門の手勢などは——間もなくこの山地へ殺到して、山へ迫つて来た。

のみならず、信玄の棒道へ、忽ち、伝騎を飛ばして、先々の砦とりでと連絡し、やがて夜明けのころには、完全に、斎藤下野の一行を、甘利山あまりやまの上に封じ込めてしまった。

その行動の迅速なことや、また聯絡の手際のよさを見ても、平常から信玄の治領ちりょうのよく行き届いていることが分るのである。——それを熟知している斎藤下野は、たちまち、

これ以上、逃げようとするこの愚を悟って、

「もう、いけない」

と、甘利山中の林のなかに、どかと坐りこんで、他の随員にも、

「むだだ。逃げのびようは無い。むしろ清々^{すがすが}と、覚悟の前に、しばし夜明けの秋景色でも眺めようじゃないか」

と、いった。

「……………」

それまでは、ともあれ、血まなこを帯びて、物音に耳を^{そばだ}くんだり、逃げ口をさがしていた人々も、下野の一言に、各、悲痛な唇もとをむすびながら、

「敵を待つて、斬死^{きりじに}か！」

最後の肚を極めたらしく、下野に^{なら}倣って、いずれも、どかと、落葉の中に腰を下ろした。

甲山の秋はすでに濃く、うるしの木は、真っ赤だし、黄いろい葉には、霜があつた。――

――谷の底まで、夜明けの光が^さ映しこんでゆくにつれて、朝霧のなかには細かい虹が立ち、
禽^{とり}はしきりと高音^{たかね}を張りあげていた。

この生命

「……………」

「……………」

みんな素直だった。追手を待つて、斬^{きり}死^じと極めた顔して。

鳥の音に耳を洗い、眼に満山の秋をながめ、遠く、何事かを、想いやっているらしい。越後の故郷の秋を。

そこにある、各 の家庭を。

敵地に使いするからは、覚悟のまえだった。この期^ごになつて、もがくこともない——。しかし。

やがて、谷間から、裏から表から、これへ犇^{ひし}々^{ひし}近づいて来る敵の気はいを知ると、さすがに、膝を立て、太刀をつかんで、

「来たつ——」

「思い残すところなくやれよ」

「いうまでもない」

らんと、みな眼をかがやかし、はやくも、悽愴な氣を、眉に、唇に示し合つて、はりねず針鼠みのように、体じゆうを硬めていた。

「——なに、斬死する。ばかな、これだけでは、いかに戦つても、甲府を攻め奪ることはできぬ。よせよせ」

斎藤下野は、まぶしげに、左の悪いほうの眼を、指の腹でこすっていた。ここ十数日の苦勞に、ゆうべも寝ていないので、眼やにをつけていたのだった。

一同の眼は、その面おもてへ集まつて、

「では。……では、いさぎよ潔く、切腹するお心ですか」

黒川大隅以下、つめ寄らんばかりに彼を囲んだ。

「ちがう。心得ちがい召さるな」

眼やにを除とつて、平然たるものである。

「切腹もせず斬死もせず……しからばどうするお覺悟か」

「捕まろう。こうしていれば、捕まるだろう、曳いて行くところへ曳かれて行こう」

「そして？」

「生きのびられるだけ生きていよう。忠義は、そのほうが忠義と思う」

——意外だという顔ばかりだった。こんな卑怯なことばを下野ともある者の口から聞こうとは誰も予期していない。わけでも副使の黒川大隅は、武勇な男だけに、唾つばすることくいった。

「何が忠義か。——敵の捕虜となつて生き恥さらすことが。下野どの、おぬしにも、似に気げないおことばだぞ。すこしどうかしたのではないか」

「いやいや。それが初めから、逃げられたら、逃げ切る。それが能かなわぬ時は、素直に縄目をうける。覚悟は二つに決めていたのだ。どうもせん、それが当然だ、忠義だ」

「な、なぜ」

「これが、戦場において、捕虜となつたというならば、自ら、問題はべつになる。しかし、このたび斎藤下野へ仰せつけられた役目は、戦えというのではなかった。使いして来いの御意である。——しかもできるかぎり和睦を計つて、和談に努めよとの仰せをうけて来たもの。……かかる使者の一行が、斬死したとて、何の足しになろう」

「理くつだ。生きたいための理くつに過ぎん」

「生きたい、生きのびたい。それはほんとだ。よくぞ下野の肚はらをいい中あて召された。——だが、それがしが生きたい仔細は、決して、小我しょうがの迷慾ではない。わが君、あのまだお

若いお館の御行末、また越後一国の将来、如何あらんとか、これからの百難苦闘を思うとき、それがしは、この生命の短きをかなしむ。——甲斐一國が敵たるだけなら、それは恐るるにも足らぬ。お館の御器量として、やわか信玄晴信の征圧に亡ぶようなことは絶対にない。……だが、わが上杉謙信なる君の御胸には、もっと大きな御願望があるを知らぬか」

「……………」

「黒川。おぬしの祖先も、わしが祖先も、遠くは、新田氏の一族、脇屋義助がながれ、この血のうちには、まだ脈々と、義貞公以来のものが、失せてはおらぬはず……。上杉一藩にはお館をはじめとし、その精神をもつて、武士道の本則とし、弓矢の大願となしていること、出陣のたびにする神前の誓いをもつても、確と、分っているはずではないか」

「いや、それとても、越後武士の名を辱めては」

「生きながらえて、碌々と、なすこともせず、死んだら笑え。さもない間の毀誉褒貶など、心にかけることもあるまい。——使者としてのお役目は果した。捕まっても、生きていても何の恥かあらん。……方々も、それがしに倣い給え」

すでに。

林のまわりは、甲州兵の鉄甲が囲んでいた。槍、太刀、具足の燦めきが、木の間木の間からここを窺っていた。

牛の草鞋

緋衣の大僧正は、壇へ向って護摩を焚いていた。下には具足した信玄の体は肩も腰も丸く見える。

祈祷の衆僧と、信玄幕下の諸将も、伽藍いっぱいに立ちこめる護摩のけむりの中に、いならんでいた。——そして時折鳴る敵国調伏の鐘の音、誦経の諸声は、この烈石山雲峰寺のふもとまで聞えた。

かなり長い時間である。——十七日の午過ぎた陽はすでに笛吹川の彼方へうすずきかけている。

出陣に際して、武将が、何らかのかたちで、心身を潔斎してゆくことは、常例であるが、上杉謙信は、神式に則って神を祭し、武田信玄は、その出陣となるや、かならずこの烈石山雲峰寺に祈願をこめて進発した。

夜来、信玄はすぐ甲館躑躅ヶ崎を立ち、ここに戦勝を誇つてかつ、続々と馳せあつまる味方の参禅を待ちあわせていた。

ひとたび、彼の召しが、その勢力下に、檄となつて飛ぶとき、一体、どれほどな軍勢が寄つて来るものか。

ここ烈石山からながめても、一目したぐらいでは、量りきれぬ数である。

境内、山内、末院の庭々はいうまでもない。はるか麓の道すじや民家や田園にいたるまで、旗や大旆や馬のいななきに煙つていた。それが秋の午過ぎを、揺々と、動くが如く、動かぬがごとく、いわゆる戦氣満々に、発向——の一令を待っているのが、武者のみか、馬までが、もどかしげに見えるのだつた。

そうした中を、斎藤下野たち十名の使者の一行が、数珠つなぎに、曳かれて来たのである。当然な反抗心として、

「あいつか」

「あいつだ」

「殺してしまえ」

「もとより山上で血まつりだ」

「のめのめと、舌も嚙まずに、曳かれて来たかつ。腰抜け」

道も塞ぐばかり、前へ立つて、甲州兵や下人たちが、それを罵り喚くのだった。この使者が、舌をふるつて、味方の首脳に、和談を信じこませ、その間に、越後勢が突出して、すでに要害の地を占めたと——雑兵までがうわさに洩れ聞いているのでその激昂は一層なのであった。

片目のわるい下野は、敵中のこの空気も、半分しか眼に見えないので気楽だというような顔している。その顔がまた憎くてならない甲州兵は、

「片眼め」

「びっこめ」

と、牛のわらじなど投げつけた。しかしさすがに山上の境内に入ると、そこには、謀將旗本たちが多く居て、秩序も一そう厳肅なので、さしたる野卑も聞えなかった。そのかわりに一種、身に迫る凄気が、十名の心をしめつけた。

一塊炎

信玄は、本堂の真正面に、床几をおかせて、倚^よっていた。具足のうえの緋の衣も、その怒れる顔も、さながら一塊^かの焰^かのように見える。

階^{きざはし}の下に、十名はひきすえられた。九名をうしろに、斎藤下野ひとりは、前に突き出されて、坐ったのである。

刮^かつと、炬^{きよ}のような眼で、信玄はにらみ下ろしている。実に長いこちらのする間であった。――下野も黙然と信玄の顔を見ているらしかった。

「使者。――いや、下郎。そこな片目の足なえ。なぜ、返辞をせぬか」

斎藤下野は、信玄の感情をなだめるような、口ぶりで、

「お館には、もうそれがしの名をお忘れですか。それがしは謙信の家臣斎藤下野ですが」と、いった。

次に、信玄は、持ち前の雷声一喝^{かつ}で、いきなり呶鳴ろうとしたらしい。そうらしい血色と肩の厚い肉が瘤^{こぶ}みたいに盛り上がった。だが、四十二ともなると、若い頃の武田晴信とちがって、分別というものが、こみあげる激情の瞬間にもよく間に合うものらしい。忽ち、にやにやと笑い出したのである。そして語調を一変して、こう訊ねた。

「そうそう、越後の使者斎藤下野であったか。では、あらためて訊くが、汝等は、ついき

のうまで、わが主、謙信のことばなりと称し、ふたたび年来の和議をかためて欲しい。いかようととも和談をととのえたいなどと、慇懃^{いんぎん}、口を酢^すくし、頭を下げて、この信玄に油断させおつたが、あれは其方どもが、出立の前に、謙信から申しつけられて参つた謀略であらうな。……どうだ。汝等は、汝等の本国において、かく不意に、信玄の領地へ兵を出すものと、知つて使いに來たか、それとも、知らずに來たか。ありのままを申せ。ありのままを……」

一笑不敵

信玄の質問は、言葉の表に現わされたものだけでなく、斎藤下野の答えから、何か引出そうとする意図を裏につつんでいるようにも思われた。

いま直^すぐにも、彼自身が取る必要にせまられている作戦構想のうえに、「敵国の決意の程度如何」は、もつとも煩^{わづら}わされている課題の一つにちがいない。

その示唆^{しさ}を、下野の顔つきから、読み取ろうとするのかも知れなかった。そういう突嗟^{とつさ}の機謀は非常にするどい大将だとは下野もかねて聞いているところである。

下野は、それと覺つたのだろうか、また、どう考えたものか、そのとき唐突に、

「あははは。わはははは」

汚い前歯を吹き飛ばさぬばかりな声して笑つた。そして笑いを収めると、徐ろに答えたのである。

「甲館の主、機山大居士とは、おそるべき炯眼の持主であると、常日頃から伺つておりましたが、今のおたずねは、子どもの持つてゐる菓子をあやして奪うような御質問で、慚なからずあなた様の人品を軽からしめます」

人も無げである。信玄そのものばかりでなく、周囲にある幕将までをまるで無視してゐる放言だつた。当然、あたりに居ならぶ鉄甲燦々たる諸將の感情はうごかずにいられない。ひしひしと險惡な視線や身ゆるぎが、声なきうちに、下野を強圧してゐた。

けれども下野にはてんで無反応であつた。片目が悪いという特質は、こういう際には至極その平氣を持していやすいものらしい。しきりと一つの眼をばちばちとしばだたいいたが、いわせておくと、まだいうのだつた。

「他国は知らず、わが越後では、軍の方策も、内治の仕方、すべて謙信公の御一存であつて、諮問を受くる者も、ごく少数の老臣と帷幕のお方に限られております。何でこの齋

藤下野のごとき末輩のよく知るところでございましょうや。……それをば、知って来たか、知らずに使者に来たかとおたずねですが、問わでも、知らざる使者と極っておりますものを。……なぜなればです。もし謙信公の御胸中に、使いの口上とはべつな謀略があるのに使いするなりと、使者自身が知っていたら、敵中にまかり出て、敵の国主に対し、そう恬然^{てんぜん}たる虚構を顔に持ちきれぬものではありません。どこかに人間の正直なところが出てしましましょう。それをまた、お見のがしあるようなあなた様でもないことは、謙信公以下、越後の者共、みな心得ぬいておるところでもあります。——たとえば、今年の春、謙信公のお留守に際し、またここ連年、越後遠征に、その疲弊せるを窺い、突然、約を破つて、国境の割ヶ嶽を奪取なさるなど、猫にしても、狡^{ずる}い勘^たの長けた猫でなければ為^なし能われないことですからな」

もう一度、このあとで下野に、哄^{こう}笑^{しょう}させる違^{いとま}をおいていたら、信玄の左右の者か、或いは階下の諸将などが、彼の頭^{こうべ}へ忽ち土足や唾を加えたかも知れなかった。

しかし信玄はさすがにそれを苦笑で留めていた。かえって万一の事を庇^{かば}うように、下野の言が終るか終らぬうちその巨軀をぎしと床^{しょうぎ}几から上げて、

「この舌^{した}長奴^{ながめ}を、雲峰寺の堂衆にあずけ、信玄が凱旋の後まで、慥^{しか}と、穴倉へでも抛^{ほう}り

こんでおけと申せ。その余の輩もすべて獄に下げろ。——いずれ帰国の後にする」
いまはこんな者どもの始末をしている違などは持たん——という信玄の容子はすぐ諸將の心に映った。

信玄が、床几から身を起したことは、その一動作がすでに全軍へ向って、

「いざ——」

との発向を命じているものであった。

廻廊の東西、両隅に佇っていた螺手が、貝の口を唇に当てて、細く高く長く短く、貝の音を吹き鳴らした。

貝の吹き方は、国々で法がちがうという。いずれにせよ出征の武者たちは、その音色を五体で聞きわけて、忽ち、ひたぶるな血を沸かし、眼に戦場をすでに観ている。

また、あとに残る国中の人々も、その音に依って、軍の発向を知り、軍に従ってゆく知縁の将士を想いに描きながらその一瞬を胸の中で祈念していた。

棒道

うねうねと長い道が北方へ向つて果てなく延びている。

道の土色は新しい。近年拓ひらかれたものだということが分る。

これは地上に描いた信玄の意慾図だともいえよう。信州へ出る甲軍の軍行路だった。この直道に依れば一日半も早く国境へ行き着くという。で、百姓や旅人たちは称よび慣ならわしていた。信玄様の棒道ぼうみち——と。

その棒道なるものを、甲府を中心として、西へも東へも南へも、幾いくすじ条も持つていたために、隣接の諸国、たとえば、北条、徳川、織田、斎藤などにしても、彼と外交し、彼と戦い彼と悶もん着ちやくするなど、明けても暮れても、応接にいとまがなかった。八面六臂めんむくを相手にしているここちがする。そこで四隣の国々では彼をさして信玄と呼ぶよりも、

(甲州の足長どの)

などと称よんでいた。以て、彼の棒道が、いかに非常のときにものをいって、その電撃ぶりと共に、敵対国にとつては、苦手なものであるかという察しもつく。

総勢二万余という大軍が、そこを行く日は壯觀にちがいがなかった。八月十九日の朝すでに、八ヶ岳のふもとを、大門峠のほうへ向つて、土馬精銳の激流は急ぎに急いでいたのである。

「道鬼、道鬼」

と、武田典厩てんきゆうのぶしげ信繁はうしろを向いて馬上から呼んだ。

信繁は、信玄の弟だ。中軍二十一流の旗の下に、信玄の嫡子の太郎義信などの一族とともに進んでいた。

「お呼びでしたか」

答えたのは山本勘介、入道して道鬼と号している謀臣のひとりである。法師首に漆黒のかぶとを頂き、頬ほお当あての間から白い眉毛を植えたように見せていた。年齢としは六十を越えている。

「天気はどうだな、天気は。……そちは氣象をよく見るが、この空あいはい、四、五日はまだ持ちそうか」

「晴雨のおたずねですか」

勘介は、空をあおいで、入念に眼もとを顰しかめていたが、

「この雲の迅さ。夜に入ったら、折々、時雨しぐれはありましようが大雨とはなりますまい。日中、気の冷えぬうちは、まだ数日かような晴がつづくやも知れません」

「敵とまみえるまで、日和が持てば倅ぶせだ。——兵馬を行軍に疲らせては分ぶがわるい」

「いやいや、敵の所在は、まだ慥^{しか}と承知いたしません、このたびもまた、彼方へ行つても、長い対陣となりましょう。兵氣の倦^うむほど、長陣にならねばよいが思うております」

「はて。どうしたか？ ……。途々^{みちみち}、報らせて来る信州からの伝騎によれば、敵の謙信は、すでに犀、千曲の二川を越え、深く味方の領へ進出しているという。当然、それへ参るや否や一戦は避けられまいに」

「なんで謙信ほどな者が、いたずらに意味なき深入りをしてただ盲動をつづけておりましようや。かならず、拠点に備えてまた、意表外な変を案じておりましよう」

「そうなれば、対陣はまぬがれんが……。しかし、斎藤下野ごとき使者を向けて、わが方に油断を与え、その虚を衝いて信州へ出おつた意向から察するに、何のたいした自信はないに極つている。必勝の信念があるほどなら、あのような使者を用いて、小策^{ろう}を弄することはない」

すると、駒をならべていた兄の信玄が、典厩の横顔へ、兜の眉びさしから眸^{ひとみ}を向けていたが、

「信繁、信繁。つまらん臆測をみだりにいうな。斎藤下野も良い武士だ。主命を辱めざるものといえよう。それを用いた謙信の手際も敵ながら小憎いほどこんどは鮮やかであつた。

いずれにせよ信玄の出陣は一步出遅れとなっている。この一步を取りもどしてからが正味の戦端。――道鬼のいうとおり敵には備えもあり変もある。軽々に断じてはならん。そちの一言とて、将士のあいだへは微妙な影響をもつ。かりそめにも、敵を軽視するがごとき風をわが陣中に醸すべきでない」

と、^{いまし}誠めた。

典厩は、素直に、

「はい」

といって、傍らの太郎義信に間が^ま悪そうな顔をした。

すると、その太郎義信が、こんどは父へ向つて^{ただ}質した。

「御出陣の際、なぜ斎藤下野やそのほか不埒な使者共を、血まつりに斬っておしまひにならなかったのですか。きのうは必ずそれがあると思っていましたか」

すると、信玄の眼は、父らしいむずかしさを、太郎義信へ向け直して、

「敵の期していることは、避けたがいい。もとより彼等は、一死を捨てている。また、その一死を、^い弥が上にも、価値あらしめんと、わざわざ信玄の怒りを挑^{いど}んでおる者共だ。斬つては、彼等の思ふつばに乗るといふものである」

「どうしてですか」

「信玄の陣中に於いて、使者の一行ことごとくが、血まつりにされたりと悲壮に響き渡れば、越後勢は、聞くだに、血をいからせ、いよいよその強味を加えるにちがいない」

「でも、一と月やふた月の間に、その事実が、敵方へ伝わるわけではないでしょう」

「なんの、到着の届け出^いでは、一行十二名とあつた使者。それが昨日、陣中へ捕えられて来た数を読めば、頭数十人しかおらぬ。二名はかならず網の目をぬけて、仔細を謙信の許へ復命するものと思われる。——のみならず、越後の方にも甲州方の諜者は何十人とな^く捕えられておるし……旁 《かたがた》 斬つたところで、益のないことだ。士気を奮わ^{さん}さんが為に、敵人を血祭りに斬つて出るなどということは、下策であり、また心ある将のなすことではない。——元^{げん}寇の折、時宗公が元の使いを斬り、また遠くは高麗^{こま}百済の無礼なる使者を斬つたというような異国との断絶には当然いくらもあり得ることだが……」

そのとき、前方から、漠^{ばく}々と馬けむりが近づいて来た。

旗じるしで、すぐどこの誰の軍とわかる。敵ではない。途中に会する味方の勢の参加だった。

いま来合せたのは、善光寺近郷を領する小柴慶^{けい}俊^{しゅん}や栗田永寿軒^{えいじゅけん}などの三百騎であ

った。

これを「お出迎え」と称して、行く先々で、二百騎、また五百騎というふうには、武田与党の参加は続々つづいた。為に全軍の旗は、進みゆくほどその数を増し、兵力は一里一里にも目に見えて膨^{ぼうちよう}脹してゆく。

布陣の一石

野営、幾夜。

甲軍は、大門峠を越え、小^{ちいさがた}県から長久保へ出た。

千曲の水を見る日頃には、味方の海津城から聯絡して来る伝令の騎馬が櫛の歯をひくように敵状を知らせて来る。

「……うむ。ううむ」

とのみで、信玄は次第に無口になって、帷^{いばく}幕の人々との対談でも、伝令の報告を聞くのでも、ただ領^{うなず}きを以てするようになっていた。

千曲川の左岸をとって、更^{さらしなぐん}級郡の塩崎あたりまで来た頃には、甲府発向のときより目

立つて兵力も増加していたし、将士の面も、曠野の秋風に吹き研^とがれて、どこことなく鳥肌になっていた。

「……冷たいぞ。越後から吹いてくる風だ」

と、誰かがつぶやく。

下伊奈の下条兵部とその兵が、ここで馳せ参じた。着陣帳の到着順を見るに、日頃の味方は、一郷一村のさむらいも、殆ど余すところなく参陣したかに思われる。

——が、総体の士気はなお、どこか寒々と見えた。その原因を、士大将^{さむらい}のひとり小山田弥三郎^{のぶしげ}信茂は、

「ここへ来てから、いつにないお館の念入りな御思案ではある。こんどに限って、なぜ電撃な御命令が出ないのか」

と、みな怪訝^{いぶか}つているという点にある——と称していた。

信茂の不審は、あながち彼だけの不審ではなかった。甲府発向はあのように一刻をも争いながら、この広大な盆地に臨んでからの信玄は、あたかもわざと道草でもするように、犀川^{さいかわ}に沿い、千曲^{ちくま}の急流を測り、山に拠つてみたり、丘を擁して兵馬を休めてみたり、容易に、その拠^よるところの全陣地が定まらないもののように見えた。

二十四日に至つて、漸く信玄はその本陣を、

「はい」

と、決意したらしい。

それは更級郡の一部、信里村のぶさとむらの一丘。茶白山ちやうすやまと土地の者の呼んでいる高地である。

武田家の軍旗、一丈八尺の紺地に、

疾如風。徐如林。

侵掠如火。不動如山。

と、金色こんじきの文字を二行にしるしたものと、一丈三尺の真つ赤な幟のぼりに、

南無諏訪南宮法性上下大明神

と一行に書かれてあるものがそこに立てられた。

信玄は、その旗せいぎの鳴りやまぬ秋風の下に、床几をすえさせて、極めて、静かな眸をしていた。充分に眠りを摂とつたあとのように何の濁りにごもない眼であつた。

「解げせぬことである……」

彼の唇は、幾たびも、同じ呟きをもらしていた。

犀川、千曲川の二流を抱いている広茫な地域の彼方に、謙信の拠っている妻女山は見え

ている。

うららかに。静かに。

実に何の剣槍の気すらなく。

けれど、地形的に観るに、その妻女山の陣は、いかに信玄が多年の経験と兵法から推理しても、解きがたい謎であつた。——まるで捨身すてみのかまえとしか見えない。もし位置を更かえて、信玄がそれに拠るとしたら、信玄は決して晏如あんじょとしていられない気がする。

「死地。……好んで死地を陣にとるとは？」

智者はかえつて智に溺おぼれる——という。信玄は、誠めてみた。しかし、智を以てせずに、彼の智を観破かんぱすることはできない気もする。

「あ。——ここでもない。味方の陣は、ここでもまずい」

彼は、床几から身を捻ひねつた。

うしろといわず、陣中につめ合っている面々をながめれば——嫡子太郎義信、弟の典厩信繁、また次弟の武田逍遙軒をはじめ、長坂ながさか長閑ちやうかん、穴山伊豆、飯富おぶ兵部、山県やまがた三郎兵衛、内藤修理、原隼人はやと、山本勘介入道道鬼など、誰を、眼に求めているか、ちよつと惑まどうほどである。

山上山下の旗幟はたじろしを見ても。

甘利左衛門尉あま

小山田備中

馬場信春のぶはる

小畑山城守おばた

真田弾正一徳斎

小

笠原若狭守

諸角豊後守もろすみぶんごのかみ

一条信秀

相木市兵衛

蘆田下野守あしだしもつけのかみ

など

それぞれの陣旗がへんぽんと風に鳴りはためいて、馬のいななきや、兵の雑音とともに、天地の秋声をここに集めているようだった。

「陣払いせい。ここを去つて、雨宮の渡しまで降れ。——千曲川を前に、北の岸、雨宮の渡しをとつて、各、持場を取れ」

よほど急に思い立ったことと見えた。左右の老将や謀臣に諮ることもしなかったし、それを通じて下知げちする法もとらずに、彼自身、こう唐突に号令を出したのであった。

それとともに、信玄は、陣幕の中を歩き巡っていた。歩きつつもなおしきりに自己の智と闘っているふうだった。たとえば囲碁の名人が容易に下さない一石の前にも似ている。時に唇をむすんだまま足もとの地上を凝視ぎようししていたりした。直射する秋の下には、なおたくさんな蟻の穴に蟻が往来していた。

越路の娘

川中島という名は古い。もちろん永禄以前からのものである。

犀川、千曲川の二つの縦横な奔流に囲まれて、善光寺平の一部に三角形のひろい干潟^{ひがた}ができた。そこを「川中島」とも「八幡原」ともいうと古事記にはあるが、土着の人はもつと広義にとつて、あの辺、更級^{さらしな}、埴科^{はにしな}、水内^{みのち}、高井にわたつての一面な河原地や平野をすべて——川中島四郡と呼び慣^{なら}わしている。

「……どちらを向いても、同じような秋草の原、同じような川」

どこから来たのか。

ここにぼつねんと行き暮れたように立つた旅の女は、西を見東を見、

「どう向いて行つたら？」

と、考えているふうだった。

漆^{うるし}で塗^ぬりかためた市女笠^{いちめがさ}を被^{かぶ}つている。物売りとも見えないが背に一包みの物を負い、裾は短かにくくりあげ、草鞋^{わらじ}をうがち杖を持ちなど、なかなか凜々^{りり}しい恰好^{かつこう}である。——いい忘れたが年ばえはまだ二十歳^{はたち}に届いていまい。肌目^{きめ}のよい白い肌は雪国の処女をすぐ想わせる。そうだ、その風俗といい、目鼻だちも、越後の女に特有な美があつた。

——と、鎌の音がどこやらで聞えた。さくさくと草を薙ぐ快い音である。彼女のまるっこい眼は急にそれへ動いた。

彼方の秋草のなかに、数頭の裸馬の背が見える。刈草を束ねて馬の背に積み終った者は、それを曳いて遠ざかつて行く。——が、後にもなお一隊の草刈が、鎌をそろえて、河原の方へ刈り進んで来た。

「もし、甲州路へ出るには、どう行ったらようございましょうか」

不意に、女の声で、こう訊かれたので、草刈たちは驚いたように腰を上げた。これはみな近村の農夫らしいが、徴^{ちようはつ}発^{はつ}をうけて、馬糧を刈ったり、道を拓^{ひら}いたり、運輸の手伝いなどしているいわゆる軍夫たちであつた。

「ほ。甲州路へだつて。……だが、お前さんは一体、どつちから来なすつたえ？」

あべこべに問われると、娘は急に眼をさまよわせて、犀、千曲、何れとも分らぬ川の流れを見まわしていたが、

「あつちから」

と、善光寺の御堂があるという遙かな丘陵を指さした。

「じゃあ、北国街道を、北のほうから来なすつたか」

「——え、え」

と、うなづく。けれどそれも至つて曖昧な顔つきに見える。

軍夫たちは、叱るように教えた。——知つてか、知らずに来たか、この辺一帯は、二、三日前から戦場になつてゐる。それ故、この通り昼間でも見はるかす限りの土地には、鋤取る人影もなく、旅人のすがたも見られない。稀 《たまたま》野をよぎるものがあれば、それは鳥影ぐらいなもの……。

「それを、女子おなごの身ひとりで、こんな所、うろろしているといふことがあるものか。はやく彼あつちやい行きなされ。これから——そうよなあ——まあこの川べりに添うて、南へ南へと行かしゃれ、やがて宿場の屋根が見えよう。そしたらそこで甲州のどこへ行くとなと詳しく道くわを問うたがいい。くれぐれも日の暮れないうちに急ぎなされよ」

これだけのことを、口々に告げ終ると、幾つもの鎌の手は、また草の根へ屈みこんで、予定の馬糧を刈り取ることに向つて、その男たちも急ぎ初めた。

すると。——どこからとも分らないが、多分は、対岸からであらう。ド、ド、ド、ドン、と続けさまに五、六発の銃つっおと音がした。

軍夫たちは、一斉に、わつと喚き合つて、草の中へ俯つつ伏ぶした。——間を措おいて、また

十発ばかり弾が飛んで来た。最後の二、三発は、おそろしく標準が的確で、草の中にもぐっていた一人が脚を撃たれた。

「立つな。声を出すでねえぞ」

「……………」

非常な辛抱を続けて、なお皆、じつと寝ていた。それきり銃音はしなかった。その上に白い夕霽ゆうもやが下りて来たので……。

それからだった。そつと首を擡もたげ合つて、

「逃げろっ」

とばかり、傷を負った仲間のひとりだけを引つ担いで駆け出したのは。——ところが、皆の起ち上がった十間ばかり先に、もう一名、弾に中つて斃あれているものがあつた。何という不幸か、それはこの草刈たちに道をたずねて歩み出していたばかりのあの市女笠いちめがさの越後娘だった。

心林迷風

赤い緒のぷつと断たれた市女笠は、きのうの所に、夜を越えて、露草の中に落ちていた。
 ——けれど、その河原から約十町ほど隔てた東南にわたる一帯の草原は、一夜のうちに、まったく景観を変えていた。

きのう昼のうちから徐々に茶臼山を降りていた武田信玄の総軍は、布施五明、篠井村をこえて、ここ雨宮の渡しを前に、夜のうちに移行して、今朝見れば、中軍一団をまん中にして、十二軍団を五行に展^{ひら}ぎ、

(妻女山の謙信にもの申さん)

といわぬばかり、無数の旗^{せいき}を植えならべて、陣々、鮮やかにその旗^{はたじるし}印をさえ敵の目に見せつけて来たのであった。

(近々と来つるものかな！)

と、妻女山でも、今朝は、朝雲の断^きれ間^まに洩る陽に、それを発見するなり、眼をみはり、小手をかざしているにちがいない。

俄然、甲軍のこの物々しい意志表示に対して、今のところまだ妻女山そのものは、朝霧の中にぼうとつつまれて、夜来の陣営はいと物静かに、殆ど眼醒めているような気^けはいすら望見できなかった。

しかも、そのこと、こちら側との、距離はといえば、実に近い。

ここら辺り川幅は広いが、千曲の一水を渡れば、すぐ向うの岸は、妻女山の裾といつてもよい。

それと――

やがて陽の高くなって来る程、両軍の距離感は縮められて来る。甲軍の旌旗を煙らしていた朝霧も、妻女山の黄葉こうようや緑や紅葉もみじをぼかしていた白い霧も、次第に霽はれあがって、お互いの位置から、お互いの哨兵のうごきや繋つなぎ馬の影などが、眺め合えるくらいにまで大気が澄んで来たからである。

この日も、帷幕いばくのうちの信玄は、殆ど、床几に懸りきったまま、敵の妻女山を前に、終日黙想していた。

「……?」

彼がきのうから抱き通している疑問はなお解決せぬ面持である。すなわち妻女山にある敵将謙信の心だ、その意志だ、またその変であり、信念である。

「彼、そも、如何なる鬼謀神算があつて、かかる無謀、かかる妄もう挙ぎよ、かかる不敵を、われに示すか」

と、怪訝いぶかつてゐる信玄であつた。

鳥刺とりさしのもちに絡めからられた鳥のように、彼の心労はなお 《そもそも》、戦う意志は無

いのか、妻女山の無表情は、依然として、きのうも今日も、無表情のままなのである。

いざと、白刃の真剣勝負を約して、起ち上がってみると、相手は何の身がまえもせず、こちらの剣の鏝つばした下まで、ただ歩き込んで来たともいえるような——上杉謙信の態度といえる。

それが、白痴か、戦さ下手べたな男とでもいうなら、信玄の心労はなかつたろう。およそ、戦場において、信玄をよく知る者は信玄の帷幕いばくにある者より謙信であつた。同時に、謙信の面目を知っている者も、謙信の左右にいる者以上、信玄が詳しかつた。

疾トキコト風ノ如ク

徐シズカナルコト林ノ如シ

自ら掲げて自己の面目めんもくとしている例の一丈八尺の大軍旗の文字は、信玄の頭上にはためて、しきりと何事か、暗示しているかのよう思われた。——けれども彼の心は決して、幽林しずかの如く寂ではなかつた。

日傘

また朝を迎えた。

すでに八月二十八日。

裾花川^{すそはながわ}を辿^{たど}つて、長野、善光寺方面へ、大物見に行つていた山県三郎兵衛、原隼人^{はやと}な

どの隊が帰つて来て、

「旭城の方にも、何らのうごきは相見えません」

との復命^{もたら}を齎^{もたら}した。

信玄は、聞くと、

「確^{しか}と、旭城の小柴宮内^{こしばくない}は、城を出るような氣^けぶりでないか」

と、念を押した。原隼人も、山県も、

「ございませぬ——」と、はつきり言葉をかさね、

「妻女山の兵と、旭城の兵とが、わが軍を誘うて、挟撃^{きょうげき}に出んなどとは、思いもよら

ぬことであります。そんな憂いのないばかりか、お味方がかく双方のあいだを中断するの位置に布陣いたした為、妻女山への食糧の輸送すら敵は困難を極めているものと見られま

する」

と、明言した。

信玄の面に、一瞬ではあったが、慄然りっぜんとした気泡が泛ういた。その去ったとき、彼は、数日來の疑問を解いていた。謙信の心しんてい態がある程度、信玄の心に映じていたのである。

「伝右、伝右。——初鹿野伝右衛門やあるっ」

旗本たちの詰めている幕とばりのうちへ向つて、信玄の声がしたのは、それから間もなくであった。

「——おりまするっ」

伝右衛門は、風吹く幕の裾を走りくぐつて、すぐ信玄の床几の前にひざまずいた。

「伝右か、使いに行つて来い」

無造作むぞうさであつたが——

「寄れ、近く」

と、その威光のある眼がさしまねいたので、伝右は、何か、はっとした感じをうけながら膝がしらで、だだと床几へ近づいた。

「妻女山まで」

——後は、何を命じたか、その囁きはあまり小声で聞えなかった。もつとも信玄の側にはその時、幕将も祐筆もことごとく遠ざけられていたのである。

程なく、初鹿野伝右衛門は、敵の妻女山へ行つて、謙信と会うべく、使者たる盛装を凝らしていた。

陣羽織も更え、下帯まで新たにして行つた。戦場の使いであるだけに、血ぐさい身装や血汐の痕などは、殊更に注意して避けるのだった。もちろん敵の本営中で万一という場合、に備えての、死の「身ぎれい」も充分考慮されていることはいうまでもない。

部下を四、五名連れて行つた。

その中には、味方の誰かが率いて来た初陣の息子でもあろうか。まだ十三、四歳にしか見えない少年武者もひとりいた。その小童は、柄の長い日傘を携えて、伝右衛門がやがて陣地を離れて、千曲川の岸まで来ると、ぱつと、日傘をひらいて、主人の頭上に翳し懸けた。

この傘は決して無意味な行装ではない。

軍使の川渡りは、船中、傘をさすことが、国際法に約されているのである。傘を開いて渡つて来る舟には決して弾や矢も放たぬことになっている。

田船を大きくしたような底の平たい川船は、いま、その日傘をさし懸けた小童とその主人と、わずかな部下を乗せて、千曲川の北岸から此方へ棹さおさしてきた。——迅い水流を切つては、あざやかに棹を突いて船をすすめてくる兵の上に、赤とんぼが戯たわむれていた。棹の端に止まったり、離れたりして——。

登る妻女山

「おつ……敵方から？」

「軍使が見える。軍使だ」

妻女山の一端に立つて、絶えず対岸を監視していた物見の小隊は、こう物珍しげに、手をかざしていた。

鬼小島弥太郎は、この辺に屯たむろしている兵七十人の組頭だった。ごそごそと、どこからか出てくると、その白あばたのある顔あたりへ手を翳かざしながら、

「うーむ、あれは甲州の初鹿野はしかの伝右衛門という話せるさむらいだ。——何しにきたのか」と、つぶやいた。

当然、ここよりも早く、それを認めていたにちがいない麓の部隊から、さつそく河原の方へ向つて駆けてゆく一群が見える。約三、四十人の武者輩であつた。

こちらの岸へ、ガリガリと乗りあげてきた船の舳みよしへ向つて、

「どこへ通られるか」

と、左右二列にわかれて、槍ぶすまを突きつけている。

これはむしろ軍使を待つ儀式と叫びたい。戦わざる意志の槍の美しさ。またその白い光の中へ下りてくる日傘の色のきれいさ。併せて、軍使の悪びわるれない落着きがよかった。

「これは、甲州の臣、初鹿野伝右衛門です。主君信玄公のお旨を承つて、謙信公へ直々お目にかかり申したく、かくは戦場の小閑にお訪ねして参つてござる。ねがわくばお取次を」
「お待ちなさい」

包囲形をそのままにして、一人が部隊へ走る。やがて部将がくる。そして、

「まだ、君の御意をお伺い中でござるが、ここは路傍、それがしの陣地までお越しあつて、御休息でも」

と、自分の持場まで導いてきて、床几など与える。程なく山上から新発田尾張守しばたおわりのかみ、鬼小島弥太郎などが、迎えというよりは、警固のために降りてきた。

「お目にかかろうと御意あらせられた。いぎ、お越してください。御案内申す」

「大儀に存ずる」

一礼して、初鹿野伝右衛門は、ふたりの後あとに従った。もちろん部下も日傘も山麓に残してである。――そして単身、一步一步、踏み登ってゆく山道は、殆ど、上杉勢の旗と鉄刀と馬と銃と弓との中だった。

その途中、鬼小島弥太郎は、伝右衛門のそばに寄り添って、

「貴公は、それがしの顔を、覚えておいでなさるか」

と、たずねた。

伝右衛門は、微笑びしょうをふくみながら、

「あなたの顔は、なかなか忘れ難い。何といっても白あばたがよい目じるしになるしな――

――左様、あれはもう七、八年も前になりましたようかの」

と、いった。

「いや、七、八年ではききますまい。甲越の両軍が、まだここにまみえない以前ですから。十年にはなる」

「十年。はやいもの」

まるで久^{きゆう}潤^{かつ}を叙^のべ合っている旧友のようだった。しかし二人の古い面識は、そんな温かいものでなく、思い出せばなかなか身の毛のよだつものだったのである。

その頃、小島弥太郎は、謙信の上洛に扈^{こじゆう}従して、京都へのぼった途中から、ふいに姿をかくした。それは将来へ大志をいだく謙信が彼に承知で失^{しつそう}踪をゆるしたものだといわれている。が、主従の黙^{もつけい}契があつたや否やはべつとして、弥太郎は少なくともそれから二、三年間は諸国の武備や築城などを見て廻った。後にいうところの武者修行をしていたのである。

そして、いつのころからか、甲府にいた。もちろんそんな使命をおびている者としての入国はむずかしい。城下の鉄砲鍛^{かじ}冶の火土捏^{ほどこ}ねをしていたのだ。左官職にひとしい泥だらけな手をして、筒^{つつがね}金を焼く火土を築いたり吹^{ふいご}輻の手伝いなどしていた。

甲館に出入りする武田家の武将が、時々、馬上や平服のままで、この家の前を通る。その中に、初鹿野伝右衛門の眼があつた。或る時、彼の屋敷から注文のあつた鉄砲を、白あばたの男に届けさせてくれとわざわざ指名でいつてきた。

弥太郎は、それを届けた。けれど邸内の者に渡しただけで、その場から山越えて甲州を去ってしまったのである。門の内まで入れば、立ちどころに縄目をうけることを、彼もま

た未然に覺つていたからである。

しかし、それだけでも、伝右衛門の情といえば情といえる。彼に、必^{ひつぱく}縛の氣があるなら、鍛冶の家を直接包囲すれば遁^{のが}さなかつただろうし、また後から騎馬の追手を飛ばせば、弥太郎もついに国外へ遁れきれなかつたかもしれないのである。——けれど、その事もなく、彼は無事に、越後へ歸つた。

——それ以来の今日であつた。今日の偶然な接近だつたのである。だから二人の微笑のうちには、言外な回顧の情と皮肉な懷かしとがつつまれていたわけだつた。

首^{くび}捨^{すて}帶^{たて}刀^{わき}

戦争とは、結局、人の力と力との高度なあらわれである。古今、いつの時代であろうと、その行動の基点から歸趨^{きすう}まで人の力にあることに変りはない。政略、用兵、經濟、器能の働きはもちろん、自然の山川原野を驅使し、月白烈日の光線を味方とし、暗夜曉闇の利を工夫し、雲の去来、風の方角、寒暑湿乾の気温氣象にいたるまでのあらゆる万象を動員してそれに機動を与え、生命を吹きこみ、そして「我が陣」となす中心のものは人間である、

人間の力でしかない。

だから、戦国は、人を磨く。

また、箇々のものも、他に求められるまでもなく、各 磨かなければ、時代の戦国を生
きぬいては行かない。

どしどし踏みつぶされ、落伍してゆく。

惜しまれるものの生命すら、顧みられず、また、顧みる^{いとま}もなく、先へうごいて行く世
だった。惜しまれもせぬものの生命などは、何ともしない。

わけていま、永禄四年ごろは、後の天正、慶長などの時代よりは、もっとも人と人間が
骨^{ほねぶと}太^{あらいぎも}だった。荒胆^{あらいぎも}だった、生命を素裸にあらわしていた。

越後衆も甲府衆も、負けず劣らず、そうであつた。

対立して称^よぶところの「上杉陣」「武田陣」というその「陣」なるものは、そうした人
の力のかたまりであつた。平常の心の修養と肉体の鍛錬をここに結集して、敵味方に不公
平なき天地気象の下に立ち、

「いで！」

と、たがいの目的、信念をここに賭^とし、ここに試そうとするものである。

従つて、その集結、その「陣」を構成している箇々の素質の如何によつて、陣全体の性格と強^{きようじん} 韌^{じん} かまた脆^{ぜい} 弱^{じやく} かのけじめが決まる。

いま、千曲川をへだてて、雨宮の渡しにある武田の陣と、妻女山の上にある上杉陣とを、そうした観点から見くらべたところでは、いずれが強韌、いずれが脆^{ぜい} 弱^{じやく} とも思われなかった。どっちの陣営も、その旗の下にある宿将、謀将、部将、士卒まで、実に多士^{たし} 濟々^{さいさい} といつてよい。

名君のもとに名臣あり、ということばから推^おせば、その偉さは、やはり主将の信玄にあり、謙信にあるのかもしれない。

越後の名臣と、世間から定評あるものは、宇佐美、柿崎、直江、甘糟^{あまかす}だといわれているし、甲州の四臣として有名なものには、馬場、内藤、小畑^{おばた}、高坂^{こうさか}がある。

また、過ぐる年の原之町の合戦では、単騎、上杉勢の中へ奮迅して来て、二十三人の敵を槍にかけ、槍弾正という名を謳^{ほし} われた保科^{ほしなだ} 弾正^{だんじょう} や、それに劣らない武功をたてて鬼弾正とならび称された真田^{さなだ} 弾正のような勇士も、その部下にはたくさんいた。

槍弾正も、鬼弾正も、甲州方の勇士であるが、上杉勢の下にも、武勇にかけてなら、彼に負けを取らないほどな者は、無数といつていいほどいる。

謙信が人いちばい目をかけていた山本たてわき帶刀などは、阿修羅あしゆらとさえ称ばれた者であつた。いつの戦いでも、退ひけ鉦がねが鳴つて味方が退き出しても、いちばん最後でなければ敵中から歸つて来なかつた。そしてその歸つてくる姿はいつも兜のいただきから草鞋の緒まで朱に染まつていた。また、どんな大將首を獲つても、腰につけて持つて帰ることはしなかつた。それでは、軍功帳に記録されないで、

「折角の軍功も無駄になるではないか」

と、人がいうと、彼は、

「軍功に、無駄なし」

と、答えたという。

功名のために、首を荷にして持ちあるき、首の数など心がけていては、次々の働さまたきに邪げとなる。そういう彼の信条だつた。

で——彼のことを、首くびすて捨たて帶刀などと、越後では綽名あだなしたが、そのため軍功帳にのぼらず、長年のあいだ、足輕五十人持ぐらいの一部將にとどまつていた。

それとなく主君の謙信が、彼に目をかけてやっていたのは、そういう理由にもあるが、また、もう一つべつな事情にもあつた。

山本帶刀の実兄は、甲州の謀將、山本勘介入道道鬼だということが、たれいとうなく知れわたっていた。

よく調べてみると、父親は異^{ちが}うらしいが、幼少はひとつに育った勘介の異父弟にはちがいないことが分った。——しかし、兄が甲軍の内にあるからといって、その後、甲越両軍の数度の合戦の場合でも、帶刀の働きは、ほかの戦陣の場合と、すこしも変りはしなかった。

烈しくさえあつた。

「——さりとはいえ、兄弟両陣にわかれての働きは、人の子として、辛くもあろう、味方の者に、憂^{うれ}えたき思いをする日もあろう」

日ごろからそういつていた謙信は、永祿元年の和睦——甲越の一時的な和議のできた年に——とうとうこの鍾^{しょうあい}愛^{あい}して措かない大事な家来を三河の徳川蔵^{くらん}人^{ども}元康^{もとやす}へ遣つてしまった。ねんごろな自分の書面に、使者の芋川平太夫を添えて、

（他家へゆずり難い最愛の家臣であるが、云^{しか}々^{じか}の事情故、当人も不^ふ愆^{びん}とぞんじ、離し難きを離すのであれば、どうか末長く目をかけてやってほしい）

と、使いの口上にも意中をふくませて、その将来を呉^{くれぐれ}々も頼んだのであつた。

弥太郎・日用訓

鬼小島弥太郎も、本姓は小島、名は弥太郎かずただ一忠に過ぎないので、鬼だけは、あとから名ないたものである。

越後国上郷かみのごうの生れで、牛飼いの子だという。彼の十五、六歳のとき、狩かり獵か何かの出先から謙信が、その異形いぎようを見て連れかえり、宇佐美駿河守の組へ、

「養やしなつてみる」

と、預けておいたものだつた。

「弥太は、鬼の子か」

と、そのころからよく大人達からからかわれたものである。強ごうりき力だつたし、赤毛だし、疱瘡ほうそうのあとが面おもてを埋めていたためでもあろうが、越後国上郷は、むかし大江山の酒しゅてん顛童子が海から上陸あがつて来たところだという伝説があるので——それと彼とがむすびつけられたものらしい。

しかし、一人前になって来ると、かえつて、その名がおかしくなつて来た。おそろ

しい大酒家になった。雪国なので総じて、越後衆はよく飲むが、彼のは底ぬけといつてよい。一夜六升、一日一斗などという記録をもっていた。しかも自慢にしている風さえある。武を磨き、男を磨く、越後家中のあいだには、飲食についても、鉄則があつた。心得として藩令に出ている箇条のひとつに。

一 大酒のむべからず、たとへ酔はずとも傍目より見て危ふし。且つは五臓の患ひとなる。

一 大食は、卑劣の至りなり。小我の快樂に過ぎず。家来朋友と程々に楽しむを以つて最なるものとし、独味飽慾はいやしむべし。

一 総じて、飲食の事、能々つゝしむべき也。もし病まば一朝の戦陣に恥あり。もし命を落さば、忠孝二道にそむく。世々までのものわらひ、家門の名折れ、合戦の場において功なきにも劣る。

これは藩士一般への上杉家家訓の一節にすぎないが、謙信はなお、帷幕の上将の名を連らねて、

不識庵ふしきあん家中日用修身卷

という一種の「武士道訓」を藩の子弟たちへ示していた。

一生の務^{つとめ} 今日の事

という初めには、

一 暁起、手水仕^{てうづ}るべきこと。

神祖、仏拝の礼、勿論のこと。

一 やしき一巡見廻り、男は、髪を早く結ぶが第一也。食事調菜、二種を過ぐべからず。

一 厩^{うまや}は毎日、用なくとも、見まはり欠かざること。

一 わが家にあるは、みなわが子と思へ。慈悲、仁心、刀に打粉^{うちこ}いたすが如くせよ。

一 夜は、わが愛子たりとも、わが側に寝かすな。床^{しやうきん}衾^{おし}奉公人はあたくかに、わが

子は寒きにおけ。

——というような日常衣食住の細目から公職、交友、音信、遊樂のことまでわたっているが、とりわけ武士としての修身修養には、謙信の方針としてこう訓^{おし}えている。

一 家職のほか、ひまあらば、学文心がけべきこと。

一 詩歌は、公家の職なりといへ、武人たる者、少しは心ありてよし。無きには優る。

一 君言と臣職とは、風と草木のごとし、之を守るに鉄石なるを、実忠の臣とはいふ。

一 諸民に対し、一言一句も、争ひ論ずるなかれ、わが知ることを、人の語るもおもし

ろきもの也。わが知らざることを、人の語るに聞くは、事を知るの道なり。
古諺こげんに曰いふ。

杉はすぐ、松は曲りて、おもしろや。おのれおのれの、こころ／＼に。

一 「淋さびし」といふこと思ふべからず。見ぬ世の人を友とするも得。淋しと思はゞ家職の文ふみを開け。千万の多事急務、その内にあり。

箇条はなお多いが、部分的にこういう一斑ぱんを見ただけでも、謙信がいかに日頃から士の養成に細心な気くばりを傾注しているか——またそれを鉄則としている全家中が黙々と有事の日に備えて自分を鍛え合っているか——想像以上なものがそこにはあった。

けれど、そういう鉄則や組織はあつても、それに血も通わないような形態だけのものを持つて誇っている君臣ではなかった。以上のような鉄則にも人間の血が脈搏みやくついていたし、藩という組織もまた、人間と人間、たましいとたましいを以て結ばれていた。——だからたとえば鬼小島弥太郎のような習性でも、しばらくその中に棲息をゆるされ、また一人前になるまでは、

「困り者」

の代名詞となるほどでも、朋友から上役まで、

「いつか、何かのときには、お役に立とう」

と、その短たんを扶たすけ合あつていてくれるという風だったのである。

しかし、鬼小島弥太郎の場合だけは、そういう周囲もすこし愛想あいそを尽かし気味であつた。妻を持たせても、どうしてみても、大酒がやまない。

のみならず、しばしば謙信の明示している土道の訓くん誡かいも踏み外してしまう。

ひどい事があつた。

冬。あの越後らしい大雪の夜だつた。

春日山城のお濠と、大手との道角に、この附近の二之木戸三之木戸などを守っている番士衆の溜りがあつた。御番方ごばんがた屋敷と町の者はよんでいる。その雪と雪のあいだから灯あかりが洩あれていた。

「おいつ、開ける開ける」

と、たれかそこを烈しく叩たたいている者がある。

中では、非番が十人以上、車座になつて飲んでいた。一升持寄りというような事をよくやるそんな晩らしいのである。

「開けるな。鬼小島の声だ」

「あれに舞い込まれては堪るものではない。みんな飲まれてしまうだろう」

「ひどい雪風の音だ。聞えない振りしておれ。そのうちに行つてしまおう」

中では、それも一興にして、返辞もせず、ろ 炬の火爛ひがんを、出したり入れたりしていたが、外の弥太郎は、帰ればこそである。

「おおウい。凍えてしまう。開けてくれい。——やいつ、開けないか。知らん振りをしていてもだめだぞ。弥太郎の鼻だ。前を通つたらぶーんとにお薰つて来たではないか。この雪道、どうして素通りできる。……意地悪をするなよ。こらっ。こらッ」

家の中で、くすくすと、笑い声がしている。弥太郎はいよいよ烈しく叩いて、

「ばかだなあ、貴様たちは。せっかくおれが、酒のさかなにと、よい土産をさげて来たのにこれ無駄にするのか——折角のこれを」

ほんとはしくいつたので、その土産のさかなに釣りこまれたのか、根まけたのか、とうとう中の者も、そこを開けて弥太郎を車座に迎えてしまった。

弥太郎は痛飲した。手ぶらで来て、その五人分も飲んで、ろ 炬のそばへ、横になると、やがて高たかい 軒びきである。

「怪しからんやつだ」

と、彼のために、甚だしく淋れた座を見まわして、一人がぼやいた。

「癖になる」

目交ぜして、頷きあうと、無理に弥太郎をやり起した。そして、武士が虚言を吐くとは怪しからんと責めた。

「さかなを出せ。おい、土産はどうしたか」

一同して、責め立てると、

「さかなか」

と、弥太郎は、けろりとして、

「ここには無い」

「では、嘘か。謝れ。両手について、虚言を謝れ。さもなくば、腹でも切れ」

「ここに無いだけのことだ。何も切腹には及ばん」

「じゃあ、持って来い、すぐに」

「持って来てもよろしい。しかし——貴様たちこそ、言語道断だ」

「なにが言語道断だ」

「おれが酔うほどの酒もここにはありはしない。おれの携えて来るさかなとは、そんな安

価なものじゃない。もつと酒を調達して来い。そうしたら持つて来てやる」

「調達せんでも、酒などはまだいくらもある。汝がさかなを出さぬから控えていたのだ」

「なに、まだあるのか」

「さかなを出せ、さもなければ、両手をついて一同に謝れ」

「何の……ばかなつ。いま持つて来る」

起ち上がると、ふらふら、雪の中へ出て行つた。そしてまもなく、

「さあ、持つて来たぞ。どうだこの肴さかなは、天下の珍味、食ったことがあるか」

と、何やら手にぶらさげて来た物を、部屋の入口からさしあげて見せた。

「あつ……？」

そこにいた者はひと目見ると、悉ことごとく、酔をさましてしまった。

煩惱の鴨

弥太郎が示した物は、お濠ほりの鴨かもだった。鴨の喉首を握つて顔の上にさしあげて見せている。

もちろん、鴨は死んでいる。——そういえば今し方、雪風のなかで鉄砲みたいな音がした。ここの大土間に懸けてある鉄砲を持出して、一発に仕とめて来たものかもしれない。

「たいへんな事をやりおった……」

どの顔も、どの顔も、蒼白になってしまい、それに食慾を感じるどころではない。なぜならば、お濠^{ほりぎわ}際の高札^{こうさつ}にも、

鴨捕ること厳禁

と、はつきり書いてあるし、日ごろから主君の謙信のことばにも、

「——濠^{みずどり}の水禽も、要害の一ツ」

という事を聞いている。もちろん犯す者は死罪と、先代の主君のときから極^きまっているものである。

弥太郎は、台所の方へ通りながら、しいんとしている連中を見下ろして、

「誰か、鍋^{なべ}をかけろ。そのまに毛をむしって、おれが料理してくる」といった。

忠実に、彼は、台所の外へ出て、毛をむしり、肉と骨をほぐして、やがて大皿に盛って来た。

けれど、もう誰も、そこには居なかった。

「……どうしたんだ、皆は」

と、呟いたが、べつだん怪しもうともせず、ひとりで鍋をかけて、ひとりで食って、そのまま寝てしまった。

その代りに、夜が明けると、役人が来て、彼を物々しく取囲み、城内へ拉^{らっ}して行^いってしまった。

謙信の前にひきすえられて、

「何故、禁を犯したか」

と、詰問されたとき、彼の答えはすこぶる平凡だった。

「どうも日ごろから、お城の往^ゆき還^{かえ}りに、あんなに沢山飛んでいるのを見ると、いちど食^くってみたいという慾心が出てなりませんでしたので、その煩^{ぼん}悩^{のう}をはらす為、思いきって、一羽頂戴いたしましたしてござりまする」

謙信は、苦笑してしまった。といっても、これだけの返答で免^{ゆる}されるはずもない。いづれ弥太郎のことだから生涯の詭弁^{きべん}をふるったろう。それも詭弁とは分っているが、もともと鴨一羽ぐらいで大事な臣下を殺したくないのが謙信の本心であつたろうから、何とはな

く、謹慎^{きんしん}程度でゆるされてしまった。

弥太郎の失踪は、それから間もなく、謙信の上洛の途中に起り、三年目に帰藩してから後初めて公然と、前の罪もゆるされる形になった。のみならず、彼自身の人間も、武者修行中にすっかり変つて、いわゆる智勇を兼ね備えて来たので、役付も次第に取立てられ、功も積んで、今では一方の部将として、世間の人々のあいだに、

「甲斐の初鹿野伝右衛門は——」

といわれれば、かならず、

「越後に鬼小島弥太郎がいる」

と、すぐ思わされるようにまであつていた。

香車

その初鹿野伝右衛門は、きよう武田方の使者として、この妻女山の陣にのぞみ、はからず旧知鬼小島弥太郎に会つて、謙信本陣の小屋がある山上まで登つてゆくうち、敵味方とも思われないほど、親しげに語らいながら歩いて行つたが、弥太郎がこの人物に傾倒して

いるいわれは、あながち甲府に潜^{ひそ}んでいた時代に、彼のために救われたという一片の私情だけによるものではなかった。

その為^{ひととなり}人を、甲府にいたころ、何かと聞いていて、

「甲府の中でも、武士の中の武士」

と、ひそかに認めていたからである。

そのころ、甲府の町にまで伝わっていたはなしに、こんな噂もあつた。

躑躅^{つつじ}ヶ崎の館^{やかた}で、伝右衛門が君前から退がって来るとき、殿中のお次の間に、御坊主の

刀がおいてあつた。

過^{あやま}つて、それを伝右衛門が、踏みかどうかしたもののか、御坊主が立腹^{りふく}した。甚だしく赫^か

怒^{くど}した。

「此^{このほう}方のたましいを、何で足にかけられた」

と、御坊主も武士並^{なみ}にいうのである。

いったい坊主はひがみッぽい。武勲というものを持たないから武勲の士に対してひがむのである。そして内政的な権力によって対抗^{たいかう}を計る。そんな感情が日頃にある。故に、こんな時とばかり承知しない。どうしても肯^きかないのである。

「申しわけない。かくの通り、伝右衛門、両手についてお詫びいたせば」

彼は、平伏して、飽くまで詫^あびていた。それにもかかわらず相手の坊主は、
「詫びただけではすまされぬ」

といいつのり、果ては、伝右衛門が、いかにせばよろしいかというと、

「あなたは、わしの刀を足げにした。わしだって、せめてそのあなたの頭へ、一拳^{けん}与える
ぐらいな返報をせねば、虫がおさまらぬ」

と、いうのだった。

伝右衛門は、平伏したまま、身をすすめて、

「然らば、どうか」

と、頭をさしのべた。

御坊主は、力まかせに撲^{なぐ}つた。

はなしは、これだけのことに過ぎないが、甲府の城下民は伝え聞くと、

「さすがに、お偉い」

と、みな伝右衛門の心事を解して同情した。

なぜならば、伝右衛門が、戦場に出るときは、常に兜^{かぶと}の前^{まえ}立^{だて}にも、その旗さし物にも、

将棋の駒の「香車」^{きようしゃ}を印としているほどの勇士であることを、誰も知っているからだ
 った。

後には退かじ——という意気をその「香車」の前立に旗印に公約している人だった。その
 お人が、ただ心なく、御坊主の勢力におそれて、その拳^{こぶし}に頭を打たせたはずはないと、
 誰しもすぐ察しられて、一しお床^{ゆか}しげに伝えたものだった。

このことは、ずっと後に、大坂城中にあつた木村重成のこととされて、重成の^{ひととなり}為人
 を知る逸事の一つとなつてしまったが、伝右衛門であつたというこの方が、それよりも以
 前に民間では語られていたらしい。

——それはともかく。

ここ妻女山の陣中を、使者初鹿野伝右衛門は、鬼小島弥太郎の案内について、やがて謙
 信の座所へ行った。

謙信は、報らせによつて、はや床几について待つていた。

眼点の人

使者迎えは、近衆の和田喜兵衛であつた。陣幕の外に佇^{たたず}んで、これへ来る敵方の使者を待ちうけていた。

「……ああ、静かな」

鬼小島弥太郎やそのほかの者に導かれて、これまで来た使者の伝右衛門は、思わず足を止めて、そこらの木々の梢^{こすえ}や禽^{とり}の声など、振仰いだ。

そして、心ひそかに、

(血臭い身装^{みなり}を改めて来てよかった)

と思った。殺伐な風采で、いきり立って来たりなどしたら、それだけ物笑いにされたらうと思った。

それほど、辺りのたたずまいは、ひそやかであつた。甲冑の影や剣槍の光は見えても、決して、一人の使客を恫喝^{どうかつ}しているものではなかつた。虚勢らしい物々しさなども感じられない。

しかも、百坪ほどの幕囲いの周り^{まわ}は、きれいに箒目さえ立っていた。まるで隠^{いんじや}者の棲^すむ山中の閑居にも似ている。きれいに掃かれた土の上には松落葉がこぼれていた。

ここに謙信が陣したのは十六日頃、そしてきようは二十八日だった。そのあいだには、

雨も降り風も吹いた。従つて雨露を凌ぐに足るほどの仮屋の屋根も囲いのうちには見える、杉皮、檜皮などでそれを葺いてあつた。

「お使者どの。では、われらはここで退がり申す。あとは使者迎えの御案内について参られい。すぐそれに見ゆるが、謙信公のお在であるお座所でござれば」

弥太郎たちは、役継ぎを済ませると、麓のほうへ降りて行つた。——当然、伝右衛門の身は、和田喜兵衛の手にうつり喜兵衛は彼を導いて、幕露地のあいだを幾筋となく曲つて行つた。

「お控えを」

と、促されて、使者の伝右衛門は、いよいよ眼のまへの薄い布一重の向うに謙信が居ることを知つた。

与えられた楯の上に、彼はしずかに坐つた。楯は陣中の敷物であり、座を取る場合は武者坐りであつた。いわゆる胡坐を組むのである。

「……………」

正視している目の前の幕が音もなく取払われた。同時に伝右衛門は頭を下げた。そして謙信の声を聞くとともにその面を上げていた。

「武田家の臣、初鹿野伝右衛門であるか。先頃より対陣のまま、まだ一戦も交えぬに、折入つての使い、そも何事をこの謙信に齎もたらそうというのか。機山大居士だいこじが託し向けられた旨、早速に承ろう」

謙信のことばであつた。

伝右衛門はそこでもう一度、はつと頭かしらを下げ直した。答えは何もあわてるには及ばない。そう自分へいい聞かせながら、幾つかの呼吸を腹の下に調える間に、彼は篤と目を凝こらして、初めて仰ぐ不識庵ふしきあん謙信なる人の人がらをその眼の点に烙やきこんだ。

客来一味

謙信は、芝生しばふに床几しよこをすえ、至極、清楚せいそなすがたを、それへ倚よせていた。

黒糸おどしの具足の上に、菊桐を透すかした胴肩衣どうかたぎぬを羽織り、皮鞆の長太刀を横たえているに過ぎない。——ただ樹の間から映さす秋の陽に、鎧よろいの金小貫や太刀金具が身をゆるがすたびに燦きらめくため、それが甚だしく人の眼を射る。

とはいえ、謙信の眼まなざしは、敢えて人を圧するものではなかった。豊かな頬うぐいすに、鶯

茶ちやの禪家頭巾の裾が垂れている。その柔らかさと、その眸とは、不調和なものではなかった。

わけても、伝右衛門が眼をひかれたのは、一隅に置かれてあつた十七絃の唐琴からことと小鼓であつた。明珍みようちん作りの南蛮鉄に銀の吹返ふきかえしのある兜かぶとは、そのわきの具足櫃ぐそくびつのうえに常住の宝物のごとく据すわつていた。

琴と、兜と。

そして、この人と。

伝右衛門は見くらべた。いやそれはもう二義的で、彼は憤つっしみながら謙信に対して、使者としての口上をありのまま伝えていた。

「——さればです、主人信玄公の御諠ごしようには、このたびの御挑戦こそまことに遺憾至極。かの割ヶ嶽の一条を以てのお憤りならめとは拝察いたしおられますが、それには、仔細ある事、また、その儀とあれば、いかようにも、御和談も相成るべきを、さはなくて不意の御出陣——この上は、永禄元年の御条文も、すでに破棄あそばされたものと所存いたすしがあるまじ。……と、左様に心得て、甲軍の同勢も、かくはこの地まで御挨拶に出向き申した」

「むむ、……そして」

と、謙信は笑靨えくぼをつくる。

伝右衛門はやや語氣に力をいれていった。

「——就いては、主人信玄公の申さるるにも、甲越の両家、ここの山川に弓矢の嵐を呼び、相互の士馬軍略を競うきそこと、大戦三、四度、小競合こぜりあいに至っては、幾十回というを知らず、天下の物わらい、百姓の難儀、このたびこそは快く一大合戦こころよを遂げて、雌雄いずれとも勝敗を明らかにいたしとう存する旨くれぐれも謙信公へ申し入れよとのお伝えでござりました」

「ほう、左様か。本懷本懷。——謙信もまた同意なりと、立帰ったらよろしくいうてくれい」

「然る上は、忌憚きたんなくお伺い仕りますが、犀、千曲の二川を踏み跨いで、かくも深々と、御陣取の態は、さすがに御武勇、独自の胆略と信玄公にも眼をみはられて、武門に生れ、好い敵を持った倖せと申しおられますが、そも、あなた様におかれましては、これより海津の城をお攻め取あらんとする思召しですか、それともまた、このまま、信玄公と平場押しに御一戦のおこころなりや、お伺い申して参れとの、主人からの命にござります。――」

―確^{しか}と、御返答^しいただきとうござります」

「これは近ごろ御入念なことである。割ヶ嶽の一条といい、またこの戦場といい、お招きも席も、主役は甲斐の機山大居士と存ずる。そちらは亭主、こちらは客。――されば、馳走の膳も、客来一味の簡粗^{かんそ}たるも、山海の珍饌^{ちんせん}を以てお待ちくださるも、御随意にお始めあるがよろしかろう。謙信、そのほか連れ者も、みな北国そだちの齒の根達者、構えて、献立に骨抜き^{くせき}の御斟酌^{ごしんしゃく}は要りもうさぬ。はははは……まずまず、御返辞は右の通りである。――伝右衛門とやら、今日の使い、大儀であつた」

と、謙信は、さつさと自分から対談を切上げて、傍らに控えていた老将に何やらいいつけると、後方の幕を揚げて、飯屋のうちへかくれてしまった。

客迎えの和田喜兵衛、老将の旨をうけて、残された使者を、幕圍いの外へ誘^{いざな}い、べつな飯屋に席を設けて、酒肴^{しゅこ}をもてなした。

「主君謙信公からのお心づけです。陣中、何もありませんが、ほんのお弁当がわりに」

こういう中の使者に対して、行届いたことと感じながら、伝右衛門は杯をうけた。喜兵衛は、白木の折敷^{おしき}に着を取り分けて、

「ただ今、鬼小島どのを、これへ呼んで参りますから、悠々^{ゆるゆる}おはなしを」

と、会^え釈^{しゃく}して立去った。

川原の花

折敷の上の肴を見ると、この辺の川魚や蔬菜ではない。越後の海の物だ、また雪国の珍味だった。酒はもちろん清酒ではない。しかし甲斐や信濃のそれとは比較にならないほど香りが佳^よい。——こんなものまで携^{たずさ}えているようでは、兵糧の荷駄にもおそらく莫大な量を積んで来ているにちがいない。

伝右衛門はすぐそんなことを考えめぐらしていた。そのうちに、鬼小島弥太郎が、ただ一人で接待に来た。

「ここでは、どうか御遠慮なく、おくつろぎ下さい」

弥太郎はまず自分から打解^{うちと}けて見せた。そして、こうもいった。

「御主君には、往年、この弥太郎が、甲府の御城下にまぎれこんでいた時、あなたの為に、難なく国外へ出ることができたという——あの事を、てまえから聞いて、知っておられる。それ故、わざと御接待に出して、旧情を温めよとの、有難い思召しかと思われます。……」

改めてお礼をいう。あの節は、お見のがしにあずかつて忝^{かたじけ}うござった。お蔭に依って、以来越後に帰国、こうして御奉公しています」

「いやいや、お礼など、かえって迷惑じや。御辺^{ごへん}はどう受け取っておられるか知らんが、伝右衛門としては、かりそめにも、敵方の間諜たる者を、見のがした覚えなどはない。――ただ貴公が、姿を変えて甲府の鍛冶の家に火土捏^{ほどこ}ねをしていた姿は思い出される。けれど、そういう例は、敵味方、まま有りがちな事といえる」

「そうそう、その御一言で思い出した。あなたには、幾人の御息女がおりですか」
「むすめ共^{ども}のことをお訊ねか」

唐突なのに愕^{おどろ}いたのであろう。伝右衛門の眼にそんな光が見えた。この戦場の空、しかも使者として臨んでいる敵陣の中、五体のどこをさがしても全く無い憶^{おも}いを、強いて求められた狼狽といえる。

「長女も次女もすでに他家へ嫁し、ほかに娘とよぶ者はおらぬが」

「いや、おられるでしょう」

弥太郎は、笑った口へ、杯の酒を含んだ。

「それがしが甲府にいたころ、そのころ、まだ十歳にもならぬ愛くるしい御息女がたし

かにおられた。町でも見、御社みやしらの庭でも見、よく覚えておる。——ところがその後、年を経て同じおひとを、春日山の御城下に見た。何とそれが、上杉家の臣、黒川大隅家のやしきに召使となつておる。聞けば善光寺あたりからさる者の世話で、大隅家の一人娘の傳こ女しもととして雇い入れたものという。……名は鶴菜つるなどの、左の唇のほとりに黒子ほくろがある。そしてどこやらあなたの面ざしにも似かようておる」

「……………」

「伝右衛門どの、善光寺詣での折にでも、そうしたおむすめ御を道で落した覚えはありませんか。もしお尋ねならば、いるところをお教え申したいが」

骨太い戦国武者のあらぎもが、この時もう伝右衛門の肚はらに甦よみがえつていた。ふいに、杯の酒を手から揺りこぼして、笑い出したものだつた。

「いや、そういわれて、伝右も思い出してござる。真まことに数年前、善光寺辺で末娘をひとり見失い申した。それが越後に拾われて行つたのを、貴公がお見かけなされたとは、奇縁奇縁。さだめしよい年ばえになつていましような。さりとて、見たい気もいたさぬ。おる所にいさせて天意におまかせしておこう。元々もともと、迷い子にした子でござれば」

「さて、氣づよい親御どのではある。そのお子が、いるところにおるなれば、それも宜よろし

かろうが、それがしの知るところでは、鶴菜どのはもう越後にいません。それもごく近日越後を脱して、親兄弟のいる空へ帰りかけた。だが、惜しいかなまだ甲州の地を踏まぬうちに、ここらあたりでまたはぐれたらしい。こんどは眞まことの親御の手に拾い上げられてほしいと念じていることであろう」

「なに、このあたりで——」と、伝右衛門は思わず杯を下に置いた。そのとたんにまた彼は人の子の父になつていた。断たつても断つても断ちきれないものに繋がれている自分をもがくように膝をすすめた。

「……ほんとでござるか、それは。いま仰せられたことは」

「何で、このような戯たわむれを、この際に」

「ど、どうして、彼娘あれがこのあたりになど」

「仔細は存ぜぬ、しかし昨夕、千曲川の向う河原に、どこからともなく彷徨さまようて来た旅の女がいました。馬糧を刈つていた武田方の軍夫に道でもたずねているふうであつた。常時、この妻女山に立っている物見は、武田方とみれば容赦はしません。四、五挺の鉄砲をならべて人夫共を撃ちました。その一発が、あわれ、鶴菜どなのどこかに中あたつた。——よう似ているがと、同じこの山から、それを凝視ぎょうししていたそれがしがしまったと、かけ下りて

来て、物見の足輕どもを止めた時はもう間にあわぬ。すぐ川を越えて、救いにと考えたが、待てと、考え当ったのは、ふたたび川の此方へ連れ戻ることが、鶴菜どのにとつて幸か不幸か、それでござった。――きよう夜があげてみれば仆たおれているすがたもない。足輕のはなしによれば、草刈人夫の百姓が、夕闇にまぎれて、遠くどこへやら担ぎあげて逃げて行つたという。……さては怪我はしても生命はあつたものであらう。そんなことを、朝から思つていたところへ、折も折、あなたという対岸の敵陣からのお使者。偶然ではありません。善光寺如来のおひきあわせかも知れぬ。……御陣務、お暇はあるまいが、もし何ぞの御寸暇でもあつたら、この川中島の界限かいわい、遠からぬ百姓家に手当されておるかと思つて察しられます。尋ねておあげなされ。いや如来の御手をさし伸べてあげなさい」

弥太郎は、銚子を取つて、使者へ酌つぎ、また自分へ酌ぎ、しきりと杯をかさねた。
伝右衛門は、つと席を退がつた。

「御芳情にあまえた。充分にいただきました。御君側へ、よろしくお伝え下さい」

「お帰りになれますか」

「ここは免ゆるされざる私の草くさ。長居は惧おそれがあります。……なお、また、最前からの其そ許のお志には、何と申すべきか、お礼のことばも弁えぬ。甲冑を解けばそれがしとて、

世の親とかわり無き者でござるが、確^{しか}と、物の具を体している身には、たとえ眼の前に、親の死、妻の涙、子の血しおを見ようと、何の覚えはありません。自身の合戦があるのみです。――従つて、今よりお断り申しておくが、今日、ここに御辺と酌み交わして、明日犀川、千曲の流れの畔^{ほとり}で、御辺と兵馬のあいだにまみえようと、初鹿野伝右衛門が槍先は決して鈍るものではござらぬぞ」

「御念には及ばぬ。その儀なれば、鬼小島弥太郎とても」

ニコと笑つて、彼も起つた。

「――では、麓までお送りしましょう」

虚相実相

日傘を翳^{かざ}した使者舟は、ふたたび千曲の水を渡つて、対岸へ歸つた。

遙か、雨宮の渡し一帯にかすんでいる甲軍の陣気は、いかに使者の歸りを待ちぬいてゐるか、その旗叢^{はたむら}に鳴る風の音にも知られるほどだった。

「初鹿野どの、今、歸られました」

中軍にある信玄へ、こう早口な声がつたえられると、帷幕の空気は俄然色めいていた。伝右衛門はつかつかと通つて、信玄とその一族諸大将の床几から遠く平伏した。

「……どうだった」

信玄の問いである。

率直な問いに、率直な答えをもつて、伝右衛門は、観て来たところをいった。

「——敵営は非常なる落着き方です。謙信の眉宇^{びう}にも必勝を期しているかの余裕がうかがわれます。また将士もみなこんどは死を誓つて国を出て来たかのようにです。陣中の清楚、秩序の整然、一糸の紊^{みだ}れも見えません。以上、綜合して愚察しますに、妻女山の布陣は、決して彼の無謀、無策ではありません。さりとしてまた、企画ある兵略とも思えません。——そこでいえることは、無策の策、無法の法ということです。素裸の陣です。捨身の斬込みを構えているものです。さもなくしては、あのように、主将謙信の中軍に禅寺のような虚^{きよ}が感じられることはありません。虚即実です。何か、そこへまいったせつな、身ぶるいのわくような虚相と実相の両面に押し挟まれた気がしました。ゆめゆめそれへ夜討^{ようち}朝駈^{あし}けなどの奇兵を出すべきではありません。実相の内に囲まれても、虚相^{くう}の空^{くら}に囚^{とら}われても、悉く生きて帰ることはできないでしょう」

と、縷々述^るべた。

もちろん、こちらの口上に対する、謙信の返答も、ありのまま、それはその通り口写しに話した。

信玄は、沈黙して、終始、耳をかたむけていた。毛の生えている耳の穴のわきに一すじの血管が太く膨^{ふく}れていた。

日の没するまで、ここの陣中は何やら騒然としていた。それは妻女山の中軍とはまるで正反対なものであった。信玄のいる帷幕には、彼の一族と甲山の星将とが半日も鳩^{きゅうしゅ}首して、その人々が入り代り立代り出はいりしていた。陣外の馬匹までが、ここでは実にやかましいほど、悍^{かんき}氣を立てていない。

墨のような秋の夜が、また虫の音と星ばかりな天地を現じた。陣々から霧のような炊事のけむりが立ち昇ってから程なく武田方の旌旗は徐々うごき出した。千曲川の上流へ向つてである。もとより妻女山の敵はこれを凝視していると見なければならぬ。移動中の側面へ向つて、いつ何時、対岸から弾丸の飛雨と騎兵隊の猛突が水けむりをあげて猛撃して来ないと計られない。その備えは充分に構えながら――、すこぶる危険な払い陣を敵の眼の下で行っているのだった。

その蜿蜒えんえんたる黒い流れは、千曲川の水幅よりも広く長いかと思われた。そして夜半ごろ、先鋒の一部はすでに千曲の支流、広瀬のあたりを渡渉としようしていた。

「……読めた。信玄の肚は」

妻女山の上では、謙信がきつとこう呟つぶいていたにちがいない。——甲軍が広瀬の流れを渉わたりにかかったことは、直ちに、その全軍が海津城へ赴おもむこうとするものであることを察するに難くないからである。ひとまず海津の城へはいつて、その味方、弾正の人数と合し、更にその兵力を大にして、信玄があらゆる智略と用意をもって、この妻女山へ答えようとするものであることが、謙信の胸には、北斗を数えるように歴々と分っていた。

陸の島々

戦略的な眼で、平野を海洋と見るならば、飛々とびとびにある丘や山は、これを大洋の島々として、その利用価値が考えられてくる。

妻女山に謙信が陣したのも、逸早く、前進拠点として、地の利に拠ったものであるし、信玄が、平地から陣を払って、海津の城へはいつたのも、

「素裸の地に長陣^{ながじん}は危ない」

と、考えたからにちがいない。

その意味で、城もまたひとつの島といえよう。天険に人工を加えた陸の要塞^{ようさい}港である。海津の城は、三方に山を負い、西の一面だけが、港の口のように、平野に向っていた。その下を、千曲川が流れて、自然の大外濠を成している。

「海津の城を見ずには城を語れない」

これはよく、築城術に熱心な当時の武辺者のあいだで、いわれていたことばだった。

甲斐の名将、馬場民部少輔^{しょうぶ}信春^{のぶはる}が、苦心の縄取によるものだともいうし、いや、山本勘介の構想だと称するものもある。

いずれにせよ、ここは越後の国土にたいして、いつでも無言にものをいつている。武田方の突角だ。

武田方としてみれば、この国境の遠くまで、事あるたびに甲府から出動して来ることは、並たいていな軍旅ではない。

故に、常備の要塞兵を置く必要があつたし、また、大軍が出て来たときの拠地^{よち}ともなし、なお長陣に互^{あひ}れば、その蓄蔵食糧、馬糧、武器弾薬庫などが、極めて重要に役立つこと

になるのだった。

こういう条件をもつ必要は、もちろん上杉方にもある。甲府からここまでの距離を較べれば上杉方の本国からここまでのほうが、ずっと距離は短い、道路の悪さは甚だしい、やはり、本国を離れての外地戦であることに変わりはない。

だから彼にも、水内郡みのちぐんの北に、髻山たぶさやまの砦とりでがあつた。けれど謙信は、そんな拠点な
どを遠くうしろに捨てて、この敵地深くへ、南下していたのである。

また旭山の一城は、髻山の砦よりも、この戦場の地に近い善光寺と犀川の間にあるのだから、大いにそこは恃たのむべき拠点であるにもかかわらず、謙信は、それすら遙かに捨てて顧みもしなかった。

初め信玄が茶臼山から雨宮の渡しへ陣して、その旭山城と妻女山とのあいだを遮断するに至っても、妻女山の謙信には、好んで死地を迎え、その孤立を光榮としているものしか見えぬ。四十余年の半生を、きょうまで殆ど戦場に過かぎて来た信玄も、まだ、曾かつて
こういう敵を見たことがないし、こういう陣法のあることを知らない。

啄木の戦法

狭間はざまの外は、乳いろに煙っていた。霧とも小雨ともつかないものが降っているらしい。

「兵部は、どう存ずるか。忌憚きたんなくいえ」

信玄の眼がそそぐ。琥珀こはくの玉のような眼だ。その眼のうごきを中心に、きょうも軍評定いくさだった。

海津城の中である。大仏の胎内にでも居るように薄暗くて洞然どうぜんたる感じがする。

昼間だが、所々に、燭が置かれ、湿々じめじめとまたたいていた。

評定に列しているのは、一族、宿将、城主の高坂弾正こうさかだんじょうなど、極く限られた範囲の有資格者だけに過ぎなかった。

飯富兵部虎昌わぶひようぶとらまさは、甲山の猛虎といわれている勇将である。——名に反そむかず、彼は、信

玄から発言を求められると、ためらうことなくこういった。

「かかる無為の長陣も、毎日の御評定も、それがしには、無用と申しあぐるしかありません」

「無用とな」

「士気を倦うましめるに役立つっているばかりです。御軍勢一万八千が、甲府表を打立つとき

は、そのまま一驀^{ばく}に、妻女山を揉みつぶし、一挙、越後領までも、ひた押しにせんず意気込みでした。然るに、その事もなく、いたずらに御陣を更^かえ、敵をうかがい、謙信の心を測^{はか}りなど、いつになきお迷いを示され、更に、当城へお籠^{ぶり}りあつて、かくの如き連日の御軍議に過^あぎされておいで遊ばす為——当然、兵は無^ぶ聊^{りょう}に倦^うみかけております」

この人にして、これくらいな直言がいえたといえよう。信玄はむつつりと、厚^{あこ}い顔を、すこし上^{うわ}向きにして聞いていた。

——それから？

と、次のことばを待つような顔をしていると、兵部は、なお語気をつよめていった。

「心なき物の影も、心ありげに観^みれば、種々に観てとれる。敵の妻女山を繞^{めぐ}つて、謙信の心を測っているのは、あたかも月夜の物影は、悉く物の怪^{ものけ}の如く疑いあやぶむ愚^{おろか}にも似ておろう。それがしが観るに、謙信に策無しと存^{ぞん}ずる。彼になんの策あるに非^{あら}ず、ただ味方のものの思い過^あぎしじや、われと我が影を投^なげて、それを解^とかんと苦^く念^{ねん}する業^{わざ}にも似ておりましょう」

「うむ、それも一理」

信玄は、敢て、叱りもせず、反対の言も吐かない。おもむろに、また真^{さな}田^だ幸^{ゆき}隆^{たか}をかえ

りみて、

「そちは」

と訊く。

幸隆は、ことば短く、

「兵部どのお説、ごもつともと存じます」

とのみ答えた。

「逍遙軒には、どう思うな？」

傍らの弟へ向つて、信玄はまた同じようなことを訊ねた。

武田逍遙軒も大体、飯富兵部の説を支持して、

「かかるうちに、越後表から更に大部隊の援軍が来合せ、お味方のうしろを断ち、或いは、
もつと意表外な作戦に出て来ないとも限りません。その上でのおうごきは、^{すべ}総て、^{ごてご}後手後
手と相成りましょう」

と、つけ加え、

「また、当信州は、すでにあらまし甲州の御勢力下にあるものを、その信州へ、深く抛陣
を突出して来た謙信に対し、しかも遙かに、その敵方より多くの大兵数を擁しておるわが

甲軍が、遅疑逡巡^{ちぎしゆんじゆん}して、いつまでも手出しも、行動もできぬとありましては、いかにも謙信の器量を怖るるかに見えて、信州諸郡の民心に反映するところも如何^{いか}かと思われる。故に、御決断は一日も早いが利かとぞんじまする」

「うむ、む」

信玄は、それへも頷いた。

そして、独り言に、

「軍評定には、いつもこの信玄に向つて、良い師言を吐く老人、小畑山城入道は病んで死し、原美濃守もまた先年の割ヶ嶽の取潰しに当つて深傷^{ふかで}に臥^ふし、ここ、この時に、ふたりの言を聞かれぬは、何やら淋しい。——この上は、道鬼にたずねよう。道鬼、そちの所存は」

と、山本勘介入道道鬼のほうへ面^{おもて}を向けた。

勘介は、もの堅い老人だった。いつもこの老参謀の言は、信玄と相^{あいそむ}反く場合が多い。

なぜならば信玄は果断直行に富み、この老人は、ひどく要心ぶかいからだった。

ところが、きょうの場合は反対であつた。常に積極的な信玄がなおうごく気色^{けしき}を示さず、いつも消極的な献言をする山本道鬼が、口をひらくと、明快にこうすすめたのである。

「誰方どなたやら最前——敵は無策なり——と喝破かつぱせられた御一言、それに極まるものと、わたくしめも、同感にござります。ただし、その無策は、無智の無策、無謀の無策とは、まったく違うものです。思うに、謙信のそれは、生死をこの一戦に賭し、ふたたび越山の郷土は生きて踏まじ——勝たでは踏まじ——としておる恐ろしい決死の無策と観るべきで、お味方のお覚悟も、よろしく、彼に劣らぬまで、必死を以て当らねばなるまいかと思われる。そして、それと知るからは、何のためらいや候うべき、彼の望みにまかせて、すぐにも粉砕ふんさい撃滅を与えてやるが、お味方にとつても、唯一つの御方針と申すしかございません」

「では、あらましの者が、速戦即決に出よというのじやな」

「まず……」と各、各の面を見交わしながら、

「それと、決まったようにござりますが」

「よし」

信玄は、厚い膝がしらを、組み直した。そして、初めて自分の決心を告げた。

「評定もきよう限り。謙信に何の策もなきこと、この信玄も今は観ていた。謙信みずから死屍ししをこの地へ埋めうずに來たとあれば、信玄もこころよく思い残りなき一戦をして見しよう。

——道鬼、その戦いに、啄木たくぼくの戦法を試みんと思うがどうじゃ」

「啄木の戦法と仰せられますか。さすがに御明察。この際、あの敵、至極妙かとぞんじまする」

そのとき城外の濠ほり際ぎわで、何か喚わめきあう大声が聞えた。席にいた高坂弾正が、何事かと立って、狭間から首を出して覗き下ろした。信玄以下、諸将もみな、しばらく口をつぐんで、弾正の背を見まもっていた。

「気が立っておる。……お味方の足輕共がまた喧嘩でもしたのではないか」

小山田備中守がうしろからたずねると弾正は、狭間から引っこめた首を振って、

「いやいや、おとといの晩、ひそかに出した大物見の一隊が、ただ今、ひどく射ちへらされて、残る七、八名もみな浅傷深傷あやでふかを負い、城門まで立帰って来たのでした。——あの様子では、よほど深入りして、上杉勢の前哨に取囲まれ、辛からくも馳せ返ってきたものでしょう。委細は聞き取って、後よりまたこれへ来て御報告いたしまする」

そうつげると、弾正は、信玄のゆるしをうけて、あわただしくここから一人だけ退席した。

弾琴

物見のやりとりは、互いに繁^{はげ}しい。

死を賭して、敵の本陣へ近づくしか、敵の核^{かく}心^{しん}を知る道はなかった。

ふつうの物見は、もとより小人数で行く。一人か二人の場合もある。

ところが、海津城から出た小物見では、生きて帰ってきた者がいない。

そこで高坂弾正は、おとといの晩、二十五名組の大物見を出した。これなら敵の斥候隊と出合つても、それを殲^{せん}滅^{めつ}して哨兵線を突破することもできようし、あわよくば妻女山の本陣まで接迫して、一人や二人は、何らかの情報^{もたら}を齎^{もたら}して来るだろうと期待していたのである。

「又六。もどつたか」

弾正は、楼を下りると、すぐ城^{じょうかく}郭^{かく}の一室へ、物見頭の高井戸又六を呼び入れて、報告を迫っていた。

又六も、左の手を負傷して、肱^{つぎき}のつがいを、接木^{つぎき}のようにボロでまいていた。

「多田を越えて、大村まで参りましたれど」

「なに、大村までしか行けなかったと」

「敵の伏勢に囲まれて、さんざん討ちなやまされ、漸く、七名だけ遁れてきたような有様でして」

「あとはみな討死したのか」

「いえ、べつに、その前から、二人だけは、百姓姿にして、法泉寺の山から大迂回に、土口のほうへ忍ばせました。これが、生きて帰って来れば妻女山のもようも知れようかと存じます」

弾正は、落胆した。

兵は失ったが、得るところはなかった。で、信玄の君前にまた軍議の席へ、何の披露する材料もなかったが、その翌々日の明け方、もう期待していなかった物見のひとりが帰ってきた。又六の大物見から離れて、山また山を迂回し、首尾よく妻女山の本拠を窺つてきたという殊勲者であった。

ところが、折角、そういう虎口に入って、得難い敵の実状に触れてきながら、生憎と、その殊勲をあげた物見は、この近郷に生れた樵夫あがりきこりで、魯鈍と実直だけを持った男だったため、弾正の質問に対して答えるところが頗るあいまいで要領を得ないものだった。

以下、その質問と、彼の答えとを、並べてみると、こんな風である。

「おまえは、妻女山まで行つたか」

「へい。参りました」

「妻女山のどの辺まで」

「山の上から、方々、歩いてきました」

「どうして敵に捕まらなかったか」

「わからねえでがす。おらにも」

「妻女山には、何があつた」

「上杉方の武者衆が、たくさんいました」

「山上まで歩いたならば、謙信のいる本陣も見かけたであろう」

「へい。ちょうど、山の上に一晩夜を明かしましたで」

「本陣を窺つたか」

「夜半に、琴の音が聞えましたで、はて、変だなと思ひながら、木の蔭を、ごそごそ這つてそこまで行きました」

「琴の音が？ ……。琴の音とは何じや。夢でも見たのではないか」

「おらも、初めは、夢かと思いましたが、覗^{のぞ}いてみると、大将の謙信が、小さな唐琴を、膝にのせて、弾いておりまして、やっぱり夢でなかったと思いました」

「覗いたとは？ どこを」

「^{かがり}篝の燃えている本陣の内を」

「そこで、謙信がただひとり、深夜、琴を弾じていたと申すか」

「ひとりでございませぬ。陣幕^{とばり}の裾のほうへ退がって、若い大将、髪の高い大将、何やら五、六人はおりましたが、みな、居眠っているのやら、泣いているのやら、首をうなだれて、じっとしておりました」

「謙信の弾く琴を聞いていたのであろう」

「そうかも知れませんが」

「その臣下へ向って、謙信が、何か申したか」

「琴を弾いては、雨曇りの月を仰いで、低^こ声に、歌を謡っているだけでした」

「陣中のさむらい共は、みな元氣にみちていたようか」

「馬ばかりよく嘶^{いなな}いておりましたか」

「馬のことではない、士氣はどう観えたか」

「よく分りましねえだ」

「兵糧は有るようか無いようか」

「ありません」

「ないか」

「ありません」

「士氣の旺さかんか否かも分らぬそちに、よく兵糧の有無が分ったな」

「足輕や侍の喰っているのを見たら、玄米ではありません、粟あわ粥がゆや芋粥です。それから、

荷駄馬の骨が捨ててありました。馬の肉も喰べています。山中どこを見たって、豆俵も米俵もありませぬし」

「どうして無事に帰って来られたか」

「雨宮からずっと下流しもへ戻って、八幡原の向う側を、ぶらぶら歩いて帰って来ました」
いくら根掘り葉掘りたずねても、結局、こんな程度であつた。

だが、それを伝え聞いた信玄は、

「それも勇士だ」

と、いった。

そして、厚く褒美をやれと命じ、その覚束ない敵状資料をつぶさに含味して、何か、彼としては充分に、得るところはあつたらしい。

月はこえて、もう九月の上旬である。去月の十六日、ここに陣して、すでに二十日に余る上杉軍としては、よほどな兵糧をあのに運び上げない限り、兵糧の欠乏ははじめていることは想像できる。

決死捨身の彼の布陣も、そのあいだに、だいぶ意気は消耗したろう。必死の気も、刹那のものだ。その気負いきつた鋭角を外はずされるとまた、ふだんの煩悩ぼんのうに回かえる。

今や謙信以下の者は、自ら潔いさぎよしとなしていた無策の陣に、かえって、虚無を感じ、危懼をおぼえ、退くに退かれず、進むに進まれず、妻女山一帯を生ける屍の墓地としてしまっている。そうだ。それにちがいない。

信玄は、そう考えた。

そして、それを撃滅するには、急ぐにも当たらない。むしろここ数日はなお過ごしたほうが得策であるかも知れぬとなして、ひそかに、彼が画策している啄木の戦法なるものを、手ぬかりなく配備し、また十分な効果をあげるべく、人数の割当、部将の配置、時刻、行動、地の理など、鋭意研究し、まだ準備にかかっていた。

その啄木の戦法というのは樹^{じゆたい}体の洞^{うつろ}にふかく隠れ、容易に外に出てこない虫の群^{むれ}を、樹皮の側面から嘴でたたいて怯^{おび}えた虫の群がぞろぞろ表面に出てくるところを、思いのまま餌として胃へ呑み下してしまうという、いわゆる啄木^{きつつき}なる鳥の智をそのまま理念にとつて、乾^{けん}坤^{こん}も震う一大殺戮^{さつりく}戦を果たそうとするものだった。

白珠一万三千露

長陣となると、倦^うみ易い。

敵には強い兵も、退屈と闘うことは容易ではない。

倦^うみ——飽^あく。

この惰^だ氣^きからわく霧のような心中の敵は、ともすれば不平をささやき怯^{ひる}みを誘い、仲間同士のあらを挙げては不和を醸^{かも}し、また、郷愁を覚えさすなど——あらゆる煩惱の弱点を衝^ついて、鉄壁の士氣を潰^{かい}乱^{らん}しに蒐^かつて来る。

一日とて長い長い戦場だ。それを二十日も一月も対陣のまま、じつと息をこらしている兵は、外には戦っていないが、実は箇々の心の内面に、戦い以上の闘いをしている。

——己れに勝つ！

これへの闘いである。これはまた外の敵に打勝つよりも難しく、より以上の烈しい氣力を要するものであり、長陣となればなるほど濃くなつて来る日にちにち々の声なき苦闘であつた。

だが。

ふしぎにも、この妻女山の兵には、そんな沈ちんでん澱は見えなかった。

日々、爽やかな秋が送られている。雨の日とて、霧の日とて、じつと一万三千余人の心が、ひとつ塊かたまりりになつたまま、蕭しょう条じょうたる中に、煙つていた。これを、不動の体とか、朝霧の陽に霽はれあがるときなどは、全軍ひとつの精神から湯氣が立ちのぼっているように見られた。

理由は、何でもない。

倦怠や郷愁やまた怯きよう氣などという果てしない迷いは、生命の安全感が比較的多いところしつように身を置いているときほど執しつ拗ように作用して来るのだつた。最先鋒よりも中軍、中軍よりも後陣といったふうにある。

だが、この妻女山には、先鋒も銃後もない。敵の海津城と相距へだつこともわずか一里弱で

しかなかった。晴れた日、その山から望めば、かの白壁も、かの旌旗も、あざやかに見えるのだった。今朝ある生命いのちも夕べは知れず、夜に結ぶ草間の夢も、あすは知れない生命の露のきらめきに似ている。――ふしぎとそれを観じるのは事なき平常の日の甘い観念にほかならない。ここまで迫るとまったく箇々の生命も研みがき澄ました白珠のようになっていた。あらゆる迷執もふり落されてかえつて洒々しやしやくらく落々たる天真な笑顔の中に生きていられるのだった。いわんや、この秋とき、ただ今日のため、不断に磨き競つて来た越後上杉の武者輩しやばうが、この期ごにおいていのち以上のいのちとする士の「道」を鈍にぶらすわけもない。

菊一枝

「短気すな。権六」

「だいじょうぶで」

「どれ。おれが代つてやろうか」

「いえ。もう少しですから」

権六は、身を逆しみにして、自分で掘った坑あなの中に首を突つこんでいる。坑の中から主

人に答えているのである。

鬼小島弥太郎も、共に屈みこんで、側から径二尺ばかりな坑を覗きこんでいた。権六の手はその足もとへ、鶏のように土を掻き出している。

——と、うしろの木の間^{こま}を、かきこそと、静かに歩いて来る人があつた。櫨^{はぜ}の紅い葉が、その人の肩に舞つた。

「弥太郎。何しておるか」

声に驚いて、ふたりは振向いた。坑^{あな}から首を擡^{もた}げた権六の如きは、泥になつたその顔と両手を持つたまま、悪い事でもしていたように、びっくりした様子で後へ飛び退^のくなり平伏してしまふ。

「お、これは、わが君でござりましたか」と、弥太郎も多少まごつき顔に——「徒然^{つれづれ}の余り自然^{やまのいも}薯を掘つておりました。これなる若党が、薯掘りの上手なりと、自慢いたしまし、また大いに英気を養わんとぞんじまして」

謙信は苦笑した。本陣のすぐ下の崖ではあるが、近侍もつれず唯ひとりだつた。歩み寄つて、薯の坑をのぞきながら、

「なるほど、自然薯か。さても根気よく掘りおつたな。さあ、掘れ掘れ、遠慮すな」

と、促して、

「——有難や、地下にもなお、この天禄があるか。地上の物は、ここ数旬の滞陣に、あげ
び、胡桃^{くるみ}、榎^{えのき}の実、山葡萄^{やまぶどう}、食える物は零余子^{ぬかご}にいたるまで喰べ尽したかに見らるるが、
……弥太郎、まだまだあるなあ」

「はい。ありますとも、なお喰おうとすれば、草の根でも、土でも」

「ウむ、む……」

と、笑^えみ頷^{うなず}いて、

「麓^{ふもと}の者共も、みな元気か」

「されば、ひとりだに、退屈しているものはございませぬ。……が、君には、ただおひとりで、何しにお徒歩^{ひろい}でございますか」

「わしも、退屈せまい為じや。野菊の花を捜しに出た。しかし、この山には、寔^{まこと}に菊が少
ないとみゆる」

「ございませぬか」

「……見あたらず」

「麓の方で見かけました。採つてまいりましょう」

「そうか。一枝でよい。見当たら持つて来い」

「後刻。自然薯やまのいもといっしよにお届け仕ります」

「自然薯もくれるか」

「御献上いたしまする」

「折もよし、遠慮せずともらつておこう。野菊の一枝も、待つておるぞ」

謙信は、踵きびすを回かえすと、またひとりで、山の上の本陣——陣場平とよぶわずかな平地へ向つて、ぶらぶらと登つて行つた。

重陽

朝のうちはあんなにからりとしていた秋の日が、午頃から曇り出して来た。妙高も黒姫も遠い山はみな霧にかくれた。ここ数日来、高原地方の天候は定まらないとみえて、真下の千曲川も彼方の犀川さいかわも、甚だしく水かさが増したかに見える。

「もうよろしい。——みなに来いといえ」

謙信の声であつた。時雨しぐれもよいな雨気を帯びた風に、四囲の陣幕とばりがしきりにはたはたと

鳴る中からの命であつた。

侍臣が、答えるとすぐ、どこやらへ駆けた。

山の諸所に分れている各部隊の陣所へであるらしい。ほどなく招かれた諸将が前後してここへ入つて来た。――直江大和守、柿崎和泉、甘糟近江守、長尾遠江など、いわゆる帷幕の重臣のみだつた。

「ほう。これは」

入つて来るなり諸将はみな眼をみはつた。広やかに筵むしろが敷きのべてあつたからだ。しかも各の坐るべきところには、白木の折敷おしきと杯はとが備えてある。膳部の折敷には、ちようど出陣かちいくさか勝軍ことほを祝ぐ時のように、昆布こんぶと栗などが乗つていた。柿の酢すあえだの、干魚を煮びたした肴なども見える。ほんのわずかずつではあつたが、自然薯やまのいもも磨すり卸おろしてあつた。

「何事のお召かと存じましてまいりましたが……これはまたいかなるお歓よろこびの祝宴にございますか」

甘糟近江守がたずねた。

十名からの宿将たちが、のこらずそれへ着席したのを見てから、謙信はにこやかに、

「山中暦日無しというが、去月十四日、春日山の城を立てから今日でちょうど二十五日目、月もこえて、九月九日。……思わず久しい長陣とはなった。各も、昼夜、戦のほか
に他念なく、疲れもしつらん。旁 《かたがた》 きようは祝うべく楽しむべき日だ。糧
米すらに事欠く中、何も無いが一盞酌み交わそうぞ。さあ、くつろいで杯を挙げよ」
といった。

謙信のことばの中の情味をまず酌んで、諸将は杯へ唇を触れないうちに胸を熱くした。
直江大和守が、なお訊いた。

「きようは、楽しむべき日だとの御意にござりましたが、何ぞ、お心祝いの御事でも？

……」

「否、否」

謙信は面を振って、
おもて

「そちたちも忘れたか。九月九日、重陽ちようようの佳節。きようは古いにしえから菊見る日とされてあ
る」

「おう！ ……」みな膝を叩いて、

「左様左様。何さま今日は、菊の節句でござりましたな」

初めて、人々の眼は、筵むしろの中央にある一脚の経机にそそがれた。小さい鶴首つるくびの銅花瓶に、一枝の黄な野菊が挿してあつた。それが単なる意味の菊でないことに漸く気がついたのである。

「九月九日、九は陽数という。重陽とは陽気重なるという旨であろう。また、菊は延寿の象徴ともいう。漢土にも伝えがある。汝南じよなんの恒景こうけいというものの家に、或る日、一仙人がのぞいて曰いうには、この秋、災厄あり、それを遁れんと思えば、紅絹もみふくろの囊ぐみに茱萸ぐみを入れて臂ひじにかけ高き山に登れと。恒景、教えられた如くすれば、果たしてその年、疫病諸村に充ち、家畜鶏犬までもみな斃たおれ、ひとり恒景の家のみ難なく寿を全うしたという。——わが朝でも、平安の頃よりは、禁裡きんり殿上といわず、四民の家々でも、菊を見て心を樂しませ、菊酒を酌んで体を養う。またこの日、高きに登れば、幸いありといひ慣なわしておる。……謙信いま、求めずして、妻女山の地に在り、しかも一日の寿、なお天日に恵まれ、かくの如く健けん。樂しむべきではないか。祝わずしてどうしよう」

謙信はよく語つた。

またよく杯を啣くんだ。

努めて、諸將の神心を、長陣の鬱氣うつきを、散ぜんとするもののように。

菊を見ながら、諸将もみなよく杯を挙げた。歓語は沸き、鬱気は飛んだ。だが——しかもなおどこやらに、去りやらぬ一抹まつの愁うれいがともすれば沈みかけるのは、どうしようもないことだった。

「殿つ……。愚存を申しのべたく思いますが、おゆるし給わりましょうや」

ついに、忪こらえかねたものの如く、直江大和守が口をきった。よくぞ、いい出してくれたといったげに、右側の長尾遠江守は、眼の隅から大和守を励ました。そして斉ひとしく、残らずの者の眼が、謙信の面へあつめられていた。

謙信の鳳眼ほうがんは、ぽつと紅をふくんでいた。一同の容子に、彼も、やおら杯を下において、

「実綱さねつなか。——何が述べたい？」

と、敢て耳を傾けた。

献言百諫

直江大和守実綱は、謙信の父祖以来三代に歴任して来た宿将中の宿将である。

彼の才幹と忠節は、諸人のみな認めていたところである。謙信の信愛もただならぬものがあつた。にもかかわらず、このたびの出陣以後には、まだ曾^{かつ}て一度も、この元老の献言にも耳を仮^かしたためしがない。また、特に諮^{はか}ろうともしないのであつた。

大和守に対してすらそうであるから、他の諸将にはなおさらのこと何の評議も求めていない。しかも一日一日、ここの危地は陣地として最悪な条件を加えている。一日停まれば一日の危機が深まるといつてもいい。一万三千の生命^{いのち}が、いま飢えるか、ここに墓石を積むかにまで、現実^{じやうじつ}は迫つていた。

「——抑 《そもそも》ここの御進退を、如何あそばすお心にございましょうか。日頃の御豪気、御雄胆など臣等^{しんら}のいささかもお疑い申しあげる仕儀にはござりませぬが、既に、何よりは御携帯の兵糧が、いまは全く尽きております今日……」

「その事か」

と、謙信は至極手輕に、

「その儀に就いてなれば、疾^とくここに陣した初めに、呉々申し渡してある。謙信に何ら策無し、無策を以て策とする、虚^{きよはく}白、無縫^{むほう}の体。そんな事、何度という要はない。ただ一言でも悟り得いなか」

と、いつにない叱り方だった。

「はいっ……」と、恐懼きょうくしながらも、こう主従顔のそろった絶好な機を逃のがすまいとするものの如く、大和守は喰いさがって、

「畏おそれながら、わが殿の大腹中、いのちを一つと誓い参らす臣等として、分らないで如何いたしましょう。——さはいえ、敵の信玄は、去いぬる後あと月の二十四日以後、海津の城に入つて、悉しっかい皆戦備をととのえ、糧かてを満たし、万全を期してなお動かず、飽くまで、お味方を長陣に倦うませ、ひとたび虚あらば、電撃一挺、必勝の勝目を見て事を果さんものと、いわゆる満を持して機を計るの自重をかたく持つております。——顧みて、お味方を案ずるに、今となつて、善光寺方面より兵糧の運輸を計らんにも、途中、武田勢の奇襲あるは必定。また、それらの通路も遮断されて、御本国との書状の往来すらままならぬことは先にも度々申しあげてある通りです。かくて、穀糧はいうに及ばず、士卒はもう死馬を喰い、木の皮を煮、じつと、お旗本のうごくまではと、弱音もふかず頑張っておりますが——かかる敢なき我慢がどれほど続くものではありません。——何とぞ御賢慮一変、いまのうちに、何らかの御善処を仰ぎたく、われら寄り寄りにこの数日は、その事のみ心痛にたえず、実は打揃つて、おねがいにより出んかと私議いたしていただくでござりました」

「それ程にか。……はてきて、誰も彼も、じつとはしておられぬ性分とみゆる。——ならば訊ねてみよう。汝らの考えから先にいえ。いったいここをどうしたら勝目がつくと申すのか」

「われわれの愚存では、すでにこの妻女山の御陣は深入りに過ぎ、敵の大軍が、海津に拠り、諸道を占めた今日となつては、はや変ずるに至難となりましたものの、なお、今のうちなれば、万策無きこともないかに思われます」

「奇をとつて変ずべしとか」

「さればです。ここに菱^{いしゆく}縮^{とぼ}し、乏^{ろうまい}しき糧米を喰い細らせてあるよりは、むしろ堂々、正攻法を取つて、海津の城お取詰あそばし、諸道の敵の散軍を、個々撃滅なされたほうが、遙かに、御榮譽ある戦と考えまするが」

「いやいや、海津を攻めるほどならば、信玄が甲府を出ぬうちに攻める。それすら、彼もし驟雨の如く来て、甲府の大兵いちどに後詰^{ごづめ}せば、味方必敗のかたちに墜^おち入るべしと、さし控えていた謙信が、何を今更、そのような暴戦を敢て選ぼうぞ」

「それも不利、また無謀との御意なれば、このたびの御出陣は、足ならしの儀にとどめ、一応御帰陣あつて、また来春を期し、改めて御発向^{べはっこう}あそばされては如何でござりますか」

「左様な意志はない」

「かかる儀は、やや取越し苦勞にすぎるやも知れませぬが、武田方の軍勢はお味方の二倍、その一部を、海津にとどめ、あとの勢を以て、突如に越後領へ駆け入り、万が一にも御本城春日山を取巻きなどいたした場合には……」

「あははは。さもあらばあれ、おもしろき戦いくさになろう。信玄越後へ攻入らば、謙信もまたたくまに甲府を席卷し、彼の甲館こうかんへ乗入らんこといと易い業わざだ。——しかもわが春日山の留守には、なお二万の兵と、一年の矢玉は蓄えてある。何の何の、あの賢さかしらの信玄が、左様な目先の見えぬことをするものか」

いつか、陽は沈みかけている。陣幕とばりのうちははや黄昏たそがれめいた。寒々と落日のこぼれてくる時雨雲の下に、諸将はみな霽はれない眉をして立ち上がった。謙信のことばは遂に、その日もわれに策なしに尽きていた。——そしていつか人声もなくなった陣中には、二カ所の篝火と揺らぐ夕闇と、時折、木の葉が雨かのように降る微かすかな音しかなかった。

遠けむり

すめろぎの 天の日嗣ひつぎと

嗣ぎてくる 君の御代御代

隠さはぬ 明き心を

すべらべに 極めつくして

仕へくる いや継ぎ継ぎに

見る人の 語りつぎてて

聞く人の 鑑かがみにせむを

あたらしき 清きその名ぞ

おほろかに 心思ひて

むな言も 祖おやの名断つな

大伴おほともの氏と名に負へる ますらをの伴とも

まだ九月九日、重陽の宵である。謙信の多感たかんはなお微酔びすいをのこしているのか、夕餉ゆうげの後、ひとり唐琴を膝に乗せて、指に七絃を弾じ、微吟びぎんに万葉の古歌をうたっていた。

大伴家持やかもちが、一族の子弟に与えるため作ったものという「族やからに喩ゆす歌」だった。篝火の松薪まつぎが、パチパチと、小雨にはぜる。

濡れるほどではない。木の葉交じりに、ばらばらと降りこぼれては、その雨雲のあいだから重陽の夜の月は白々しらじらとここの山河を照らしていた。

「雁かりの声だな」

ふと、眉をあげる。

謙信の顔に、月が白かった。

幕の裾に遠くひかえていた老近侍と若ざむらいが、共に顔をあげた。主君の唇がむすばれ、琴がやんだからである。

「はて？ ……。誰だ」

謙信はふと、本陣の上にある大きな樹木のうえに、人影がひとつ、鴉からすのように止まっているのを見つけて、凝視し出した。

が。すぐそれは味方の物見が、昼夜交代で、海津の城を不斷に見張っている——その役目の者と気づいたらしく、

「あの男を呼び下ろして来い」

と、命じた。

心得て、近侍のひとりが、すぐ馳け出して、間もなく樹上の物見の男をつれて来た。謙

信自身が、親しく召寄せて訊くなどということとは、あいだに無いことなので、男は何か落度でも咎められることかと、畏怖いふしている容子であつた。

「こよいのような晩でも、海津の城は望めるかの」

謙信の質問は平易なことでありその声はやさしかった。

物見はやつと安心したように答えた。

「月のある間はおぼろながら見えますが、月が隠れると殆ど何も見えません」

「それはさうだろうな」と笑つて、

「間断なく、樹上におけるのも大儀だの。こよいは海津の方面に、何の変つたこともないか」

「はい、何も異状はございません」

「さうか。千曲川の河原の方にも」

「先程、城の西口から河原の低いほうへかけて、いつにない煙がたちこめて見えました。

初めは、夜霧かと思ひましたら」

「——煙が？」

「左様でございまする」

「今もか。……今もまだ、煙が見えるか」

「まだ、薄々と、立ちのぼっておりまする。てまえ、考えまするに、夜食の炊事の煙とぞんじます。かような雨雲の晩なので、常のようのにのぼらず、城壁から低く低く立ちこめますので、初めはちよつと怪しみましたが……」

「よしつ。去れ！」

それは一喝の声に近い。何ものに衝たれたのか、唐琴も膝から落ちるにまかせ、謙信は、途端にぬつと身を起して、物もいわず、陣幕の外へ大股に出て行つた。

明暗刻々

謙信は佇立ちよりつしていた。

陣場平じんばだいら

——その本陣の位置から更に一だん小高いところの山鼻はしの端まで登って、凝然といつまでも立っていた。

近側の諸将や、旗本たちは、

「や。何事が起つて？」

と、附近の幕圍かこい、小屋の内から、わらわらと彼のすがたを追って来て、そして遠くにう

ずくまり合っていた。

「……………」

ここから見る千曲、犀川の上流、約一里弱の彼方に海津の城はある。山また山の遠くから、ここ妻女山の裾まで一帯につづいている広い盆地の平野もことごとく一望のうちにあった。

「……………」

謙信のひとみは、彼方の海津城の一点にむすばれている。いつまでもその凝視をつづけていた。

けれど宵は暗い、おまけに雨雲空。

その雲間から一瞬の月が映し、また一瞬に暗雲が閉ざした。明滅定まりなく、天地は絶えず暗くなったり明るくなったりしていた。

「駿河はおるか。宇佐美はおるや」

「おりまする」

「直江、甘糟もこれへ来てみい」

謙信はうしろへ向ってさしまねいた。

宇佐美駿河守、直江大和守、甘糟近江守の三人が、つと側へ寄って、謙信の面を仰いだ。
——謙信の眼はなお遠くへそそがれたまま足もとに寄った誰をも見ようとはしなかった。

「殿つ。……何か、敵の海津にこよい異変でもお認めになりましたか」

「あれ、見よ——」

白々と、そのとき、月は謙信の面から全山河を照らし出した。指さす謙信の手まで白かった。

「最前から今もなお、海津に煙が立ち昇っている。常の夕炊ぎなら時刻はもうちつと早
いはずじゃ。それにいよいよ旺さかんにたちこめるは、日頃の炊煙にしては夥おびただすぎる。——思
うに、明日明後日までの兵糧までとのえているとみゆる。必ひつじよう定はこよいのうちに海
津の大軍、城を出てわれに戦いを仕掛くる意志と見えた。——うれしや、よろこばしや、
時は来たぞ」

「素晴らしい結んで、更に一語、

「こちらも、支度だ」

ニコと、真実、よろこばしげにいった。

無策はやはり単なる無策ではなかった。この機を待ち澄ます呼吸いきだった。鼓を打つにも

「間」は計る、あらゆる芸能にも「間」は必要という。兵法の妙機も「間」にあった。

「防備は、いつなど、抜かりなくついております。敵来たらば、願うでもない倅せ、一段、二段の柵まで踏ませず、ただみなごろしを加えてくるるばかりです」

宇佐美も甘糟も、忽ち、防禦防戦とのみこんだものらしい。謙信がいった——支度を——という意味をである。

で、言下にこう答えると、謙信は、否とかぶりを振って、幾分、笑いをふくみながらいった。

「ここは仮の足場、ただ彼の変を待つための足溜りに過ぎない。彼すでに変をあらわす、謙信にも自ら取る位置がある。防禦防戦、総じて、受身はとらず。謙信が望みは春日山を発してから寸毫すんごうも違えていない。すなわち飽くまで攻勢に——踏み込み、踏み込み、信玄の陣中へ謙信の陣を持ち入るにある」

そして、矢立やたてを求め、筆を把とつて直ちに、出動の準備と心得方とを、数箇条に書いて、「すぐこれを各部将の手勢へ布令ふれるように」

二、三将の手にゆだねた。

奇と正

軍令状は、すなわち軍法である。

いま謙信の手から発せられたそれには、こう書き流されてあつた。

一 味方士卒にいたるまで、唯今より即刻、兵糧をつかい申す可^{べき}こと。

一 有^{ある}限^{かぎ}りの物、腰兵糧につくべし。要は明日一日の分にて足る。

一 かねてこの事ながら甲冑^{ゆう}弛^{ゆる}みあるべからず。草鞋の緒かたくせよ。持道具めいめい

日頃手馴れの物たるべし。奇を好み、身に過ぎたるは持つな。不得手の獲物損あり。

一 亥^{いげ}の下刻^{げく}（午後十一時）陣払い。

一 陣所立ち退く前に、諸所の篝火は殊更つよく焚き捨てよ。紙旗、有る限り立て残す

べし。

一 敵^{せん}先^{ぽう}鋒^{ほう}の散兵、間者輩、疾^とく山へ潜り入ること備うべし。味方、山を出るあとに

なお百名の屈強は残し行くべし。敵の忍びあらば逸せず討果すこと。

一 予が中軍の馬廻り、大勢は無用、ただ十二人と定むべし。

千坂内膳 市川主膳 和田兵部 宇野左馬介 大国平馬 和田喜兵衛 芋川平太夫

永井源四郎 岩井藤四郎

竹俣たけまた長七

清野国生

稲葉彦六

以上は、書付触れであつたが、そのほかこうじゆ口授伝令で、麓の諸部隊にまで告げ渡つて行つたことばには、

「明日、御大將には、にわか遽に、御帰国のお旨、仰せ出された。故に、ただいまより匆々そうそうに、荷にづり梱を仕舞い、荷駄にくくし付けられい。火急なれば、亥の下刻前に御発向仰せ出さるるも計り難い。いつなん刻じきにてもすぐ腰立つようお構えあれ。もし途中、敵軍の遮さえぎるあらば、切つて善光寺へ出ずるものとお心得あつてよからう」

もちろんこれは寸前まで味方の士卒のあいだにも兵略の機微きびを漏らすまいとする万全の用意から出た揚言ようげんであつた。

一方――

その夜、その時刻のころには、甲軍の海津の城でも、戦気殺気、みちみちていた。

二万の軍勢は、はや一人のこらず、足ごしらえまで済まして、城郭じょうかくの中の広場に、

大奇の部

大正たいせいの部

の二手にわかれていた。

腹いっぱい、兵は飯も喰べ終っている。腰兵糧も十分に持った。鉄砲隊は、各 火徑を二尺五寸断^ぎりとし、束^{たば}ねて二つ折に腰にさげ、革の弾^{たまはこ}筥二つ宛^{ずつ}、これも左右の腰帶にくくる。

大部分は、長柄隊である。三間柄、二間半などという長槍を林のごとく持つ甲州自慢の中堅で、いわゆる騎馬精銳中の精銳は、多くこの組にあつて、

「この一期に」

と、迫る一戦に、腕を撫して、大功を心がけているのである。

「どうしたのだろう」

「まだかなあ」

犇^{ひし}めき、犇^{ひし}めき、二万の兵馬は、限られた城郭の中だけに押しあい揉み合いして、ひたぶる進軍の令を待ちしびれていた。

信玄もすでに身を固めて、望楼^{しやうろう}に床^{しやうぎ}几^ぎをすえ、眼の下に揺れ合っている味方、遙かな妻女山の方へも、こよい一^{ひときわ}際、らんらんとしている眼をくばっていた。

かかる間際にも、甲軍の物見は、どうして嗅^かぎつけて来るものか、妻女山の動静をつたえて、

「敵はこの宵から荷駄荷柁(にこり)をくくり始め、どうやら彼処(かしこ)の地をうごく気配に窺(うかが)われます」
とか、また、

「越後勢は、明日陣払いして、本国へ引揚げる様子」

とか、いう情勢(もたら)を齎(もたら)して来る。

「さてこそ」

と信玄は、作戦の図(あた)に中つて来たことを喜悅(きえつ)していた。

月の入り

甲軍の作戦内容は、大略、全軍を二分して、例の啄木(はくもく)の戦法で、敵の一面を搏(う)ち、一面を捕捉殲滅(ほそくせんめつ)するにある。

全二万のうち、一万二千人を、大正の備えとし、山の手の多田越えを経て清野(きよの)に出、いわゆる正法攻撃をもつて朝懸(あさがけ)に堂々かかる。

べつの八千余名は、まったく方向を変えて、広瀬の渡しを越えて、川中島の平地に進出し、上杉軍が妻女山を降つて、この方面へ崩れ立って来ることを必然と見越し、いわゆる

奇法をもつてこれを要撃するという兵略であつた。

「時刻は、いま何刻？」

信玄は、度々たずねた。

侍臣のうちには天象、風向き、気温、晴雨など、そればかり測っている顧問がいる。それは儒者めいた老人で、いつも山本勘介入道道鬼の側にいた。

「亥の刻（午後十時）もはや下刻に近い由にございます」

答えたのは勘介入道である。信玄はうなずいて、また、

「月の入りは」

と、問う。

勘介はまた顧問に糺ただしてから答えた。

「こよい九月九日の月の入りは、子ねの刻の六分過ぎ（午前零時四十分頃）の由にござります」

「では、間もないな」

「間もごございません」

「民部。馬場民部やある」

「はいっ、これに」

「子の刻になつたらすぐ貝を吹かせよ。出陣の太鼓打鳴らせ」

「承知いたしました」

「城門を出るには、大正の一万二千を先に立たせい。逸^{はや}り争わぬように」

各将、心得はもう十分だった。しかし信玄としては、念に念を入れていた。

こうして勢揃いまでしながら、いたずらに時刻を過ごしているのも、夜空の天候が、更^ふけると共に一変して来たからである。宵のうちには、乱雲飛^ひ々のあいだに、月のこぼれて来る間は短く刻まれていたが、いつのまにか大空の雲は片寄って、広い星梨^{ほしなし}地の天体が研^とぎ出されていた。正法、奇法の襲撃を問わず、戦いを仕掛ける方にとって、月夜を嫌うことはいうまでもない。

しかし、それも夜半までだった。

「太鼓番っ。打てっ」

馬場民部が合図の声を放つのと同時に、望楼の三面に向って立っていた三名の螺^{らしゆ}手も、貝口を唇にあてると、満身の息をこめて吹き鳴らした。

長く。短く。また長く――

たちまち脚下の満城の地には、草摺くさずりのひびきや馬蹄の音が鏘々しょうしょうと、戛々かつかつと、眼をさました濤なみのように流れ出すのが聞えてきた。

「では、お先を承りまして」

山本入道道鬼が、まず座を立つた。

つづいて、

「――御免を」

と、飯富兵部、春日弾正、馬場信春、真田幸隆、小山田備中守、甘利左衛門尉、相木市兵衛、小畑山城守など、続々、信玄にあいさつして、信玄の周囲から立去った。

それらの諸将はみな、妻女山の正法攻撃隊に属し、山の手越えにまわる人々であつた。

信玄自身は、先発一万二千の出城を見送つてから、約半刻ひきほどおいて海津を立つた。奇法要撃隊の八千をみずから率ひきいて道をまつたくべつにとり、広瀬の渡しをこえて八幡原へと志したのである。そこまでの道程としては大してないが、一万二千の兵馬、つづいて八千人の列を作つて城門から出るにはかなりな時間を要したとみえ、目的の川中島のでまえ八幡原に着陣したのは、もう払ふつきよう暁しょうに近い上じようこく刻く（午前三時半）頃になつていた。

これへ着くやいな信玄は、

「本陣は、八幡神社の境内に」

と、すぐ指定し、

「要所要所、土を掻きあげ、土居（防塁）をつくり、壕（塹壕）を掘れ」と、命じた。

まだ真つ暗な地上に、工兵たちが、孜孜として活動しはじめるうちに、はやくも信玄の本営の幕圍は八幡神社の境内に張り繞らされ、かの孫子の大旆、諏訪明神の旗は、もう血ぶるいして鳴りはためき、帷幕の十二将、百余騎の旗本たちを初め、八千の全将士は、眉を霧に濡らし、草鞋脛当を草霧に埋めて、ともすれば上ずりやすい英氣を確と丹田に嘸み下していた。

ゆうべは宵まで雨のこぼれたせい、今暁の霧のひどさは格別であつた。咫尺も弁ぜずという濃霧である。ために、旗や馬印からも、兜の眉びさしからも小雨が降っているのとは違わないほど、のべつぽたぽたと雫が落ちていた。

捨て篝火

山越えの迂回をとった正法攻撃隊の進路は、かなり難行軍だった。

西条から道は登りとなり、多田越えはわけて道が狭い。

月の入りを待つて立ったことなので、忍び松^{たいまつ}明は充分に携帯したが、それも余りに火光で天を焦がすと、敵の偵察に嗅^かぎ知られる惧^{おそ}れが多分にある。

山は小さいが、峰道もあり谷もありして、清野へ出るまでには兵馬は汗をしばった。近間な距離ながら時間を要したことというまでもなく、曳^{えい}々^{えい}として人馬はすでに戦っているに等しい呼吸^{いき}だった。

「ひどい霧だ……」

「天の御加護。敵は近々と寄るまで、何も気づくまい」

途中で甘利、真田の二部隊は、べつな道へ岐^{わか}れた。

物見平の上から、妻女山の搦^{からめて}手へ、虚を衝くためにであった。

時。――夜は白^{しら}みかけてすでに今日は九月十日。

こんどの大戦初めての喊^{かんせい}声は、この夜明け、この攻め口から、わあつと揚がったのである。

朝懸^{あさがけ}だ。

攻め貝、鉦かね、押太鼓。いちどに天地をゆるがして、側面、正面から、妻女山へかけ上った。

一万二千のあげる武者声は、声だけでも天地を震う。

まるで灰のように小禽ことりが立った。満山の木々はおののき、落葉は雨のように降り、濃い霧は渦まいた。

「や、やつ？」

「ややつ？」

「空陣くうじんだ」

「紙旗かしかだ」

ここ、彼処かしこに、同じ驚愕と、同じ虚ろな叫びうづが聞え出した。すさまじい勢いでぶつけて来たこの山にはすでに人影もなかったのである。霧にぬれた紙旗の腹立たしさ、まだどこどかと燃え旺さかっている捨て篝火かがりびの憤いきどおろしさ。

「出し抜かれた！」

武者草鞋おびただの夥しい足は、全山の擬装陣地を、蹴ちらし、踏みつぶし、そしてまた、戒め合った。

「油断するな」

「どこに敵が現れるやも知れぬぞ」

「残念。すでに謙信は、味方のうごきを、先に知っていた！」

遅し、遅し、武田軍。

謙信はそう微笑んでいるであろう。彼の陣払い、ゆうべまだ月光のあるうちに行われていた。静かに、きれいに、手際よく。

兵は枚ばいをふくみ、馬は唇くちを縛ばくし、月下、山をくだって、千曲川の渡と渉しやうにかかったころ、漸く、月は没していた。長柄の刃先、太刀の鞘を暗い秋の水にひたしながら、全軍の長蛇は肅々と、狗ヶ瀬こまの対岸へ越えていた。

「近江、近江っ」

と、謙信はふと、早瀬の前に馬をとめた。そして、甘糟近江守を後続隊の中から呼んで、
「——寄れ。ここまで」

と、自身の鞍わきまでさしまねき、馬上から身をまげて、何か彼の耳へささやいた。

動脈・静脈

「——其方の一隊は、われらの本軍と別れて、ここより数町先の上流、十二ヶ瀬を渡って、この千曲の北岸、小森附近に陣をとれ」

「はいっ」

「そして、この広い闇の野と、深い霧の河原とを、ことごと悉く敵の影とも思つて、注意を怠るな、うろつく物見と見たら一人も討ち洩らすな」

「承知いたしました」

「甲軍の主力は、おそらく広瀬の下流を渡り、八幡原へうごき出たものと思わる。——彼の左翼、すなわち其方の陣する所から北東の平野一面こそ、もつとも敵に接近する地域となろう。彼の動静に耳すましながら、変化あらば、その都度つど謙信のあとより追馳おいばせに伝令を發せい」

「はっ。お旨のうち、よく分りました」

甘糟近江守は、馬上の謙信へ礼をして去った。——お旨のうち。それは謙信の希望する布陣の展開を意味する。——それを謙信が成し終るまでの半刻はんとぎの機微なあいだを、いわば監視隊として甲軍に備えていよとの命令なのだった。

約一千の甘糟隊は、千曲の南岸を駆けて、十二ヶ瀬へ急いだ。

下流の雨宮の渡しからそれを凝視していると、忽ち小森の岸へ向って、渡河してゆく甘糟隊の影が、白い飛沫と、夜霧に煙って、人か水か、水か霧か、ただ幻の動くとししか見えなかった。

「――よし！」

謙信の駒も、脚を洗めて、川波をぎぶぎぶ渡っていた。

川水の涸渴しているときは、河原の水は大きな一筋にしかなくていないが、水源地の山岳に雨が降り嵩むと、忽ち、この広い盆地は、あたかも人間の動脈と静脈のように無数の水脈を描き出す。時しも秋、四方の水声はもつとも烈しい季節だった。

てん
天まだ晦し

甘糟近江守の一隊をのぞいて、直江大和守の大荷駄隊を先頭に、全軍は渡りきった。馬も人も濡れ光っていた。

「叱っ……馬を嘶かすな」

馬の口輪でも外したか、悍氣かんきを立てた一頭が、耳たて、鬣がみを打振って、高く嘶ないた。あわててそれを叱りながら、組の部将は飛びついて、馬の首をふところへ抱だきしめた。

——嘶なくな。後生だから。

馬へ頼まないばかりに宥なだめる。まさにこれからの前進は、一步一步に密ひそかを要した。チラチラと、兵の腰から赤くこぼれる光は火縄の火だった。極力、敵さどに覺さとられまい為にはそれを秘したいところだが、敵はすでにすぐ鼻先にぶつかるかも知れないのである。敵を見てから火縄を点じたのでは間にあわない。

左に北国街道らしき並木。

行手に、犀川さいかわの水音、また丹波島たんばじまの木立らしい影。

何しろ、霧は深し、夜は明けぬ闇なので、確たる目標はつかないが、先鋒の柿崎和泉守が方向をさぐりさぐり進むのに従ついて、全軍およそ一万二千余の兵と馬と車とは、あらゆる物音をひそめながら、やがて川中島を踏みしめ、北進北進して、犀川の際までそのまま行軍した。

ゆうべ、妻女山を陣払いするに当って、遽にわかに、

(総軍越後へ帰国)

と聞かされ、そうとばかり信じていた大部分の士卒は、ここへ来るまで、勿論、犀川を
なお北へ渡つて、善光寺方面へ行くものという考えを少しも疑つていなかったが——先頭
の大荷駄、また先鋒柿崎和泉の隊、二陣本庄隊、三陣村上隊また新発田隊、長尾隊、つづ
いて中軍の謙信以下の旗本群まで——犀川の水を前に後え押に脚なみを停めてしまった。

むらがりあう馬と馬、兵と兵とのあいだから、奔々と閃く川水は前方に見えるが、柿
崎隊の大蕪菁の馬簾や、中軍の中之丸旗、毘沙門旗のいたずらに嗽々と嘯くばかり
で、いつまで経つても馬すすまず兵渉らず、ただ後から後からと来る兵馬がここに万余の
影を重ねて、見るまに真つ黒な大集団を霧の中に肥らせてくるばかりだった。

「——渉り出したか、先鋒は」

「まだだ。……まだらしい？」

「どうしたのか。いったい」

「わからん。何か、中軍の御主君をかこんで、諸大將が寄っている」

「立ち評定か」

後方の足輕組などのあいだに、そんな私語がやや騒めきかけたと思うと、たちまち謙
信の声と、その姿とが、全軍の上へ向つて、

「小荷駄、大荷駄をのぞき、先鋒隊より順次、犀川を左に見て、東——八幡原のほうへ向
つて徐々迂回前進せい」
うかい

という大号令が聞えた。

馬の草鞋はまた石ころを蹴り出した。急角度に、兵列は右へ右へと旋り出した。そして
こんどは、それまでの縦隊一列を、歩みつつ旋りつつ変更して、各部將の指揮の下に、三
行四段という陣形にはつきり備えを正し始めた。

時に、時刻は寅（午前四時）か、卯の刻（午前六時）には間のある頃。
もちろん天はまだ暗い。

その暗いのと、霧のために、このときまだ、越後、甲州、両軍とも気づかなかつたが、
すぐ前方の八幡原には、すでに武田の大軍陣を布き、信玄の牙宮とさだめた八幡神社の周
囲には、旺に壕を掘り、土塁を築きなどし始めていた時分であつた。
さかん

その相互の距離は、勿論、後になってから分つたことではあるが、両軍の先鋒と先鋒、
わずか十町ほどしか距つていなかったのである。
へだた

「おや。……何であろう？」

鶴菜は、枕から面を擡げた。

病んでから二十日余り、寢床のうちに籠りきりだったせい、旅焦けに小麦色していた頬も頸も抜けるほど白くなっている。

「おお、馬の嘶き……あの人声……ただ事ではない」

耳を澄ましていたが、やがて恟つとしたように、どこかしら痛むらしい体を無理に寢床の上にして、

「神主さま。神主さま！」

と、次の部屋へ呼びたてた。

ここは八幡原の真つただ中、一叢の木立に囲まれている一軒家だった。家のそばには蒼古とした鳥居がある。そして日頃は、老いたる禰宜と家族が住んでいた。

二十日ほど前の黄昏、鶴菜は千曲川の岸で弾に中つて倒れ、居あわせた馬糧刈りの人々に担われて、ここの社家まで救われ来たのであった。

それからずっと――

彼女は、親切な老禰宜の世話になって、傷口の養生をしていたが、鉛なまりだま丸との除り方が素人療治であつたせい、左の脚の甲からくるぶしがひどく腫れあがり、今以て十歩とあるくこともできないのだった。

「神主さま！ お内儀ないぎさま」

返辞がない。彼女は這つた。そしてなお次の間へさげんだ。

「いよいよ戦です。すぐこの近くで戦われそうです。はやく今のうちに、お子達をどこかへ移さないとお怪我をしますよ。流れ弾や、反れそ矢やが、こちらへも飛んで来ましょう……。お内儀さま、お眼ざめですか」

脚が痛む。起とうとするが起てない。這い寄つて、襖を開けた。

そしてまた、もう一間ひとまを、這つて行つた。

返辞のない筈。老禰宜もむすめも、その子どもも、どこへ行つたか、寢部屋は藻も抜ぬけの殻かになつてゐる。彼女はちよつと茫然ぼうぜんとしたが、またかえつて安心もした容子ようこだった。逸早く、むすめは子を負い、むすめの良人は老禰宜を扶たすけて、どこかへ避難したにちがいないと察したからである。

「ここへ陣したのは、甲軍であろうか、越後勢か？」

彼女自身は、この一軒家に、ただ独り取残されたことを、さして悲しむふうもなければ、
寂しむ面^{おもて}も見えなかった。

外の杉木立は轟々と空に吠え、落葉の音が、霧を捲く。風がこの家を馳けめぐる物音の
中には、明らかに兵の蹙^{あしおと}音も交じっていた。

ここの家族たちが逃げ出す時、開け放して行つたのだろう。縁の雨戸も除かれ、台所の
戸は仆^{たお}れていた。——その暗い水瓶^{みずがめ}のあるあたりに、ぬつと巨大な人影がうごいた。そ
して、がたがたと、音をさせていたかと思うと、そこから手桶を捜し出して、すぐ裏の井
戸の側へ寄つて行つた者がある。

ざあと釣瓶^{つるべ}をあけて、手桶^{ておけ}へ水を汲み入れていた。その巨大に見える鎧武者の影である。
「あつ。お父上つ。お父上ではございませんかつ……」

鶴菜は、絶叫した。

釣瓶の竿を握つたまま、鉢^{はち}金^{がね}の兜^{かぶと}、薄^{うす}金^{がね}の面頬^{めんほお}に、ほとんど眼と鼻だけしか現わ
していない武者の顔は、屋内を振向いて、ややしばらく鶴菜の影を凝視していた。

鎧える親

武者は、唾か聲のように、何の反応もあらわさない。釣瓶を離した。その手に水桶を提げた。もう黙然と先へ歩いてゆく。

「……もしっ！」

彼女は、縁を駈け下りた。というよりも転げ落ちた。

とたんに、足の腫も痛みも彼女になかった。水桶を提げて杉木立の小道を彼方へ行く、武者に追いつがって、

「お、お父上様ではございませんか。あなた様は甲州のお旗本、初鹿野伝右衛門様でございましょうが」

「ちがう」

「いいえ、ちがいません」

「ちがう、ちがう」

「でも、鎧の胸当にある御紋は、初鹿野家の抱茗荷の御紋です」

「抱茗荷は他家にもある」

「無いと記憶おぼえております。甲府の家を離れてもまだ四、五年の年月しか経ちません。

家の御紋を忘れてどうしましょう」

「何者だ、そちは」

「鶴菜でございまする。父上さま。その御眼おまなざしや、お声だけでも、実の子には分ります。なぜ、鶴菜かと仰つしやつては下さいませんか」

「知らぬ」

「むごい仰せです。まだ年も十四の頃、お父上に伴われ、善光寺に詣でた途中、にわかに厳しいおいしいつけをうけ、甲州の御おんため為じや、主君への忠義じや、汝を捨て、越後へ拾われて行けど、わたくしの身は、世話人の手にかかり、春日山のお旗本黒川大隅さまの家へ奉公にやられました。……そしてお別れ申すとき、お父上から懇こんこん々申しつけられたとおりを守って上杉家の出来事、御城下のうごき、御家中の取沙汰など、絶えず事細ことごとやかに、お文を以て甲府へ密報しておりました……。それなのに」

どこかで、弾つっおと音がした。ぐわうんと、音波は広い野を縫い、霧を揺すり、ここの木立までを貫つらぬいてくる。

「離せつ。ここをどこと思う」

伝右衛門は脚をあげた。

鶴菜の背へ桶の水がかかった。わがむすめよりは、その水のほうが、遥かに大切であるかのごとく初鹿野伝右衛門は見向きもせず、杉の木の間を駈け去った。

機微寸前

鯉^{かつおぎ}木の立っている檜^{ひわだぎ}皮葺の一字が見える。八幡神社の古い拝殿だった。それと背中合せに南面して、かなり広い地域にわたって諸所に陣幕^{めく}が張り繞らされている。

信玄のいる本営は、こちら辺から方一町に及ぶ全部がそれといていい。どこの、どの幕囲のなかに、信玄その人が床几をすえているのか、旗じるしや馬簾^{ばれん}だけを的に搜したのでは分らないほど、同じような幕営がいくつもあつた。

「よい水を求めて参りました」

初鹿野伝右衛門は、その一つへ身を潜^{くぐ}らせた。そこには明らかに信玄の姿があつた。

床几を空にして、信玄は立っていた。彼の満身には戦気が立っている。夜来の烈しい血しおのうごきが、自然、口腔^{こうこう}を渴^{かわ}かせて来るのであろう。彼はさつきから頻りに一杯の水を欲しがっていたのである。足軽でも奔^{はし}らせるべきではあるが、主君の飲料水となると

小者では心許こころもとない。私が——と伝右衛門自身歩いて、漸く捜しあてて来た井戸水であつた。

「ああ、うまい。満足した」

柄杓ひしやくの水を、約半分ほども、一息に飲んで、信玄はそれを桶へ返した。

からりつと、柄杓の柄が、桶の縁ふちに鳴つた。それが何らかの暗示でもあつたかのように、彼の毛の生えている大きな耳がびくと立つた。

「……はて。伝右衛門、其方そちには聞えぬか」

「何がでござりますか」

「異様なものだ……何がともいえぬが」

「鉄砲の音なれば、つい唯今戻つて来る途中で耳にいたしました」

「いや、あれは、典厩てんきゆう信繁が陣地の臆病な哨兵が、何かを粗忽そこつに見ちがえて、慌てて

一発放したうろたえ弾だまだ。——そんなものではない、もそつと夥おびただしく、しかも色もなく音

もないものだ。何とおうか。この深い霧のながれの真白な闇が、惻々そくそくとわが陣営の上

にそれを告げ迫っている心地がする。……そうだ、やはり兵馬のうごきだ。豊後ぶんごつ、豊後

幕口の一方に、四、五人の旗本たちと長柄を搔かい持つて警固に立っていた諸角豊後守が、

はつと五、六歩出て答えた。

「要所の壕は掘り終ったか。土塁も築き終ったか。それともまだか」

「まだ、内藤殿の陣前、小笠原殿の陣の横などで、足輕どもが急いでおりますが」

「……ではその声かの？ えいえいと喘ぐ声か」
あえ

と信玄はまた思い直して、しばらく床几に心を落着けようとしてゐるふうであつたが、また突如として、物見頭の望月甚八郎を呼びよせ、

「そちの手より放った物見共、雨宮あまみやの渡しや、小森方面の気配けはいなど、まだ何も告げて来ぬか。戻ってきた者はおるか」

と、たずねた。甚八郎は、

「まだ一名だに——」と、すこし恐縮して答え、

「自身、見てまいりましょうか」

と、信玄の顔を窺った。が、その時、信玄の感能は何ものに触れたのか、その大きな眼を空へつりあげ、からだも共に、床几からぬつくと起して、

「あら、思いがけなや」

と、ひとり大声にいった。

「まだ妻女山へ襲^よせた味方からも、何らの伝令もなし、物見もみな帰らぬというに、これへ敵上杉の軍勢の来るいわれはないが……何としてか！……夥^{おびただ}しいあの人馬の音は？」
彼のことばに、幕中の将士もみな耳をたてた。鏘^{しょうしょう}々と甲^{かっちゅう}冑^{けう}のひびきが聞える。
明らかに簇^{ぞくぞく}々と兵団の近づくような地鳴りがする。すわと、にわかに信玄のまわりは色めきたった。

「あわてるな」

信玄は、途端に、悠然たるものを示した。彼の顔色とその巨きな恰^{かつぶく}腹を見るとみな気が鎮^{しず}まった。信玄は呼びたてていた。

「浦野民部。民部左衛門やある。すぐ物見してまいれ。辞儀無用つ。早く」

あつと、答^いえがするとすぐ、民部左衛門の半身が陣幕の上に高く見えた。馬の背にとび乗ったのだ。

一鞭加えたと思うと、またたくまに引返して来た。ずしと鞍からとび降りると、すぐ信玄のまえに跼^{ひざまず}いて告げた。

「やはり敵軍にござりまする」

「何。やはり上杉勢か」

「長い長い縦隊をもつて北へ北へ進路をとり、犀川の方へ向っております」

「その先鋒は、犀川を渡ったか、渡らずにあるか」

「その辺より、右折して、次第に大きな彎月形わんげつがいを作っておりますが、あの歩足振りほそくぶでは、合戦が始まるにしても、さまで急に、捗々はかばかしいことには及ぶまいかと存ぜられますが：

…」

と、語尾をにごして、浦野民部左衛門は、信玄の眼を見た。信玄は、彼の眼のうちのものを「うむ」と、大きな頷うなずきと共に読みとつた。

物見の報告にも、仕方がある。味方の士氣を挫くじくようなこと、狼狽を驅り立てるようなこと、また、敵の強味などは徒いたずらに語らぬが法とされている。——とはいえ真を語らなければ主將たる人の判断を誤ろう。眼をもつて伝えることもあり、口をもつてわざと主君の周囲を偽ることもあり得る。要は、臨機の氣転にあると云ってよい。

車掛り

——すわこそ、謙信、山を降りたか。

この愕おどろきは、たしかに、信玄の胸の中にはあつた。

けれど、彼の眉は動じない。

しかも直覺していたのである。事態の重大なものとその急とを。

「……………」

浦野民部左衛門の報告を聞き取つてから、一瞬、彼はその大きな眼を、瞼まぶたの中でぎよろりと動かした。ふふうむと、鼻腔びこうから洩る息が聞える。そして、右手の軍配の柄が膝を離れたと思うと、

「室賀むろが入道。念のために、もういちど物見をして来い。——謙信ほどな大将が何とて、二十日に余る陣を捨て、一戦も交えず国へ引揚げはるはずはない。しかも夜前より千曲を渡りいまなお、この附近に夜を明かしてあるからには、ただの退陣とは心得られぬ。——民部が見違えと思わるる。疾とく参つて再度、謙信が備えの態を見極めて来い」

と一隅にいた者の顔を指して命じた。

「はっ。見て参ります」

室賀入道は、地侍だ。この辺の地理に詳しい。駒の背にとびつくや否、一鞭加えて馳け去った。信玄は続いてすぐ原隼人正を呼び、また山本勘介入道道鬼を呼び、床几の左右へ

近々とふたりをさし招いて、何事か忙しげにささやき合っている。

——その頃、もうお互いの面には^{ふつぎよう}払 暁の薄明りが見られていた。たしかに夜は白みかけているのだ。しかしよいよ深い朝霧に物の色目も^{あやめ}識分^{みわ}けられない。いや、こうした霧の中では、視線を塞^{ふさ}がれるばかりでなく、物の音響すらよく通らないものであった。味方の内の馬の嘶^{いなな}きやすぐ其処^{そこ}らの物音すら極めて鈍^{にぶ}くしか聞えなかった。

信玄は十分にそれを計算していた。平常の視覚と聴覚の通念から誤^ご謬^{びゆう}を生まないように今や細心に日頃の兵法の知識を五官に役立たせていたのである。——にもかかわらず、それでもまだ敵方との距離の推量に、^{さすが}追の彼すら過誤を抱いていたことが、それから寸刻の後に明白になった。

「見て戻りました」

室賀入道はこれへ帰って来るなり大声で呶鳴った。すでに事態は急迫以上に急迫していたので、^{ひさまず}跼^{しょうみつ}いて詳密に告げている間もなかった。

「越後勢は悉く、^{ことごと}お味方を右に見て、幾重にも幾重にも、分厚い縦隊を^{おしせば}押迫め、犀川へと、こなたを傍目^{わきめ}に見捨てて赴く態に見えますものの、実は、旋風^{つむじ}のごとく大きな渦を八幡原いっぱいに描きながら、徐々とわが軍へ距離をちぢめつつあります」

聞くやいな信玄は、羽を搏つ鷲のように、身づくろいを示しながら、

「やはりそうか。それこそ、車掛^{くるまがかり}りというものぞ」

と、躍り起^たつていった。

「さらば隼人正。ただ今、勘介入道も申したごとく、敵にさまでの覚悟あつて、手詰の陣掛りして来るからには、味方もこのままの備えでは支え難い。疾^とく疾く、勘介の指図どおり諸所の部隊へ、陣立^{しんだて}更えのこと、申し触れよ」

有りや・無しや

川中島その日の緒戦は、上杉方の「車掛り」接触から始まったというもの、否、「車掛り」の陣形ではなかったというものなど、古来からこの事は、兵法家のあいだでも喧^{やか}ましく論議されている問題ではある。

しかし上杉謙信が、

この一戦に！

と固く期して、自己の細心を以て、敵の中軸へ直接、激突を計っていたことは慥^{たし}かな目^も

企みである。

それを果すには、平常の手固い布陣と、一定の距離を要する対陣では、所詮、信玄の中軍へ分け入ることはできない。

で、濃霧を幸いに、全軍の方向を、犀川へ向け、帰国の引揚げをするかの如く見せて、絶え間なく兵を歩ませつつ実は巨大な輪形陣を旋回しながら、あたかも颶風が緯度を移つてゆくよう、信玄の陣前へ迫つて行つたということは、彼の決意から見ても、戦略からいっても、当然な策であつて、決して、由謂れなきことではない。

それを否定する論者にいわせると、

（この日、この緒戦では、謙信もまた信玄の所在を的確に知っていない。なぜならば、甲軍二万余は、海津を出るときに二分されて、その一方は山地伝いに、妻女山への奇襲攻撃に向つており、一部が広瀬を涉つて、八幡原へ出て来たものである。だから信玄とその直属部隊が、山の手の要撃隊のほうにあるか、この野戦待機隊にあつたかは、いかに謙信の炯眼でもまだ分明していないわけである。それなのに車掛りというような必殺捨身の陣形で、無碍に敵へ挑みかかる理由はない）

これも一理あるに似ているが、なお謙信の機鋒だけを見て、謙信の心理に思い足らない

所がある。妻女山を立退く前にも、それから行軍渡河のあいだにも、彼の放っている偵察は刻々と踵きびすを次いで何事かを告げている。その一報一報に、信玄がいずれの陣にあるかを確証して来ないまでも、謙信がそれを判断する示唆しさなり材料には十分な提供となっていたことは疑いもない。

のみならず、上杉家の古老の申し伝えという一書に依ると謙信は、この平野へ出てからも、その目標を的確に突きとめるため、特に、旗本の山吉玄蕃やまよしげんぱと須賀但馬たじまのふたりにいつけ、

「深覲ふかのぞきいたして来い」

と甲軍の哨戒地帯へ入り込ませていたという事実もある。

深覲きというのはただの物見程度でなく、まったく敵の中へ入って来る「忍びしの」の業で、いわゆる変遁へんとん隠形おんぎようの術を要する生命いのちがけの搜りさがぐである。

霧は深し、未明の天地。味方の人影や陣々の幕すら朧おぼろな中では、そうした野鼠のねずみにも似た味方ならぬ人間もどこにどう潜んでいたか、決して予測はつかなかった。

もつともそれに備えて、ここの中軍、信玄のいる所でも、今や例の甲軍最大な象徴しょうちようとしてゐる孫子の旗も法性ほっしょうの幟のぼりも、また諏訪明神の神号旗も、花菱はなびしの紋旗も、すべ

て秘してしまつて、

(ここに信玄あり)

などと敵方へ一目で知れるような迂濶な構えはしていない。

むかで
百足の旗々

これは余談だし、ずっと後の事でもあるが、織田信長が桶狭間おけはざまで義元の中軍へ突撃したときでも、その営中に斬り入るまでは義元の居どころは的確に知れなかったのである。

あなたこなた姿をさがすうちに、溜塗ためぬりの美々しい輿こしがあつたので、初めて、ここと信念され、信長の部下たちは一層勇気づいて功を競い合つたというほどである。

そのほかに、人いちばい要心ぶかい信玄には、八人の影武者があつたなどともいい伝えがあるが、それまでにはどうあろうか。しかし、家康や信長などの陣中生活を見ても、

本陣には名代みようだいを置いて、自分はひそかに前線の先手さきでに立ち交じって直接に下知をして

いたというような例はいくちもあるから、信玄にしても、常備八人の影武者はどうか分らないが、名代を用いた場合などは屡々《しばしば》あつたものと観て大過はなからうと思

う。

それとまた「車掛り」の陣形そのものの効果にも疑問説がある。けれど山鹿素行の兵書によると、

車ガカリハ敵方ノ備ヘ立テ三段四段ナル二用フレバ功大ナリ。コレハ小車トハ曰フ。サレド大車二用ヒ、敵備ヘ十段十一段トナリテハ利アラズ。

とあるのを考え合せると、輪形陣の価値は十分認めているが、相手の備え如何によることを強調している。この説に反対して、車掛りを否定している論者には、同時代の荻生徂徠^{そらい}などがある。徂徠は、武田方のこの時の陣形はいわゆる魚鱗十二段の重厚な構えであるから、謙信が車掛りを用いるわけではないというような点を強弁している。

けれど、陣形というものは、常に変化をふくんでいるもので、虚^{きよ}即^{そく}実^{じつ}であり、正^{せい}即^{そく}奇^きである。いつでも早速に相^{そう}変^{へん}化^け転^{てん}するものが陣形の本質で、鶴^{かく}翼^{よく}でも蛇^だ形^{けい}でも鳥^{ちよう}雲^{うん}の陣でも、そのままに固^こ執^{しつ}したりするのでは、死陣であって活陣ではない。

——車掛り！

と、信玄が直感したせつなに、信玄が、原隼人正へ向って疾く疾くと味方の諸部隊へ伝令を急がせたのは、いうまでもなくそれに対する「変」を直ちに命じたのである。

しかもこの場合、いささか信玄の面にも慌て気味のあらわれたわけは、この瞬間まで、彼は自分が、

（越後勢の機先を衝いている）

と、信念していたものだ。妻女山へ奇襲攻撃隊を向けていることといい、ここに陣取って、それに依る敵の崩れを待ちぶせている要撃陣といい、すべて先手^{せんて}を取ってさしている将棋として局面を観^みていたのである。

ところが。

その立場は逆転して来た。

謙信はすでに、迷いなく、ここへ邁進^{まいしん}して来つつあるのに信玄は、事態の直前に、味方の布陣を更^かえなければならぬという必要に——つまり後手^{ごて}に立たされてしまったのである。

若輩^{じゃくはい}

謙信に、いやしくも用兵の神智と技術において、この一手を見事出鼻にさし込まれた信玄としては、その老練な分別や、最後の必勝を信念しても、人間的に、

「小さかしき謙信の振舞」

と、感情を怒らせずにはいられなかった。その分なら目にももの見せてくれるぞ——との

覇氣はきに満々たらざるを得なかったのである。

達観

「御陣形変えのお布令ですつ」

「陣立更えですぞつ」

百足むかでの旗さし物を背にさした騎馬武者が幾人も、味方の諸部隊へ馳けわかれて、その陣地ちへ、火のつくように告げていた。

「山県やまがた殿の御手は、先陣のまつただ中に押進み、白桔梗しろききようのお旗を目じるしに立てよとの軍令です」

「武田典厩信繁どの、また穴山玄蕃どの御人数は、山県やまがたどのが白桔梗の御旗を見て、その左陣に」

「右陣には、諸角もろすみづみづ豊後ぶんごどの。内藤ないとう修理昌豊しゆりまさとよどの」

「御中央に信玄公、旗本衆」

「次いで左脇の備え。原隼人どの。武田逍遙軒様」

「右脇には、武田太郎義信様。望月甚八郎どの。——また後陣^{ごしん}としては、跡部大炊介どの、今福浄閑斎どの、浅利式部少輔どの……」

忙しげに、高らかに、また急に、彼方^{かなた}此方^{こなた}で百足隊の伝令たちが、こう告げわたり馳け廻りしているまに、はや先陣山県三郎兵衛の隊、その他の部隊が、峽^{かい}を出る雲のように動き出したが——時すでに遅かったといえる。

もう謙信のすさまじい輪形陣の流動は、すぐ目の前まで接近していたのである。

その接近法は、いわゆる突入直撃式でない。巨大な鉄鎖^{てつさ}の連環^{れんかん}がたえまなく旋^めり旋^ぐり近づいて来るので、戦鬪力の鋭角はどこにあるかといえ、そうしているまに敵の先陣と体当りした所がすぐそのまま鋭角となるものだった。

いまやその一端と一端とが、互いにどこかで触れ合ったらしい。

まだ、武田方としては、全陣形の立直しに、確^{しか}と、足場も定まらないうちにある。

当然、一部の陣地に、混乱があらわれかけた。

しまったと、信玄もここは血の逆流する思いがしたろう。それかあらぬか、彼のいる幕^か囲^{こい}に近いところから、突如として、大太鼓の音が、勇壮な階調をもって、つづけさまに鳴りとどろいた。

が——戦闘要意である。

なおまだ、遮二無二攻勢にかかれという押太鼓の音ではなかった。

おつかいばん
「御使番、御使番！」

そのそばで、旗本たちが呼びたてていた。山本道鬼や原隼人なども、みな各自の持場へ急ぎ帰って、もうここには姿のなかった後である。

「ハッ。お召で」

むかで
百足旗の者が二、三名かけこんできた。誰の眼たれといい唇くちばしといい顔色といい、もう平常のものではない。

「重ねての御命だ！ 先陣左右各隊とも、持場持場をかたくこころ忪いたずらえて、徒にも陣地を出ず、かりそめにも退かれな。ただよく敵の猛撃をその位置において死守応戦せられよ、とある。急いで諸所の大将へ触れられい」

本陣からの再度の命令をうけると、伝令はまた思い思いに背の百足旗ひるがえを翻して走り去った。

彼が太鼓を用いたので、此方はわざと鉦かねを用いたものだともいう。

いずれにせよ、いまや明らかに、相互の敵を相互に見た。眼に、耳に、足の先に、総毛

立つ全身の毛穴に。

いつか。空には、陽がのぼっている。

陽の位置でみると、時刻はちょうど朝の卯うの下刻（午前七時）ごろかと思われる。霧はまだ霽はれきらないが乳白色に透明を帯おび、湯けむりのように乱流騰とう下してその膜の薄いところへかかると、川中島いちめんから、犀川千曲はいうまでもなく、遠い妙高、黒姫の連山にいたるまで、明るくて朧おぼろなすがたを浮き出させた。

「近いぞ。もう近いぞ」

「四、五十間」

「いや、三十間ほどしかない」

先陣のまたその最も前方に這はい屈かがんでいるのは、山県三郎兵衛麾下の一小隊の鉄砲組だった。

「……まだ。まだだぞ」

弾薬を装填そうてんして、わずかの窪地の蔭から、銃口を敵へ擬しながらも、距離を考えて、容易には放たなかった。

「二十間まで待て。思いきって、近寄せろ」

組頭だろう。後あとからいう。

狙ねらいすましたまま、構えている銃手にとつては、実に長い。

そうしている間も、ちよつと油断すると、秋草のしとどな露に、火縄は消してしまふし、弾薬は湿しめらしてしまう。

「まだで？」

「いかん」

当時の鉄砲の射程内は、およそ三十間どまりといわれているが、それも精いっぱい届いた弾では、鎧よろいの草摺くさずりや革胴かわどうから撥ね返されてしまうのだ。弾もまた三匁から七匁ぐらいな鉛なまり丸だまを、漸く三発も撃てればよい方で、後は筒の関せき金がねや薬筒の焦やけついた部分などを掃除しないと使えない。

このように厄介な物だったが、なおかつ、これは近年の戦場にすがたを出したばかりの最新鋭武器であった。財力的に豊かな甲州勢といえど、また文化的に鋭感な謙信といえど、漸くその全軍に百挺足らずか百二、三十しか持ち得なかったものである。

従つて、その一発には、

「あだには撃たぬぞ」

という気がまえと、

「同じ仆すなら大将分を」

と、^ま的にも大物好みを抱いていた。

たしかに従来の弓よりは^ま的確に望みが遂げられた。——で鉄砲頭は弓頭以上、緒戦の功を欠いては御主君に相済まないと考えている。わずか二、三十名の銃口を預かっているのであるが、これが全軍の戦色に影響するところはもちろん大きいからである。

——足音。足音。——敵の足音までがはや耳にひびいてきた。

むらむらうごき^{まわ}旋るのは、上杉勢の人影ばかりではない。霧の濃淡も、怖ろしい勢いで渦まいている。そして陽の光が透して来るたびに、何か無数なものが、霧の裏でキラキラ光る。

上杉家で有名な長柄隊だ。大太刀に柄のついたような獲物を持った荒武者である。——
 と思うまに、その廻^{かい}旋^{せん}列^{れつ}は眼の前を激流の如くよぎり去って、忽ちべつな一隊があらわれてゐる。閃々^{せんせん}晃々^{こうこう}、夕立のように足踏み揃えて迫らんとして来る槍ぶすまの一縦隊であつた。

「——撃てッ」

鉄砲頭てっぽうがしらの開いた口が、腹いっぱいな声を出した。

どどんっ！ ばん！ ずどん！

不ぞろいな音響だった。強薬べつやくの加減だの湿り弾なども交じっているせいである。二十幾挺かの銃身中に、不発だったのも五、六挺はあった。

しかしこの鈍い音響も、また途端にばくとして揚がった弾煙たまけむりの匂いも、甲冑の武者の血を猛ぶらすには充分なものだった。敵とも味方ともつかず、およそ二十五、六間ほどの双方の間隔から、わあっという喊声かんせいがいちどに揚がって、天地の朝を震ふるわせた。

殺地のいのち

重厚な敵の前列が、徐々と——しかし狂瀾きょうらんの相そうを示しながら——いわゆる武者押しというジリジリ詰めに追って来ると、いずれからともなく一方の陣列からわあつと声いっぱい叫ぶ。彼方もそれに応じてわあつと喚わめく。

わああつ……わああつ。

喚きつつ、叫びつつ、歩一歩と、相互のあいだは双方から歩みつめる。この陣寄せ状態じんよせ

は容易に次の展開を示さない。まったく、一步出ては、わあっと叫喚し、半歩ニジリ出しては、わああつ、と叫号する。

脚で敵へ寄つて行くというよりは、有らん限りな声の力で敵へ迫つて行く。そういったほうが正しいくらい声を嗶^からし合うのである。

いや、緒戦の勇気をふるい出すには、張上げる声だけではまだ足りないのです、最前列のうしろでは、このとき激しく太鼓を打鳴らすのであった。太鼓の打方にも法があつて、打つ者自身、天地に禱りをこめるくらいな気魄と、撥^{ばち}に死力をこめて打つのでなければ、味方の武者たちの足なみを、一步一步、敵へ向つて押遣ることはできないといわれている。

こういうと、いかにもみな緒戦に怯^{ひる}んでいるようで、当時の荒武者らしくないようであるが、どれほど場数を踏んだ豪の者でも、戦場へ臨んで、初めて敵の影を見、初めて陣寄せを押しあう刹那ばかりは、何度経験しても、

——正直^{しょうじき}、怖いものだ。

とは真の勇士もみないうところである。

これはもつと後年の人物であるが、東軍流の三宅軍兵衛が人に語ったという直話を誌^{しる}した或る古書にも、軍兵衛の述懐^{じゆっかい}として、戦陣に臨むおそろしさをこんなふう述べて

いる。

(——敵も槍ぶすま、味方も槍ぶすま、にじり足に詰あひ候ふて、たがひに声ばかり数十度も交し、やがては、押太鼓も耳には聞えず、わが声も人のもわかつたず、眼くらみ、槍もつ手は硬ばり、身心地も候はず、一瞬、天地も真つ暗に覚えられ候ふ時、はや敵の顔も、そこにありあり見え申しながら、なほ敵の列よりも一步も出る者なく、味方の列も槍の穂ばかりそろへ候ふて一足も駆け出る者はなく、こゝは千仞の谷間か、虚空かとばかり、足もすくみ、心神くらめき候ふとき、誰ともわかつたず、何の某と名のりざま、一番にをどり出てむらがる敵の中へ、体当りに突き入る者こそあれと覚ゆる一刹那より、初めて、われも忘るゝこゝちと共に、その勇者に励まされて、敵の中へ続いて駆け入るにて候ふなり。故に、一番駆けの功名こそ、あだおろそかには獲られぬものなり。武辺巧者のものとして、成し易からず、日ごろ勇力ありとて、その場にのぞみては、凡そはひとしきものにて、おのれなども幾たび戦場を踏みて、初手ばかりは、身の慄へを如何ともとどめ難くおぼえ候ふ)

軍兵衛ほどんな武者でもこういつているのである。後のこのはなしは、大坂夏冬の陣に、松平家の陣場借りをして、勇戦したときの体験を訊かれて人に語ったものであるが、おそ

らく彼といわず、大坂陣のときといわず、合戦の始めというものは、こうもあつたかと思われる。

一手切てぎり

すでにわずかでも、鉄砲の影響があらわれ出した川中島の接戦では、当然、陣形の編成にも、それより前の陣組とは、備え立てがちがつて来ている。

大体、鉄砲隊をまつさきに置き、次に弓隊、長柄隊、武者——という四段立てが常識となっていた。

そして、ふつうには、敵とのあいだ二、三町から、鉄砲隊が撃ちはじめる。

この距離では、弾はまだ届かないのであるが、武者声が、押太鼓と同じように、氣勢を昂あげる目的にまず撃つのである。

四、五十間になると、着弾が可能になる。さかん旺に撃ち合う。

と、いっても、弾込たまごめや、銃つつの掃除に、暇がかかるので、鉄砲組もおよそ、三列三交代ぐらいになって、撃つては、うしろへ退き、次の列に、装填そうてんして待っているのが代つて

前へ進んでは撃つ。そしてまた退く——という方法をとっていた。

そして、半町以内にまで迫りあうと、こんどは弓隊が、雨の如く矢を送る。

さらに十間と迫り、七間、五間と詰合ったとき、初めて長柄隊か槍隊かが突撃を開始し、ここに白兵戦となるのであるが、この際、二の手の戦法といって、急貝、早太鼓を打鳴らせば、足軽も士分も、すべて無二無三、敵中へ飛込んで、太刀、槍、無手、道具や戦法によらず、勝ちを制し、敵を圧す、いわゆる乱軍の状態に入るのである。

だが、九月十日、この朝の、川中島の緒戦では、こういう戦法の常則が、甚だしくちがつていた。

なぜならば、甲軍の方では、敵が車掛りに来たと察知したので、定則以上にも厳密な堅陣をもつて押したのであるが、謙信はかねがね、

(このたびこそ)

と期していたことであり、その戦法も、常識にとらわるるなく、

(一手切に戦つて、勝敗を瞬時に決せん)

とは、すでに諸大将や左右の旗本たちへも、断言していた方針であつた。

一手切の決戦とは、つまり二の手なしということである。四段の備えも、緒戦もない。

緒戦からして直ちに決戦に入らんとする素裸捨身の戦いを目がけたのだった。

その真つ先に立ったのが柿崎和泉守の隊だった。

大蕪菁おおかぶらの馬簾ばれんを揉んで急襲し、左右から本庄越前守、山吉孫二郎やまよし、色部修理、安田

治部などが喚おめきかかる形をとった。

驚くべきことは、主将謙信そのものは、柿崎隊のすぐ二の陣にあったことである。

前側の味方が敵へ当って散開すれば、すぐにも謙信のいる位置は、敵の前に露出してしまふ。大胆とも何ともいいようはない。

「かくまでに」——とは、信玄も思えなかった。謀将山本勘介、原隼人などの叡智でも察しきれなかった。——で、甲軍は形のごとく、重厚堅密な布陣をもつてし、まずその前列に布いた鉄砲組から、敵の旋回陣へむかつて、鉄砲の射撃を開始したのであるが、上杉方から早鉦はやがねが鳴り、喊ときの聲が沸くやいな、

「一手切ぞつ。——踏み返すな、うしろは、一步も！」

大将謙信みずから、こう呼ばわりながら、その馬前に高々と、赤地に龍と書いてある——懸かり乱みだれの旗を、

「かかれつ。かかれつ」

と、大声疾呼の下に、竿も折れよ、旗も裂けよとばかり、打振り打振り、励ましていた。懸り乱れの龍旗というのは、上杉家のうちで突貫の旗とも呼ばれている決死旗である。

この旗の振られたときは、旗の下で、全軍は直ちに、一死のほか何ものも無しの宣誓をしたことになる。たとえいかなる敵の強圧にぶつかろうが、一步でも怯み、半歩でも退いたときは、ふたたび人中に士として面を出すことはできない——としてあるのが上杉家の家中にある廉恥の精神——恥を恥とする士風のひとつだった。

別辞

死へ向つて駆け込む。

いや、死を捉えに飛びこむ。

そういつても、まだ足りない。どういおうといい足るものではない。

一瞬、どつと、白刃の波が、敵の中へ、捨身に入つてゆくときの相は。——それこそ地

上にあるどんな生態の現象にも較べるものはない。莊嚴、雄大、悲痛、快絶。あらわす文字もないほどである。もつと大きな意味をこめていえば、人間のはたらかし得る生命の極

致を發したせつなの「美」ここに極まるというしかあるまい。

このとき、もつとも迅はやかつたのは、上杉方の柿崎和泉守の隊で隊將以下すべて、みな徒か立ちで猛突した。足軽といい、士といい、みな兜の前を俯伏うつぶせて、弾も矢も思わず、驀まっしぐらに、わあアつ、どどどと——と駆けた。そしてぶつかった。

この一手切てぎりの体当りをうけた甲軍の隊は、山県三郎兵衛昌景まさかげの麾下きかだった。

「しまった！ 野添つ。弓、鉄砲組を、うしろへ退かせい。長柄隊。前へつ……前へすめ」

白桔梗しろきぎようの旗の下で、三郎兵衛昌景は、おどり上がっていた。

野添孫八が、その令、更に大声にして、前列へ呶鳴ったが、もう味方は、混乱に落ちていた。

緒戦に、不意をつかれたのである。まず、鉄砲をうてば、敵も一応鉄砲で来るものばかり思っているまに、その猛敵は、もう味方の中へ入って来ている。

「上杉家の小田井喜助」

「春日山に人ありといわれた祖母屋権之介とはわれぞ」

「古志左馬之丞だつ。越後武者の手振りを見よ」

右に聞える声も敵。左にとどろく声も敵。山^{やま}県^{がたまさ}昌^{かげ}景^がが、しまったと叫んだことすら遅すぎる。駈^{しんしん}々、船底を破つて溢れて来る清水のように、見るまに、全陣地は、上杉兵に散らされ、そこやここに、惨として、すでに屍^{しかばね}となつてゐる幾多の兵の紅に、霧の霽^はれ間から、かつと、血よりも紅いかと思われる旭がこぼれていた。

野面の瘤のような小高いところに立つて、この緒戦を見ていた若い甲軍の一将がある。信玄の弟、武田^{てんきゅう}典^{てん}厩^{きゅう}信繁であつた。

彼は、八百ばかりの手勢をもつて、味方山県的位置よりもはるかに左に備えていたのであるが、

「やつ？ これは、上杉勢の士氣、尋常ではない。かつて、緒戦からこんな凄まじい戦い振りの敵は見たこともない。おそらく、今日こそは、敗北を知らぬ武田にとつても、九死一生の難戦となろう。いざさらば、典厩信繁も、今日は死ぬ日と覚えたり」

つぶやくと、彼は、駒に一鞭あてた。敵へ駆け向つたのかと思うと、兄信玄のいる本陣の前に降り、幕をあげて、直ちに信玄の前に立つた。

そして、事態の急と、いまや味方の陣が、最悪な状態に置かれたことを告げて、

「ここ^{とく}篤と、利運の御思案が大事と思われまします。武田家の危機、焦^{しょうび}眉にありというも

過言ではありませぬ」

と、兄にも決心を促した。

信玄は、かえつて、

「典厩か。何しに来た」

と、落着きはらい、信繁が、眼に涙をたたえながら、

「こんじょう今生のお別れに——」

と、一礼というよりは、涙をかくすためにうつ向くと、信玄はくわつと睨めつけて、

「汝はまだ、ここの戦場に、肉親の者がおるなどと、胸のどこかに、覚えておるのか。信玄には大切な二万の兵あることのほか、弟など、おるともおらぬとも、考えたことはない。要らざる情、陣務の妨げ、はや立去れつ」

と、叱りつけた。

「不覚でした。おゆるし下さい」

典厩は、涙をはらつて、兄の本陣を出、馬をとばしていた。すると、

「信繁公におわさずや」

と、後ろで、声をかける者がある。見まわすところは山本勘介道鬼の陣前じんまえだった。

「おお、道鬼か」

「はや乱軍とみえまする。かかる中^{うち}にはからずも、おすがたを拝し得たのは、尽きせぬ今^こ生^{んじょう}の御縁。多年、御厚恩をこうむりましたが、入道も今日は、長のおわかれを告ぐる日と存じます。御武運、お久しくおわせ」

ここの陣地も、はや前方の柵は突破され、敵とも味方ともわかぬ死屍^{しかばね}は算を乱し、槍の折れ、踏みしだかれた旗さし物など、凄愴^{きさう}の気はみちている。

「何の入道、死出の道は、追ッつけ一つであろうぞ。それにしても、はや御身の陣地までかく敵に駆けみだされたか」

典厩^{てんく}が、振向いて答えると、

「いや何、それがしも山本道鬼、さまで脆^{もろ}くは潰^{つぶ}えませぬ。いったんは敵の本庄越前、柿崎和泉の手勢に、多少、踏み荒されましたが、必死にそれを押返し、敵の退^ひき足^{あし}につけ入って、わが先鋒隊山県昌景の敗勢を、極力、支えているところです」

「……才才、彼方の潮にも似た人渦^{うず}がそれか」

「支えきれば、お味方の勝利、疑いありません。昨夜、妻女山へ奇襲した一万余の味方が、これへ駆けつけて参るまで、支えきれば、はやきような勝^{かちいくさ}軍^{ぐん}は、わが甲軍の上に」

と、いいかけた時、彼のうしろで、ひとりの伝令が、

「軍師。山県隊の右備え、内藤、諸角の二隊が、敵の新発田尾張守、その他の猛撃にあつて突きくずされた。疾くその方面へ、加勢の手当をなせとの上意です。お早くつ」

と、どなつてまた駈け去つた。

「なに、右備えも」

と、この老軍師は、もう齢も六十をこえている身を、そう聞くと、壮者のように、槍を杖にして、ぬつと立つた。

そして、五、六歩ほど、蹠めきつつ歩き出したが、もう一度、典厩のほうを振返つて、

「おさらば」

と、いった。

典厩は、痛ましげな目を凝らして見送つた。道鬼入道のからだには、すでに幾つかの槍や弾傷が認められた。しかし少しも屈する容子はなく、忽ち、しゃがれ声をふり絞つて、何かを、戦塵の裡へ叫んでいた。

流れる首

典厩信繁、その日の装いは、卯の花おどしの鎧に、鍬形のかぶとを猪首に着なし、長槍を小脇に、甲斐黒の逸足にまたがっていた。兜を後にかけて、血しおどめの鉢巻に乱髪をなであげ、健気にもみずから陣頭に立っていたが、何思ったか、

「源之丞、源之丞」

と、駒側の家士、春日源之丞をさしまねいて、背に纏っていた紫紺地の母衣を引き、
「これは、父信虎様のおかたみであつた。お筆蹟もある母衣、敵に奪られては、後々まで御名の汚れになる。そちにこれを預けおく程に、わが子信豊に渡してくれよ」
と、投げやつた。

源之丞は、あわてて拾い取つたが、

「わたくしにこれをお預けの上、若君へ渡せとのおさしずは生きて甲府へ帰れとのおいつけですか。憚りながら、余人にお命じ下さい。きょうのこの場合は、一步も退けません」
と、喚くが如く、泣くが如く、馬上の主人へいい返した。

典厩は、わざと怒って、

「わしの目鑑でいいつけたものを、余人に命じるほどならそちにはいわん。疾く、甲府へ

もどれ」

いい捨てるが早い、そのすがたは、乱軍の中に駆け入っていた。
越後武者の野尻弥助、関川十太夫、柏藏人、熊坂大伍などの輩が、

「あれぞ、典厩」

「信玄の弟」

と見るや、他の相手ですてて、

「われこそ」

と、突いてかかり、

「そのお首、賜わらんには、武門の生まれ、相討して果てるも満足」

と、立ち塞がり、また追いかけて、飽くまでねばり強く、つき纏った。

典厩は、槍を取られた。すぐ陣刀をぬいて、熊坂大伍を斬った。

関川十太夫が、

「お見事なり。さあれ、我には」

と、斜に、槍をのぼした。その槍は、典厩が思わず、顔のまえて掴んだ為、

「おうほつ」と、力まかせに引かれて、駒の首を越えて、前へもんどり落ちた。野尻、柏

などが、争つて、首を搔かこうとするとき、典厩部下十数名が、一かたまりに殺到し、乱刃もと乱走の下に、典厩のからだは見失われてしまった。

「逃げたつ」

見つけたとき、典厩は、千曲川のすぐそばまで、馬を打って退いていた。——届かぬと見たので、越後兵の一人が、鉄砲を放った。典厩は、川の中へ、しぶきを揚げて落ちた。ざぶざぶと、白波を蹴つて、川のなかへ、越後兵が大勢駆けて行つた。典厩の首を挙げんためであつた。

典厩のからだは、浮きつ沈みつ、流れてゆく。宇佐美駿河守の家臣梅津宗三というものがついに、死骸を抱きとめた。そして忽ち、川を真つ赤にした。首のみを搔き切つて、小脇にかかえこみ、再びざぶざぶと川から上がつて来たのである。

——が、一步、水から岸へあがるせつなに、典厩の家の子樋口三郎兵衛、横田主水などが、

「やわか、御首を」

と、斬りつけた。

梅津宗三は、ひとりを横薙よこなぎに太刀で払い、また一人をあぎやかに仆して、味方の方へ、

何か大声でわめきながら駈けていった。おそらくは、

「信玄公の御舎弟、左馬介典厩信繁どのおん首、宇佐美駿河守の家来梅津宗三が打った
りっ」

と呶鳴ったのであろうが、喘^{あえ}ぎと、昂奮と、異様な音響の中なので、何を叫んでいるのかよく聞きとれなかった。

それを、上杉方の中までも、深く尾^つけて行つて、うしろから不意に、梅津宗三をけさがけに斬つて伏せた一兵がある。すぐ彼の手から主人典厩の首を引つ奪^たくるやいな、顔中を涙にぬらして、武田方の陣地へと駈けこんで行った。戦後になつて分ったことであるが、その兵は、典厩が日頃から目をかけてやつてはいたが、至つて身分のひくい山寺妙之助という小姓の下に使われている若者であつた。

吠ゆる野面

甲軍の一将、諸角豊後守は、前の日から下痢^{げり}を起していた。苦しさに耐えなくなると時々、楯の上へ身を横たえたまま指揮していたが、いまはその病苦もかなぐり捨て、自身、

槍を取つて敵をくい止めていた。

これへ当つてきた上杉勢は、甲軍の中央を突破して来た柿崎和泉の隊の鋭角だった。

「雑兵輩ぞうひょうばらの支えささに懸けかまうな。二陣、三陣、慕まつしぐらに踏みこえ、ただ八幡の森を
目がけよ。彼処かしこにこそ、信玄の本営はあるぞ」

叫喚きようかんのなかに、誰ともわからぬ敵将の声がする。

諸角豊後守は、身の毛がよだった。敵はいたずらに前衛戦で勝とうとせず、ひたぶるに、
信玄の幕営のみを目がけているものと思われたからである。

「ここを突き崩されては」

見まわせば、彼の部下たちは、いたる所で死力の戦鬪にかかっている。槍と槍を噛みあ
わせている者、忽ち、折れ槍を抛ほうつて、陣刀をふりかぶったまま血けむりの中へ消えこむ
ように駆けてゆく者。

真つ赤な大腸を露出した馬が、その間を狂奔してゆく。馬から落ちる者、馬に踏まれる
者、馬のあぶみにしがみついて、馬上の敵を引摺り下ろそうとする者。それを鞍上から斬
らんとして、かえつて、下の敵から突き殺され、無残な戦死をとげる者。

或いは、獲物を投げて、取つ組み合う。草と土と血を捏こね返し、死力しりよくと死力とが、遂

に一方を斃^{たお}して、その首をあげるとまた直ちに、

「戦友の讐^{かたき}」

とばかり、新手の敵があらわれる。見るまに、また一つ、また一つ、惜しみなく生命は散^{しかばね}らされ、屍は山と積まれてゆく。

野面^{のづら}いちめん、草の葉の露は乾いて、霽^はれあがった霧に代って、馬煙や血けむりが立ちこめていた。

何とも名状し難い人間の叫喚と、弦鳴り、銃声、馬のいななき、それに伴う地鳴りなどの間から、その時、

「典厩信繁を討取つたり」

と、いう上杉方の凱歌と、

「信繁どの、お討死」

と、悲しむ味方の声とが、交 《こもごも》 に、諸角豊後の耳に聞えた。

諸角豊後の戦死

討死を遂げた者は、何かその日のまえに、予感めいたことばを洩らしているという。

「今朝がたから頻りに、きょうの戦は典厩の死に場所ぞと、一度ならずいわれていたがさ
ては早くも、御舎弟様には……」

今や、全面的に、武田方の敗色は濃い。

「いで、我も御供をこそ」

と諸角豊後は、死をいそいで、いよいよ傍目もふらず、次々の敵を迎え打った。

その勢いに撃退されて、柿崎和泉の隊はいちど四散したが、同じ上杉方の新発田尾張守
の隊が、諸角隊の側面を撃つて来た。

柿崎隊もひつ返す。当然、挟撃をうけて、豊後守は、まったく苦戦に陥った。

「名ある侍とこそ見奉る。新発田が郎党にて、松村新右衛門と申す。お首をわたし給え」

豊後守のうしろから、一名、こう呶鳴りながら、駆けて来る者がある。

振向くと、徒立ちかちだの武者だった。長い檜の柄の槍をひっさげている。

「推参っ」

と叱りながら、馬首を向け更えて、あぶみ下がり、斬り下ろした時、新右衛門の槍は、
相手の馬の平首を撲なぐった。豊後は、もんどり打って鞍から落ちた。

「討ったつ。討ったつ。武田方の侍大将、諸角豊後の首を——」

狂舞しながら、掻き切った首をさしあげて、敵味方へ示しているまに、その松村新右衛門はもう、豊後守の家臣の石黒五郎兵衛、山寺藤右衛門、広瀬剛三などに取囲まれ、その槍ぶすまの中に、どうと仆たおれていた。

勘介入道の事

辰の刻（午前八時）頃から本格的な戦いに入った両軍は、午の刻（正十二時）になつても、まだ野面のづらいちめんに、濛々、乱れ合つて、一瞬も、死闘の叫喚を休めていなかった。曾かつての、どんな乱軍にも、崩れた例がないといわれている甲軍中の鉄壁、牛久保衆までが、その隊形を失つて、思い思いに死闘している様を見ては、甲軍の者すべて、

「今は、これまでか」

と、味方の総敗軍を観念せずにいらなかった。

牛久保衆というのは、三州牛久保の産、山本道鬼入道を初め、大仏庄左衛門、諫早いさはや五郎など、すべて同郷の勇将猛卒で組織されている真つ黒な一隊だった。笠も兜も具足も旗

も悉く黒ずくめで、

「ここの崩れるときは甲軍全滅のときだ」

とは、常にその牛久保者が豪語していたところである。

きようは、遂に、その日か。

牛久保隊も支離滅裂の状態に駆け散らされ、しかも目撃した者もないが、首将山本勘介も、乱軍のなかに、討死していた。

越後方の戦後の軍功調べによれば、山本入道を討った者は、柿崎和泉守の家来、萩田与三兵衛、吉田喜四郎、河田郡兵衛、坂乃木磯八の四人掛りで仕止めたものとなっている。

そして場所は——字東福寺の沼木明神の傍らとなっており、またその首を洗った所は、八幡原の内の水沢といわれているが、そこで洗った法師首は一個だけでなく、実は三人分の首を洗い、そのうちの一つが似ているというところから、山本入道的首級と届け出されたものである為、上杉家の内でも、後には、

「果たして、勘介入道的首級であつたか否か、明確でない」

と、疑問に附されてもいる。

もっとも、山本勘介という人物そのものの在否すら、むかしから問題になっていて、

「武功雜記」には、上泉伊勢守とその弟子の虎伯こはくとが、京都の帰途、三州牛久保の牧野家で、山本勘介と出合ったことが記載しており、「北越軍記」には、居たようにも誌し、居なかつたようにも書いてある。「甲陽軍鑑」の信玄公軍法の御挨拶人としては、

——馬場美濃、軍ノ成サレ様ヲ申シ上ル也。他国ニテ陣場ヲ見定メルコト、ソノ他ノ布陣、原隼人、モツパラ御談合ヲ受ク

とあつて、いわゆる帷幕いばくの軍師として隠れない山本勘介なるものの名は見あたらぬ。

とはいえその甲陽軍鑑や武功雜記などからして、どの程度まで真をおけるものかとなると、やはり限度がある。

で、ここにはやはり勘介なる人物がいたものとし、ただその最期のもようをつぶさにするよすがもない遺憾だけを記述しておくにとどめる。

けつちゆうこう 血中行

鉄砲の火が枯れ葉に燃えついたのか、蹴ちらされた営内の火の気が野火のびとなったものか、川中島一帯の空は、墨を流したような煙である。

その煙の中に、もう末の刻（午後二時）に近いかと思われる太陽が、一粒の珊瑚のように燦いぶされていた。

甲斐の勇士初鹿野源五郎をはじめ、名ある猛者の討死は続々聞え、信玄の弟典厩信繁のほか、諸角、山本、内藤などの侍大将も相次いで打果たされた為、甲軍の陣営はいまや全く消滅直前のすがたに見えた。

謙信はこのとき鞍つぼを打って、

「年来の望み、遂げるはいまぞ」

と、まわりの旗本を顧かえりみた。

もちろん今朝からの彼は、一定の場所に陣を定めていたのではない。

彼自身、怒濤を作り、彼自身も、縦横無碍じゅうおうむげに、駆けまわっていたものだった。

その馬前馬後に従ついて、たえず主君のすがたから離れまいとしていたのは、いうまでもなく、夜来、妻女山を下りる初めから選ばれていた十二名の旗本だった。

千坂内膳、市川主膳、大国平馬など——そのときまだ七、八名の顔は見えたが、あとの数名は傷を負ったか討死したか、早くも謙信の前後に見えなかった。

「行くぞ。遅るるな」

謙信はそれへいい捨てた。

放生月毛ほうじょうつきげの駿馬に一鞭加えると、彼のすがたはまるで流星のように、眼のまえの武

田太郎義信の隊へ奔りはしこんでいた。

「おうつ。御主君には」

「さてこそ。かねて期ごしたるお望みを、いま果たさんのお覚悟とみゆる」

旗本たちも、続いて駈けた。――が、先にゆく謙信も、徒歩の彼らも、もちろん無人の野を行くのではない。前から塞ふさがれる。横から襲われる。うしろから包まれる。それを蹴ちらし、突き伏せ、踏みこえ、奮迅ふんじんまた奮迅の果てなき血中けつちゅう行であつた。

当然――謙信、旗本勢に続いて、ほかの散隊も、どつと後から駆け合せ、ここに一筋、激浪中の奔流ほんりゅうをもりあげた。

――敵味方、三千六、七百人、入り乱レテ、突キツ突カレツ、伐チツ伐タレツ、互ヒニ具足ノ綿ワタガミ噛ミヲ取合ヒ、組ンデ転ブモアリ、首ヲ取ツテ起チ上レバ、其首ハ我主ナリ、返せ渡セト鑢ヤリヲツケ、斫キり伏セニ躍リ行クナド、十六、七歳ノ小姓、草履取ノ末ニイタルマデ、組々トナツテ働キ、手ト手ヲ取ツテ戦ヒ、果ハ刺シ交ヘ、髻ハテヲ掴ミ合ヒ、敵味方一人トシテ、空シク果テ申シタルハ無之候

とは「甲陽軍鑑」の記しているところであるが、激突の状もさこそと思われる。

いずれにせよ、武田太郎義信の一隊は、またたくまに突破されてしまった。いわゆる七花八裂の惨状を浴び、あれよというまに、謙信はすでに、こんぎょう今暁から偵知していた信玄の中軍へ向つてまつ驀しぐらに駆け込んでいた。

驟雨一電

謙信はあたうかぎり馬上の半身をかがませて、面をたてがみうつぶ蠶に俯伏せていた。

矢や弾をかわすためにではない。

「信玄近くにあり」

と、思ったからである。

その信玄を見るまでは、ひたすら自分を謙信と敵の目に知られたくない。また、信玄以外の敵と渡りあいたくない。

故にその扮装も、滞陣中より一ひととき際質素にしていた。

くろいとおど黒糸緘しのうえに、もえぎどんす萌黄緞子の胴衣を着け、白絹の頭巾で、面をぎょうにんづつ行人包みにして

いたに過ぎず、特に、大將らしい華美はどこにも見えなかった。

しかし駒は名馬ほうじょう放ほう生しょう、太刀は小豆長光あずきながみつの二尺四寸。

「信玄、何処いずこに？」

と、炬きよのごとき眼をくばりながら、八幡境内の近くを駆け巡めぐっていた。

ここまで来ると案外敵もつきまとわなかった。血眼ちまなこしてすれちがう将士は幾人もあつたがよもや敵の大將謙信とは思ひよる者もなかった。また謙信も眼もくれない。

ただ、信玄と、有無の勝負を——とばかり、そこらの杉落葉の上に仆たおれている旗や楯や雑多な兵具などを踏みこえ踏みこえ尋ねまわった。

このとき武田信玄は、太郎義信の隊を粉碎した敵の一手が、八幡の森の方へ、旋風のように通過したのをながめて、

「抑 《そもそも》、敵はまた、何を計るか？」

と、怪しむように、傍らにいた三名の法師武者や数名の旗本と、一かたまりになって立騒いでいた。

何か、附近で、異様な大声がしたので、ひとしく、そこに在あった顔が、うしろを振り向いたとき、

「信玄つ、そこかつ」

と、巨大な猛獸に踏み跨がった巨大な人間のすがたが、ふたつの眸ひとみでは見きれないほど、すぐ前に大きく見えた。

——あつ。謙信。

ここにいた者は直感したにちがいない。帷幕いばくのうちではあり、君側くんそくまぢかにいた人々はみな槍とか長巻とかの武器は持っていなかった。また一時に、

「すわ」

と、狼狽ろうばいした味方同士のあいだでは、太刀を引抜く間隔さえお互いに保ち得なかったので、

「おのれッ」

ひとりの法師武者は、そこにあった床几を遠く投げつけた。

あた中つたか、中らないか、床几の行方も知れない。ただ雨の如く杉の葉がこぼれ落ちた。

おおよぎその巨杉の横枝へ、馬上の謙信のすがたは支えられたかと思われたが、屈身、一躍する

と、もう混雑の人々の中へ放生月毛の脚は踏みこんでいた。

「くわッ」

と、響きがした。

謙信の口から発した声か、振下ろした小豆長光あずきながみつの音か、せつなに、一人の法師武者は、彼の切ツ先からよろよろと後ろに仆れ、陣幕の紐を断たつて仰向けに転がった。

しかし、それは、信玄ではない。——信玄は、身を避けて、あたかも藪の中へ胴を潜めた猛虎のように、双の眼をひからせて、謙信のすがたを見ていた。

いや、その眸が、それを見るところまもなくったほどである。謙信は、右覗みぎのぞきに、一太刀伸ばした体を左転して信玄のほうへ向けるや否、ふたたび、

「かつツ」

と、さげんだ。

正しく、こんどのものは、謙信の腹の底から出た声である。信玄は突嗟とつさ、右手の軍配団うちわ扇を伸ばし、わずかに面おもてを左の肩へ沈めた。

しびれた手から軍配団扇を捨てた。そして大鳳たいほうが起つように身の位置を変え、太刀のつかへ手をかけたとき、謙信の二太刀目が、彼の転じたあとの空間を斬った。

その、せつなであった。

御小人頭おこびとがしらの原大隅は、彼方に落ちていた青貝柄あおかいえの槍を拾って、

「うわうつ」

と、噛みつくような声を放って駆けて来たが、主君信玄の危機、間一髪に、その槍で、馬上の敵を突きあげた。

謙信は、見向きもせず、

「機山^{きざん}、卑怯なるぞ」

と、三太刀めを振りかぶりながら、馬ぐるみ、信玄の上に躍りかかろうとしていた。

右の腕に負傷した信玄が、その肘^{ひじ}を抱えたまま、身を翻^{ひるがえ}して、後ろを見せかけたからである。

その後ろ肩を臨んで、小豆長光のひかりが一閃を描いたが、ほとんど同じ一瞬に、放生月毛は一声^{せい}いなくて竿立ちに脚を上げてしまった。——余りに気の急^せいた為、一槍、むなく突き損じた原大隅が、

「ちいッ」

と、ばかり反れ槍を持直して、謙信の馬の三頭^{さんず}を力まかせに撲りつけた為であつた。

「見えぬっ」

「何処へ」

「はや、お討死か」

千坂内膳、和田兵部、大国平馬、鬼小島弥太郎など、旗本八、九名は、みな徒歩^{かちだ}立ちであつたため、主君謙信のすがたを途中に見失つてしまい、

「われわれ、片時たりとお側を離れずにいたものが、お館様おひとりを敵中に見失い、万一あつては、それこそ世の物笑い、末代までの恥」

と、彼方^{あちら}此方^{こちら}を、殆ど、無我夢中に駆けまわり、暴風雨^{あらし}に吠^ほゆる樹々のように、

「わが君っ」

「お館さまあつ」

と、呼ばわり捜していた。

すると、同じ組の士、芋川平太夫と永井源四郎のふたりが何処から来たか、天^{てんびよう}に吹き落された小雀のように、彼方の陣幕^{とばり}の蔭へ向つて、慕^{まっ}しぐらに飛びこんで行くのが見えた。

「やつ。平太夫が」

「さては御主君もあの辺りに」

面々は先を競つて、その幕囲いへ奮迅していた。いや、上杉方の十二旗本ばかりでなく、附近の敵の小屋や幕囲いの間を、右往左往していた武田方の旗本も、主君信玄の座所たる営中に何かしら異様な音響を聞きとめて、ひとしく同じところへ向って駆け蒐まつていた。

当然。そこへ迫るときは、謙信の旗本も、信玄の旗本も、たがいに体と体のぶつかるほど、混み合っていた。

けれど、彼もこれも、殆ど、横の敵を意識しなかった。

武田方の旗本は、信玄の万一を思い、上杉勢の旗本もまた、謙信の身を案じて、双方ともにその燃ゆる眼や凄じい姿勢の前には、ただ主君の安危如何があるだけで、それ以外の何ものもなかったのである。

このとき謙信は単騎、信玄の営中に駆け込み、信玄その人を眼に見、しかも小豆長光の一颯、また二刃も空しく、わずかに信玄の右腕に軽傷を与えたのみで、敵の原大隅に邪げられ、槍の柄で乗馬の尻を打たれたため、放生月毛は、彼を乗せたまま、跳ね驚いて、猛

然、その陣營から横ざまに駆け出して来た。

「あッ——」

名状すべからざる混乱中でまだよかつたともいえる。木の根にでも躓いたのか、放生月毛は前へのめつた。そして謙信は勢いよく落馬していた。

追い慕った原大隅、その他、幾つかの槍は、

「得たり」

と、われがちに、謙信のすがたを臨んで、おどり蒐る。

「あなや。御危急」

上杉方の旗本が、何で看過していよう。どつと、横ざまに驀走。

「ござんなれ」

と、槍の穂を揃えて遮った。

放生月毛はこのあいだに、空鞍を乗せたまま長坂長閑の陣地内へ、向う見ずに狂奔してゆく。

そして、謙信はといえば、そこへ逸早く、鬼小島弥太郎が、拾い馬の口輪をつかんで曳き寄せて来たので、その背へ跳び乗るが早いか一鞭加えて、

「返せ。返せ」

と、旗本たちへ呼びかけながら、ふたたびむらがる敵の中を割って、味方の内へ^{はし}送り去った。

野彦の声

来ることも^{はや}迅かったが、去ることも^{はや}迅かった。

それにしても、謙信が、なぜそう引揚げを急いだかというに、彼の旗本と、敵の旗本とが、槍ぶすまを並べ合った、猛烈な死闘を現出したせつな、武田の方の原大隅が大声で、

「すわやお味方の勝機は今この時と覚えますぞ、あれあれ、妻女山のほうより夜来^{はやくも}の別動隊、高坂どの、馬場どの、甘利どの、小山田どのなどの諸部隊、^{はやくも}迅雲の如くこれへ駆けて来まするわ！」

と、何度も呶鳴っていたからであつた。

謙信が、今朝から有無の勝敗を決せんといそいでいたのも、また心中常に気にかけていたのも、実にその別動武田軍十隊の移動にあつた。

それに、敵の首将信玄に対しては、なお遺憾な一太刀を残したにせよ、彼の中軍は蹂躪^{しゆう}し尽したといえるので、年来鬱積^{うっせき}していた宿念の一端を放つとともに、

「ハハ」は

と、迅くも兵機の「転」を考えて、さつと退き脚きれいに帰ってしまったものである。

謙信が引揚げたので、もちろん旗本の市川主膳、千坂内膳、和田兵部、芋川平太夫などもみな、跡を慕って味方のほうへ駆け出した。

駆け出しながら、芋川平太夫と鬼小島弥太郎が、

「武田大膳太夫晴信の御首、芋川平太夫、討つたりっ」

「信玄の御首、上杉の士、鬼小島弥太郎、芋川平太夫、力をあわせて討ち取る。武田方の輩、御首の通る道を邪魔するなっ」

声かぎりいつて通つた。

もちろん虚言^{きよげん}である。

けれどさきに原大隅が——味方の妻女山別動隊がすぐそこまで来た——と叫んだのも突^と嗟^{つさ}の気転にすぎなかった。こういう言葉のやりとりも時にとっては五体で働く以上に戦闘力をあらわすのである。

槍鬪、騎鬪、肉鬪、白刃戦、敵味方混み合つて滅茶滅茶に血しおを浴び肉を掴みあう時でも、戦いは何も黙つてするものと極きまつてはいない。いやむしろ口々に敵も味方も何事か吠えあい叫びあい、あらゆる雑言や喚わめき声を発している。けれどそれは殆ど何を吠えているのか意味をなさないものが多い。ある武者は、念仏を唱えながら戦うのが癖になつているものもある。——ねんぶのかんのんりき念彼観音力、とうじんだんだんね刀刃断々壊——などという声は乱軍中にはま聞えるものであるし、わが先祖のうちで心に銘じている名を呪文じゆもんのように連呼する若武者もあり、そうかと思うと、薪でも割るときの懸かけこえ声みたいに「ワツシヨツ」と喚いたり「ヤアツ、ホイツ、ヤアツ、ホイツ」と大船の櫓ろでも漕ぎ出すように斬りこんで来る猪武者もある。

何しても、意識無意識のべつなく、ありとあらゆる声を放つ。そのあいだに立ち交じつて、敵の氣を移らせ、味方の士氣を奮い立たすような正しい言葉——きび機微適切な突嗟に——いえるような侍ならば、それはよほど千軍万馬往來の士か、胆たんりやく略ふたつながら併せ持つている相当な人物だということができよう。

それはともかくこの日はまた、午過ぎから烈風が吹き出していたので、敵味方とも人馬の影は、濛々もうもうめいめい迷々迷々と砂塵に煙り、夜かと思えば、日輪が空にあったと、後にその

ときの思い出を人々も語っているほど、ひどい砂煙がこめていた。

軍馬の蹄が、滅茶滅茶に土を掘り返し、その土をまた兵が蹴立てるからである。

で、なおさら混乱を加え、それへさまざまな流言が飛び交うので、武田方の内にも、上杉勢の方にも、この前後にだいぶ同士討すらあった。

わけても、

「信玄公討たれたもう」

という流言は、ほんの一時にせよ、魔符のように、武田陣のあいだに広まり、みるみるうち落莫たる気落ちの色が全軍を蔽った。

ようやく、人心地ついて、信玄の床几を、元に直した信玄の本陣に、そのことが知れたので、一大事とばかり、内藤修理が諸方の味方へ馬を駆け廻しながら触れてあるいた。

「お館は御機嫌に御座なさるぞ。なんのおつつがもなく御指揮に当っておられる。――

敵の虚言に乗せられて、味方の戦意を攪き紊すが如き者あれば、味方といえ斬って捨てい」
全陣の不安な動揺は、この触れに依つてようやくしずまったものの、ひとたび中軍のま
ただ中を、謙信の馬蹄に蹂躪された武田方の中枢部は、その愕きと陣形の紊れとを、
容易に回復することができなかった。

しかしこの隠忍自重は、やはり武田信玄でなければできない^{こころ}忪えであった。終始、受け身の苦戦を敢てしていた甲軍のうえに、程なく吉報があった。

「見えしました。十隊のお味方勢が、彼方、千曲川の下流^{しも}からも、上流^{かみ}からも」

八幡の森の梢に、物見に登っていた者たちは、こう大声で下に知らせ、下にいた部将はすぐ、信玄の幕営へ向って、同じ声をもつて告げていた。

戦局更^{あらた}まる

遅かった。

妻女山から転じて来た友軍の来援は余りにも遅すぎる。

信玄をはじめ、苦戦にあった武田方の将士はみな、

(何しているのか)

と、今の今まで、心中に怒っていたにちがいない。

けれど、妻女山へ向って、謙信の去ったあとに臨み、空しく空虚な敵陣に立った彼らとしてみると、無理もない点もある。

朝から午まえは霧が深く、上杉勢の方向がまったく知れないこともその一因だが、何よりは、次の行動に移るに当って、上杉方にどんな詭計きけいがあるかも知れないと大事に大事をとったこと。

それと、もう一つは、山を降って、渡河に移ると、対岸の小森河岸の丘に、上杉方の勇将としてたれも知る甘糟近江守が、十二ヶ瀬やぐ一帯を扼やくして、

——敵河フタ渉タラバ河ノ半バニシテ打ツ

という孫子の兵法が曰いっている通りな姿勢をもつて備えていることだった。

このため、時刻はさらに延びて、評議区まちまち々の中に、遠く川中島方面に、銃声が聞える。鬨もよほの聲があがる、霧に代わって濛々と馬けむりが立ちこめているかに望まれる。

「しまった。敵の主力は、かえって、手薄な味方の主力を強襲した。猶予はならじ」

上流と下流、ふた手から渡渉としようにかかった。単騎で渉るのとちがって、備えも要る、時間もかかる。

ここの兵数は、別動隊とはいえ、さきに八幡原へ出ている信玄の主力よりも、遙かに、人数は多く、十将十隊に組まれ、総勢一万二千はあった。

さればこそ謙信は、もつともこの一団雲が妻女山から移動して来ることを警戒していた

のである。その抑えに、小森の丘に、今朝から満々と陣取っていた甘糟近江守は、「今ぞ」

とばかり、敵がまだ此方の岸を踏まないうちに、それへ向つて弓鉄砲を浴びせかけた。着弾距離内の水面には、雨のようなしづきが立ち、水は紅くれないに変じて、仆たおれては、浮きつ沈みつ流れてゆく者が数知れなかった。

初め謙信は、その全陣の鉄砲組を、殆どここに残して行つたようであつた。彼自身の軍隊は、当初から「一手切」の戦法を氣構えていたので、弓、鉄砲も無用と見越していたからである。

しかし、渡河中の犠牲など元より覚悟だし、それに怯ひるむ新手ではない。たちまち、下流からは馬場民部、甘利左衛門などの隊が駆け上がり、上流には、小山田備中、小畑山城、真田弾正などの諸部隊が上陸していた。

このとき、越後の甘糟近江守とその手の者の働きは、実にめざましいものがあつて、後々まで、

——上杉家に甘糟あり。

と天下の著聞ちよぶんになったほどだが、いかんせん本軍と連絡のない単立の一部隊では、ど

う奮戦したところで、一万二千の潮を長く防いでいることはできない。

上流から突出した敵勢は、早くも八幡原に達した。殆ど、瀕死の状態にまで撃攘されていた山県昌景の隊とついに合流して、その当面の敵軍——越後の柿崎隊の勝ちほこつていたものを——見るまに反撃し、追いつちし、潰乱せしめた。

下流から上がった甲軍の新手も、ひた押しに、上杉勢の背後を圧した。遠く、信玄のいる八幡神社方面にする本軍の——わあつ、わあつという喊声にこたえて、こなたの野末からも新たな力のある鬨の声をあげながら、上杉軍の側面を猛撃して行つた。

ここには、越後の直江、安田、荒川の諸隊が駆け向う。

押しつ、押されつ、怒濤と、果てもなく、血はけむり立つ。

陽は暮れんとす

「弥太郎ッ、弥太郎」

「はっ」

「旗をここの辺に立てい」

「かしこまりました」

謙信は駒をすてて、野に立っていた。遙か、味方のうしろである。

鬼小島弥太郎が、毘ひの字じの旗と、日の旗の二旒りゅうを高々掲げていると、謙信はまた螺手らしゅの宇野左馬介に命じて、

「貝を吹け」

と、いいつけた。

どういう合図の貝を吹けともいわない。けれど螺手左馬介にはわかっていた。なぜならばたつた今、主君の左右から旗本の大国平馬や和田喜兵衛や市川主膳など五、六人が、各方面の味方に向って、

「すぐ退ひきとれ」

という君命を伝令すべく八方へ駆け出している。

「戦も、これまでよ」

謙信は、まだ汗ばみの冷えない面おもてを、風にふかせながら、大きくつぶやいた。

「柿崎和泉どの、その他、遠く広瀬のあたりまで、深入りしたお味方が案じられます。――ただ貝知らせのみでよいでしょうか」

千坂内膳が、遠くを伸び上がり伸び上がりしながら、心配そうな眼をしていった。

「されば……」と、謙信もそれを考えているらしい。千曲を渉^{わた}って、甲軍の主力と、連絡した新手の敵軍に、その味方は、退路を遮断されたかたちになったからである。

「いや、大丈夫だろう。和泉守のことだ、横ざまに敵の新手勢を突いて通って来るにちがいない。されば、なお小森には甘糟^{あまじ}があり、こなたにある直江大和、安田、荒川などの隊も、ひとつにかたまつて引揚げてまいろう」

果たして、彼のことばのとおり、味方は徐々に、陣を返して来た。

とはいえ。

蔽^{おほ}うべくもない形勢の逆転だ。ここまでは明らかに、

「我れ勝てり」

と、謙信も信じていたが、一万二千の新手が彼に加わった今となつては、味方の鉾^{ほこ}を収^{おさ}めるしかなく、彼は反対に、朝からの屈伏を一転して、

——思い知ったか。

とばかり存分な攻撃をとり、図に乘せて、こんどは徹底的に、猛追して来るであろう。いや、悪くすれば、この一刻に、味方は全滅をこうむるかも知れない。ひとたび勝敗の

地を更^かえて逆転した陣容というものは、それほど危険な凶^{きよう}相^{そう}を呈^{きやう}していた。しかし謙信の面にはなお余裕^{よゆう}が見えた。彼は、自分の旗をのぞんで四方から引揚げて来る味方をながめ廻しながら、その心のうちではこんなことを考えていた。

「勝った、正しく勝った。……が、この勝利を、いかにせば勝ち獲^とれようか、勝ちとおせようか」

彼としての戦はこれまでと観たものの、武田軍としての戦いは、これからだとしていう。日食のような空を仰げば、陽はまさに申^{まを}の刻^{こく}（午後四時）頃かと思われる。

知らず・謙信とは

誰かいる。約十騎ほど。

赤い西陽^{にしび}をうけて。

しかし草には夕闇がこめ始めていた。蕭々^{しょうしやう}、吹く風は晦^くい。で、誰ともわからない、その十騎ほどの群は、旗を立てて四方を望んでいる。白地の旗には「毘^ひ」の一字が大きく見られた。

「敵」

「良き大将」

と、武田勢は駆け寄って来た。

謙信とは知らないのである。

また、その一団の武者を、謙信のほうでも、ごく間近になるまでは、武田方とは気づかないでいたらしい。

「新発田か、柿崎の手の者か？」

ここの旗を認めて、さっそく寄って来た味方の一部とばかり見ていたのだった。ところが、約百歩ほど近づいたとき、

「高坂だつ」

と、謙信のそばで、永井源四郎がさけんだので、初めて一同も、

「すわ」

と、無意識に主君の身を庇^{かば}った。

高坂弾正の部下は二、三百もいた。謙信の旗本たちの数十倍である。けれど、高坂隊のうちの一组で、その主隊でなかったのは僇^{ぎようこう}倖である。

「あの首を」

と、謙信を目がけて、襲いかかつて来たが、的確な目標と、信念ある指揮者がいない。またまた、この乱軍のなかで、数の少ない敵の一かたまりを見たので、殲滅^{せんめつ}を志して来ただけのものではない。

「雑^{ぞうひよう}兵めら」

謙信を守る人々は死力である。

永井源四郎も、竹俣^{たけまた}長七も、鬼小島弥太郎も、まず身を躍らせて、敵のなかへ入った。こういう寡兵^{かへい}で立ち向ったとき、相手の兵数に吞まれて、身を恟^{すく}め、狭地を守り、防ぐばかりを能としていたら、その孤立は完全に、敵の捕捉^{ほそく}にまかすしかない。

敵は、その厚い集形に似合わず、永井、鬼小島、竹俣などの奮迅する前から、さつと、影を散らした。

二、三の影は、猛然、槍をつけ、太刀をかぶって、迫ったかに見えたが、謙信のまわりには、殆ど、越後勢のなかでも立ち優れた旗本ばかりいたのである。

ものの数ではない。その太刀やその長巻の大きな刃は、当るものを乱離^{らんり}と払いながら、
「おうついッ」

「おういつ」

と、互いに始終呼びかわしていた。

わずか十人あまりの味方である。分散しては不利だし、また、主君謙信の楯^{たて}となる形を崩^{くず}すまいためもあった。

謙信はもう馬上にある。

そして、宇野左馬介と、千坂内膳がその口輪を把^とつて走っていた。あとを従^ついて、稲葉彦六、和田兵部、岩井藤四郎などが駆けつづき、近づく敵を斬^とつては駆け、また踏み止^{とど}ま^まつては殿^{しんがり}していた。

傷軍の将は母心に似る

犀川^{さいかわ}の岸まで謙信は一気に馬を跳^とばして来た。

つい一刻まえには、单身、甲軍の本営を、その馬蹄に懸^かけちらし、信玄の頭上^{せうじやう}に、一閃^{せん}光^{ひかり}を下した彼が、いまは身を退^{ひき}くに、何の齒^はがみもためらいもしていない。淡々たるすがたである。

「待て待て、千坂」

内膳がすぐ彼の駒の流れに曳き入れて、河を渡ろうとするのを拒こばんで謙信はふたたびそこに駒を立てていた。

「おう、そこにおいでですか」

先に、諸方の味方へ、総引揚げを伝令しに行った大国平馬や市川主膳など、前後して、彼のそばへ戻つて来た。

なお佇たたずんでいるうち、高坂隊の先手を防いで、ようやく血路をひらいた鬼小島、永井、竹俣など数名も、朱にまみれたすがたをもつて、ここに寄り集まった。

十人、二十人と、ぼつぼつ他の味方も寄つて来る。しかしその兵種も所屬も雑多だった。それを見ても、いかに味方の主力も各隊も寸断され、各 いるところに苦戦して、全面、混乱おちいに陥入おちいっているかが察しられるのだった。

水淙そうそう々、風蕭しょうしょう々々、夕闇とともにひどく冷氣も迫つて、謙信の胸は、なお帰らぬ塵き下の将士のうえに、傷いたみ哀かなまずにはいられなかった。

「新発田尾張、新津丹後。また本庄越前、北条安芸などはいかがいたしたか。柿崎は首尾よく退のきぐち口を取つたであろうか。直江は……」

鬼も挫ぐ軍神とも見えたその人が、薄暮の野を見まわして、われともなくそう呟いているすがたは、まるで帰らぬ子を門辺に出て待つてゐる母のように他念なかった。

「だいじょうぶです。お案じには及びませぬ」

大國平馬が力づけていう。

「妻女山より加勢の敵は、何分大兵、それに新手、一概には支えかねおりますが、お味方こそつて、徐々と、この犀川、丹波島の此方へさして引揚げております。——すでに、お館のなおこの辺に踏み止つておわすとは知らず、犀川を越えて、遠くうしろに退きつてゐる部隊もあるかと存ぜられます」

平馬のことばに従いて、人々も口をそろえて謙信にいった。

「無数をもつて、ここにおいて遊ばすことは、かえつて、味方の集合に、惑いを生じさせてゐるやも知れません」

「すこしも早く、犀川をお渉りあつて、無事の地へ、お退き遊ばされますように」

「ここにおわしては、いつたたび御危険が迫らぬとも限りませぬ」

謙信は、諫めを容れた。さらばと、川を渉るべく、河原へ駒を向け直した。

ここ丹波島とよぶ洲の上流には、駒の脚も立ち、人間が徒渉しても、首の根ぐらいまで

水に浸れば渉れるところもあつたが、ここから下流の方は、断然深い。

千曲は流れもゆるく、瀬も浅いが、犀川はそれに較べるとはるかに奔激していた。この川すじの水量が最も浅く涸れるのは、真夏の七月が頂上である。九月、十月となれば、山岳地方の雨期となつて、たちまち四、五尺ほどの水量は増してくるのが例年の実状であり、殊に丹波島から下流の方では、人間の徒渉できる程度の浅瀬は一カ所もない。

謙信の憂えていたのも、退口退口と頻りにつぶやいたのも、その点に気がかりがあつたにちがいない。

もつとも、味方の諸部将とて、みなこの川すじの深淺は心得ている。が同時に、それくらいな常識は武田方の諸将にもある。

従つて、いまや優勢な位置に立つた敵側としては、極力、その鋭鋒と包围形を、犀川の下流へと向けているものと思われる。

謙信とその旗本以下、およそ百余人は、まず、謙信をあとに残して、先に十名ほどの下士が槍を杖にしてぎぶぎぶ川へ入つて行つた。浅瀬を搜つて主君の道を導くためである。

ところが、それらの水先案内が、突然、川の中ほどでしぶきをあげて仆れた。鉄砲ではない。

近くで、弦^{つる}なりが響いた。——と思うまに、武田太郎義信を主将とした甲軍の精銳が、
「つつめつ」

「先を取れ」

疾風のように急襲して来た。それは前に襲撃をうけた高坂隊の一組などとは比較にならないほど血^{ちなまぐさ}腥い突風を持つていた。いや狂気に近い怒りをすら帯びていた。

一部は、脛^{すね}まで水に入り、謙信はなお河原にいた。当然、水けむりを立てて、川の者も取つて返した。

竹俣長七は、はや一人の猛敵と、斬りむすび、斬り伏せ、すぐ次の敵と組み、もんどり打つて、水際^{みずぎわ}までころがってゆく。

「ちいッ」

血の中から立上がつて、また直ちに、むらがる甲兵のうちへ駆けこんだ。よろいの草^{くさず}摺^{すり}は片袖もがれ、兜^{かぶと}も失い、髪はさつと風に立っている。

本田右近允は、謙信の眼のまえて、誰やら屈強な甲軍の将と闘っている。まるで驚と驚とが相搏^{あいう}ツているすがたである。

和田兵部、宇野左馬介のふたり連れは、たえず二本の槍をそろえて、次々の敵を迎えて

いる。

槍そう一突とつ。これも、小さい戦法といえようか。

そのほか、謙信を繞めぐる近侍は、ひとりとして鮮血にまみれない者はなかった。

百余名は、またたく間に、四、五十名に討ち減らされた。

敵もおびただしい死骸を積んだ。

しかも容易に、退かない、怯ひるまない。

それもそのはず、これは父信玄を傷つけられ、自分の隊もひとたびは潰滅かいめつに瀕ひんした太郎義信が新手を得て再編制して来た一隊である。

「序戦じよせんの辱はじを雪そそがねば、生きて甲州の人々にまみえる面つらはない」

という健気けなげなる意気をもつ指導者とその精兵なのだ。ただ恨むらくは、この際の太郎義信も、時すでに水面も暗い黄昏たそがれであつたといえ、みすみす眼前にあつた謙信を、上杉謙信とも知らずに遂に逸したことである。

死中生あり

謙信はふたたび馬腹に鞭を加えて奔^{はし}っていた。

こよいの霧はすべて血か。名月の面にも墨を吹いたような凄^{せい}氣^きが漂^{ただよ}っている。

「左馬介。ここはどこか」

「三^み牧^{まき}の畠^はの瀬かと思ひます」

「さても、遠く退^のいたのう」

慄^ぶ然^{ぜん}として、鞍^{あん}上^{じょう}から月を仰いだ。そしてしきりと、謙信は、片目をしばたいた。

額から頬へとかけて浴びている血しおが睫^{まつげ}毛に乾きかけて眼を塞いでしまうらしかった。

「そち一名か。続いて来たものは」

「左様に覚えます」

左馬介も、暗然とした。――が、謙信は何かおかしくなったように突然肩をゆすぶって笑った。

「川を涉れば、高^{たかなしやま}梨^り山のふもと。中野筋へ出るの。さらば涉ろう。左馬介、瀬を見よ」

「はいっ」

この辺は、さして深いとも思われない。左馬介は、静々、口輪を曳いて馬を川へ導いた。水は氷のように冷たい。

そして、白い波が、鞍を洗ってゆく。

謙信は、つぶやいた。詩を吟じるように。

「死中、生アリ。生中、生ナシ。——嗚呼、珍重珍重。秋水冷やかなるを覚ゆ。謙信、なお死なずとみゆる」

死中、生アリ

生中、生ナシ

この語は何かにつけて謙信のいう日常語だった。これについては、彼の家臣はこういう一話を聞いている。

まだ謙信が二十四、五歳のころ、春日山の城下で、ひとりの老僧に会った。

（和尚、どこへゆく）

謙信が馬上から訊ねた。僧は林泉寺の宗謙であつたが、振り仰いで、

（城主は、どちらへ）

と、反問した。

（されば、戦場へ打立つ門出）

と、謙信がいうと、

（あら、心もとなや）

和尚は一挥したのみで、沿道の群集の中へ立ち去りかけた。

謙信は、急に馬を降りて、近侍の本庄清七郎を呼びたてた。

（いまの和尚を追いかけてゆき、謙信に代つて驕慢きょうまんの罪を詫わびてまいれ。そして、一言ごん、謙信のために教えを垂れよと申せ）

（お詫びをして来るのですか）

出陣のやさきである、清七郎は忌々いまいましく思ったが、宗謙のすがたを追つて、その旨を伝えた。宗謙は、

（恐縮な）

と、戻つて来て、

（教えなど、何も持たぬ。野衲やのうに答え得ることなら、何なりと答えよう）

と、衣の袖を交手こうしゅして佇たたずんだ。

謙信は、馬を下つたまま、慇懃いんぎんに師礼を執とつてたずねた。

（兵を進めるには、神速しんそくを規矩きくとなす、とか申します。——法をお弘ひろめになるには、何を以て規矩きくとしますか）

（兵を進めるには、死を先とする。法を弘むにも、死を先にす。ただ今日の在るすがたみな、生を知って死を知らぬのみ。——何でもないなあ、後と先とのとりちがえだけじゃ）

（もう一問、仰ぎます）

（む、む）

（弱きを見て退き、強きに向つて進む。——逆ですか。順ですか）

（死を恐れざるものは安く、生を楽しむものは危うし。強弱進退、死生の迷悟、みなこの中の事のみ。お館には如何に）

一転、反問を呈されて、謙信はしばらく唇をつぐんでいたが、やがてこう答えた。

（死中、生あり。生中、生なし）

すると宗謙和尚はからからと笑つて、

（よし、よし。……では、行つておいでなさい）

拝をして、出陣を送った。

後、彼は、凱旋すると、微服して、林泉寺に入り、親しく宗謙禪師に参見し、以来、

学ぶこと深かったという。

謙信の「謙」は、師の一字を乞うて名乗ったものともいわれている。彼の祐筆が記した

若年ごろの日誌を見ても、

御本丸ニ御座成サルモ、常ニ御座之間ニハ一人モ罷リ在ラズ。御次ニノミミナ控ヘラレタリ。禅学遊バサルルニ御障リニヤ

と、ある。

いかに彼が禅に心を容れていたかが窺われるし、その導師は林泉寺七世の宗謙だったのである。

とはいえ彼は、ただ禅にのみ傾倒したわけではなく、神、儒、仏のいずれへも心をふかく寄せていた。天地を畏み人間の凡愚を弁えていた。仏教にしても、浄土、法華宗、天台、真宗派別なく参究して、その神髄を汲んでみな自己の心の甕にたたえていた。

乱れぬ一脈

八幡原から丹波島の曠野にかけて、夕月は出ても、鯨波の声は、なお熄まない。あなた、こなた、鎬をけずり合う太刀、槍のひかりが、吠え合う軍隊の波間に、さながら無数の魚が跳ねているように燦くのみで、もう武者のいでたち、母衣の色、旗の影、敵

味方すらもともすれば分らなかった。

高坂隊、甘利隊、小山田隊、山県隊、馬場隊、真田隊などの新手は、各所に小包囲形を作つてはその中の上杉勢を殲滅した。せんめつ上杉勢のみだれは、何といつても、妻女山から転回して来たこの新鋭な甲軍の重圧にあつた。

その中であつて、なお一糸みだれない上杉勢一千五百がある。小森附近から動いて徐々に引揚げて来る甘糟近江守の麾下だった。一退一退、貝をふき鳴らして、四散している味方をあつめながら、前後に側面に、当たる敵を討つて、堂々、犀川まで引いて来た。

「見事な退き振りかな」

と、敵の真田、高坂なども、見送つてしまった。そして、その二隊は何思つたか、急に踵きびすをめぐらして、海津城の方へ引揚げてしまった。

後に、甲軍側の内部で、真田と高坂の二隊の引揚げを、

(何故か)

と非難するものもあつたが、信玄は、それに対し、

(いや、味方七分の勝利と見て、無事の間に、引揚げたのはむしろさすがに上手というもので、難ずるには当らない)

という明断めいだんを下している。

事実、この時刻にはすでに、信玄の本陣は八幡の社を払って、今晩渡った広瀬を越え、旗本のこらず川中島を去っていたので、主力よりも先に戦場を退いたわけではなかった。あとに、累々るるいとしてなお残されていたのは、その日の傷負ておいと戦死者だった。夜露にまみれながらなおその辺に立ち働いている人影は、死骸や負傷者を、各の陣の方へ運んでゆくあと始末の兵だけである。

犀川の岸に、大旗を立てて、なお集まる味方を待っている甘糟近江守は、それから一刻ときあまりも、いんいんと貝の音をねふきつづけていた。

その音を慕って、ここかしこから集つどう残兵が三千余りとなると、やがて川を北へ渡って、葛尾くすのおに宿営した。

この日、朝から七、八時間にわたる激戦に、両軍の戦死は、

甲州方討死 四千六百三十余人

越後方討死 三千四百七十余人

という記録もあり、またべつなものには、甲軍将卒をあわせて三千二百余。上杉方三百十七を失う、という古記もある。

ただし、その数のいずれにしても、甲軍側は、武田信玄もその子太郎義信も負傷し、一族の典てんきゆう厩う信繁、ほか諸角豊後守、山本道鬼、小笠原若狭わかさなどの名だたる幕将たちも多く戦死し、或いは傷ついているのにひきかえて、上杉方で部将の戦死は一名もなかったのは争えない事実だった。上杉方の死傷は、敵の妻女山転向部隊が、新手として加わった一瞬からのもので、その死傷の殆どが、下士級に多かったのは、潰かい走そう乱軍のなかに、武田方の好餌こうじとなつて捕捉ほそくされたり、もうひとつの原因は、丹波島の下流にあたる犀川の深い流域へ、向う見ずに駆けこんで、溺れ流されたり、矢に射られたりしたためであつた。

孤影

月一痕ごん。主従二人。

耳に聞えるものは虫の音ねばかりだった。このあたりは、家も灯影ほかげも見あたらないが、きよう一日の大戦も知らぬかのように、ただ露しげく草深い。

「家はないかの」

「歩むうちに見つかりましょう」

「左馬介。寒かろう」

「わたくしは、お馬の口輪を取つて歩いております故、自然、寒さを忘れております。……が、殿こそ、馬上、しとどにお濡れ遊ばして、お体が冷つめとうございましょう」

「火が欲しい。……秋とも思えぬ冷えをおぼゆる」

みまき三牧の畠で、河を渉つて来た主従は、歩む道に、雪しずくの痕あとを残しながら、里の灯をさがしていた。

謙信はふと駒を止めて、

「味方の者ではないか。誰たれやら後の方から呼ばわつて来るようだが」と、振向いた。

馬の口輪をつかみながら、左馬介もひとみを凝こらした。白い月の下を、踊るが如く馳けて来る者がある。近づくや否、その者は息あらくいった。

「お館つ。お館でいらせられますか」

「お。和田喜兵衛か」

「あ、あ」

主君の無事を見たとたんに、喜兵衛はそれへ腰をついてしまいそうになった。彼もそこ

の河に浸^{つか}つてこれへ涉つて来たので、濡れ鼠であつたが、頭部や顔面の血しおは洗われていなかった。

「余の者共はいかがいたした」

謙信に訊かれて、彼は、ふたたび気をひき緊^しめて答えた。

「和田兵部は、おあとに踏みとどまり、敵大勢を斬つて、ついに最期を遂げました」

「兵部も、討死したか」

「また、宇野余五郎どのにも……」と、いいかけて、馬の口輪と並んでいる左馬介の顔を見ながら、喜兵衛は口をにこした。

宇野余五郎はそこにいる左馬介の弟だからである。

「和田どの。余五郎も、果てましたか」

その兄の顔いろに、ぜひなく答えた。

「されば、乱軍のなかに、目ざましい働きをしておられたが、満身数カ所の重傷を負い、苦しげにみえました故、それがしが肩にかけて、ついその三牧^{みまき}の河の瀬まで来ましたところ、河の中ほどまで渡つて来ると、それがしの耳元でこういうのです。……所詮、お館に追いついても、この体では、かえつて殿の足手まとい、御奉公のすべも尽きましたれば、

お別れすると……」

「お。そして」

「呀と……思う間に、それがしの手を挽もぎ離し、肩を離れて、激流のなかへ自ら溺れて行きました。呼べど、叫べど、もう影もなく声もなく」

「……そうでしたか」

左馬介は、面を斜めに上げたまま、月に答えている。

謙信は黙々、手綱をすすめた。この暁には、一万三千の兵陣に囲いに繞ようされた総帥が、孤影わずか二箇の家臣とともに戦場を去つてゆくのである。そも主従の感慨はどんなであらうか。戦場は天地を一字の堂とした大きな修行の床ともいえる。月に白い謙信の面おもてには、寸毫すんごうといえども、敗けたという色は見えなかった。むしろその唇元には、一業を仕果したあとのさっぱりした寛くつろぎと、次の戦いに対する構想に他念ないかのような含みすら窺うかがわれる。

狼

「や、明りが見えます」

漸く、民家を見たかと、左馬介が歩みながら、馬上へ告げると、

「いや、農家の火ではあるまい」

謙信は顔を振った。

そういわれてみると、ただの燈火や、農家の炊^{かし}ぎの火にしては、ちと火光が大きすぎる。
「なるほど、仰せのとおり、大焚火している者があるようです」

道を二、三町もすすんでから、宇野左馬介も怪しみ出した。和田喜兵衛が、物見して参りましようか、という謙信は、

「それには及ばぬ。この辺にまで武田勢の散っておる謂^{いわ}れはなし、思うに、きょうの合戦を気構えて、落^{おちゆうど}人の道に綱を張り、稼ぎを待つ野武士共の群に相違あるまい」

「野武士とあれば、多くも二、三十人。それも多寡^{たか}の知れたあぶれ者の烏合^{うごう}です。喜兵衛殿と二人して、お道を払って参ります故、殿にはしばし木蔭にでもお憩^{いこ}い遊ばしてお待ちください」

左馬介が早、馳け出そうとすると、謙信は、

「止^やめよ。止^やめよ」

と、駒を回^{めく}らして、

「遠くも、ほかを廻り道して行こう。喜兵衛、細道を捜せ」
と、いった。

甲軍数千の鉄壁を蹴やぶって、その旗本陣へ単身駆け入ることすら敢えてした謙信が、道を阻^{はば}む野武士の焚火を見ると、馬を回^{かえ}して、無事な抜け道をさがしているのだった。

その夜は、保科^{ほしな}の山路をこえて、大木の蔭に、わずかな一睡をとった。

次の日は、高井野の里から山田を越え、更級^{さらしな}へ下りてゆく。

その晩も、野武士に出会ったが、避けるに道なく、喜兵衛と左馬介が追いちらして通った。

しかしこの一群の野武士は、謙信の鞍装束^{くらしようぞく}の値打を踏んで、どこまでも執念ぶかくあとを尾けてくる。

夕暮、安田の渡しとよぶ川筋へかかった。振顧^{ふりかえ}ると、小一町ほどうしろに、がやがや声をあげながら野武士のかたまりが騒いでいる。笑止なことには、近づいては来ないのである。虚があつたら咬^かみついて来ようとしている狼の群に似た。

「よいものがあります。あれへお駒を曳いて渡りましょう」

対岸へ向つて、こちらの堤^{どて}から、太い綱が一本張つてある。その下に繋いであつた筏^{いかだ}に馬と人は乗つた。

その太綱^{ふとづな}を手繰^{たぐ}つて、筏が川の中ほどまで出たとき、うしろの堤の上にまた四、五十人の人影があらわれた。すぐ追つて来た野武士たちである。

「何か吠えておりまする」

筏の上で、喜兵衛と左馬介が笑つたとき、二、三本のへ口へ口矢が飛んで来た。鉄砲も持つてゐるらしいが、弾が無いとみえる。ただ白い歯を剥^むき出している顔ばかりたくさん見える。

筏は、悠々と、岸に着く。

謙信は馬の背に移りながら、

「左馬介。その渡し綱を、斬つておけ」

と、命じた。

左馬介が、太刀を抜いて、太綱を切ると、ばしやツと、水面を打つたそれが、大きな弧を描いて、一方へ流れた。

白い歯だの、たわしのような頭だの、大きな手の影などが、対岸の堤のうえで、再び口

々に何か吠えたり、罵ったり、地だんだ踏んで躁い^{さわ}でいるようである。もうここは戦場ではない。世間であつた。

蕎麦^{そば}の花

謙信が越後路へ落ちてゆく途中、この安田の渡しか、ほかの所であつたか、黄昏^{たそがれ}頃、道へかかったとき、

(行く手の彼方に、川が二筋見ゆるようだが、千曲の川筋ならば、ふたつあるわけではない。道をとがちがえたのではないか)

と、いったところ、和田喜兵衛が笑つて、

(お館にもさずがお疲れとみえます。あの一筋は川ではなく、蕎麦^{そば}の花がいちめんに咲いているのでございます)

と、答えたとか。

そんな話がこの地方に残されて、後々まで語り草になつたらしいが、これは何かの誤^{ごびゆ}謬^うらしい。

陰曆九月十日過ぎには、もう蕎麦の花ざかりは遅すぎる。こんな口碑こうひが伝わったのは、この戦後、春日山へ帰るとすぐ、和田喜兵衛が変死したところから起ったものと思われる。途中の食しよく中あたりか何かであろう。春日山城へ辿りつくと、喜兵衛はひどく吐瀉としやをして死んだ。謙信が、

(不憫ふびんな)

と、手ずからその口へ薬を啣くはませてやったというにかかわらず、息をひきとってしまった。

それが誰とはなく、和田喜兵衛は血を吐いて死んだと伝えられ、その原因は、謙信ほどの大将が、蕎麦の花を川と見違えたというようなことをいったのは、一代の恥としてもよい。世間に聞えては天下のもの笑いにもなる。で、帰城するとすぐ喜兵衛を殺したものである。そうに違いない。——と、風評はこういうのであった。

おそらく、武田方の捏造ねつぞうかもしれない。いずれにせよ、理由のない誹謗ひぼうである。

しかし、謙信主従が、川中島から越後に入るまでの道は、想像以上な艱難かんなんであつたらしいことは確実に想像される。寝るにはもちろん食物を得るにも困難くわんなんらしい。それに伴う郷土郷土の伝説はいくらかもあるが、多くは、蕎麦の花に類したことのみかと思われる。

立つ鳥の跡

善光寺の東南、裾花川を前にして、直江大和守は、大荷駄、小荷駄を集合し、なお他の部隊の散兵も、悉く容れていた。

大戦の翌日も、その翌日も、踏み止まって。

一方、犀川まで退いて、残兵を寄せていた甘糟近江守とも、完全に連絡をとった。そして、合流し、川中島の曠野から近村隈なく兵を派して、味方の死骸、負傷者、旗の折れままで、残りなく陣中に収容した。

もちろん主君の安否については、犀川の上流で殿軍しんがりしたという千坂内膳、芋川平太夫、その他の旗本たちのことばに依って、無事御帰国という推定はついていた。旗本たちとしては、知らないまでも、謙信のあとを慕つてと、いい合ったことでもあるが、

「かえって、敵に、御主君の道すじを、教えるようなものになる」

と、直江大和守は、極力、それを止めた。

悠揚ゆうよう迫らざるもの。それこそこの退き口の大事であるばかりでなく、次の軍への備え

であるといった。

戦後の、きのう今日。

この態を遥かに望んでいた甲州軍の方では、

「直江、甘糟など、なお程近い裾花川にあつて、敗軍の兵をまとめております。われわれども一手ずつの兵をひきいて、疾風、そこを撃つならば、生きて越後に帰り得るものはないでしょう」

と、小畑山城守を初め、氣負いきつた諸將はみな、信玄の前に出て、こう進言したり、希望したりしたが、信玄は、

「いやいや、止めたがよい。あの大傷手おおいたでをこうむりながら、なお自若じじやくとして、わが陣前近く、三日にわたつて、芝居しばい（戦場）を踏まえているは、敵ながら天晴者よ。——うかと手出しして、窮鼠きゆうそに噛まれなどいたしたら、其方どもよりは、信玄が世のもの笑いなろう」

そういつて許さなかった。

三日目から四日目にかけて、越後勢は、この野へきたときと何らの変化もなかったように、旗鼓堂々きこ、北へさして徐々に引揚げて行つた。

勝ち鬨
勝鬨

きれいに上杉勢が引払ったあとを、檢察に行つて、一巡馬をとばして歸つて来た初鹿野伝右衛門は、

「はや、腰兵糧の殻一つだに、跡には散らかつておりません」と、報告した。

信玄は聞いて、

「それみよ、それほどなたしなみある敵、もし撃ちかかったら、少なくとも、彼と同数な味方を損じたにちがいない」

と、左右のものへいった。

しかし、諸将は口々に、

「この最後まで、八幡原の芝居（戦場）を踏みしい給うたからには、必定、このたびの御合戦、味方の御勝利なることは、疑いもございますまい。よろしく御勝鬨お勝ちどきの式を御執行あつて然るべく思います」

と、述べた。

それには、信玄も異論はない。一族の弟、数名の大将、数千の部下を失い、また自分も負傷し、一子太郎義信まで、数カ所の傷を負っている惨状だが、

「彼はみだれ、我は結び。彼は去り、我は残った」

と、信じうる事実の上に、満々として、心は戦勝に誇っていた。

「芝居（戦場）を浄めよ」

信玄はその用意を命じた。

海津へ立退いた高坂弾正その他の将士もすべて会した。

式は、広い地域を要する。全軍、隊伍を組んで、肅と整列し、中央の浄地には軍神を祭り、塩水を撒いて、白木の祭壇に、榊さかきをたて、燈明をともすのである。

そして、帷幕いばくの大将の重なる人々が、次のような役割をもつて配され、祭壇に向つて厳かに立った。

一 先祖の御旗持

高坂弾正こうさかだんじょう

一 孫子の御旗持

山県三郎兵衛やまがた

一 右方、南天弓なんてんゆみ

小山田備中守

一 左方、南天弓

馬場民部少輔しょうゆう

一 陣太鼓

あとべおおいのすけ
跡部大炊介

一 陣貝

ちようかん
長坂長閑

一 御打物おんうちもの

飯富兵部少輔

一 青貝の槍

小畑山城守

一 拍子木

甘利左衛門尉

総帥そうすい信玄は、やや離れた位置にあつて、一族、旗本をうしろに、床几へ腰かけている。右手を繃帯おししていた。その白い布がわけてここには目立つ。また、無言に甲州武士の胆心に何ごとかを訓おしえている。

その床几の前へ、恭うやうやしく、一人の将が、祝いわいざかな

肴さかなをのせた折敷を捧げると、信玄は、そ

の勝栗を一つ取つて、左の手で、日月の大扇たいせんをさつと開く。

そして立上がるなり、大空へ向つて、

「えいつ、えいつ、おおうつ……」

と、いう。

その大音について、諸大将以下、総軍の兵も、声いっばい、

「えいつ、えいつ、おおうつ……」

と、凱歌する。

三度、繰返すのであった。

天下泰平、国土安穩、万民安全、怨敵退散。

南天の弓が、ぴゅつ、ぴゅつ、と風を斬る。

ふたたび、天地もとどろくばかり、えいつおうつ——をさけぶうちに、それはただの喊^か呼^{んこ}となり、歓声となり体じゅうの熱気と感動を空へ放って、あとは自らわれ知らず頬に流れ下る涙となった。何故かは覚えず、ただ双頬にそれが濡れてくるのだった。

世評是々非々

春日山へ総引揚げの後も、謙信以下、上杉方の家中はみな、

「お味方の勝ち軍だ」

「敵方の信玄父子は傷ついた」

「甲州の一族大將は、枕をならべて討死したが、それに反して、お味方には一將^{しるし}の首級も

敵に取られていない」

と、あくまで自軍の大捷たいしやうを信じて疑わなかった。

ところが、同様にまた、武田軍のほうでも、

「甲軍大勝利」

を謳歌おうかして熄やまず、八幡原に踏みとどまって、堂々、勝鬨かちどきの式まで行つて、甲府へ引きあげた。

そこでこの永禄四年の川中島の大戦というものは、いったい甲越のいずれに真の勝利があったものか、武門はもちろん世上一般の論議になり、ある者は、謙信の勝ちといい、ある者は信玄の勝利といい、当時からすでに喧やかましい是非ぜぜひ々々が取交わされていたらしい。

太田三楽入道は、戦国の名将として、尠すくなくも五指か七指のうちには数えられる兵学家の一人であるが、その人の戦評として、次のようなことばが伝えられている。

「川中島の初度の槍（明方より午前中の戦況）においては、正しく十中の八まで、謙信の勝目なりといつても誇張ではない。陣形から観ても、上杉勢の先鋒はふかく武田勢の三陣四陣までを突きくずしておる。かつてその旗本まで敵の足に踏みこませた例はないと誇っていた信玄の身辺すら、単騎の謙信に踏み込まれたのを見れば、いかに武田軍が一時は危

険なる潰乱状態に陥入ったか想像に難くない。かつは、有力なる大将たちも、幾人とな
く、枕をならべて斃れ、信玄父子も傷つき、弟の典厩信繁までが討死をとげたことは、何
といつても惨たる敗滅の一步てまえまで追いつめられていたことは蔽いようもない事実と
いわねばならん……けれど、後度の戦（午後より夕方まで）になつては、まったく形勢逆
転して、十に七ツまでも、信玄の勝利となつたは疑いもない。この転機は、妻女山隊の新
手が上杉軍の息づかれを側面から衝いた瞬間から一変したものであり、上杉方の総敗退を
余儀なくされたのは、首将謙信自身、陣の中樞を離れて、一挙に速戦即決を迫らんとし
たのが、ついにその事の半ばに、敵甲軍の盛返すところとなつたので、謙信の悲壮極ま
る覚悟のほどを思いやれば、彼の遺恨に対して一掬の悲涙なきを得ない。——しかし、
以上のように双方を大観すれば、この一戦は、勝敗なしの相引というのが公平なところで
あろう」

太田三楽の戦評のほかに、徳川家康が後年駿府にいたとき、元、甲州の士だった横田甚
右衛門とか、広瀬美濃などという老兵を集めて川中島の評判をなしたことも伝えられてい
る。

家康がいうには、

「あの折の一戦は、甲越ともに、興亡浮沈のわかれともなるところだから、軽々しくうごかず、大事を取ったことは、双方とも当然といえるが、それにしても、信玄はちと大事を取り過ぎている。謙信が妻女山の危地に拠^よつて、わざと捨身の陣容をとったことに対し、信玄は自分の智恵に智恵負けの形が見えた。また、九月九日の夜半から暁にかけて、謙信が妻女山を降りて川を渉る半途を討つの計を立てていたら、おそらく越軍の主力は千曲川に潰滅を遂げたにちがいない。それを八幡原に押出して、相手の軍が、平野を踏んでから後を撃つ構えに出たのは、信玄に似あわしからぬ落度である。要するに信玄は、謙信の軍を観て、首将謙信の心事を観^みぬくことが少し足らなかった」

なお、兵学家の一家言^{かげん}なども、いろいろあるが、総じて、三楽と家康の批評にほぼ尽されてゐる。

ただ、なおここで、現代から観ていいうることは、信玄はあくまで物理的な重厚さと老練な常識を以て臨^{のぞ}み、謙信はどこまでも、敵の常識の上に出て、学理や常識では想到し得ない高度な精神をふるい起して、この戦いをこれほどにまで善く戦ったということである。もし謙信が、信玄同様に大事をとり常識をまもって、川中島へ出軍したとしたら、その戦前、また周囲の情勢などから判じて、到底越後上杉の名誉はあり得なかったところだっ

た。世評は何といおうと、謙信自身にとっては、絶対な道と二なき戦法ふたつを以てしたことは快戦だったにちがいない。要するに、彼の国防も、彼の進撃も、帰するところの信念はひとつ、

——死中生アリ、生中生ナシ
の一語に尽きるものだった。

わすれもの

「伝右。伝右衛門」

信玄がふと呼び立てた。甲府へ帰還してゆく行軍の途中である。

旗本の列から、初鹿野伝右衛門が、駒を横に出して、お召しでしたかと、側へ寄りそう。信玄はうなずいて、

「さればよ、いま思い出したぞ、戦場に忘れものして来た。さて、どうなりつらん、急に心がかかりになった。急いで、そちはあとへ引り返し、忘れものを拾うて来い」

「お忘れもの？ ……。はて、何をお忘れあそばしましたか」

「いじらしいものだ。それはまだ二十歳にも足らぬ旅すがたの女子。矢弾のなかに迷うていたのを、兵に申しつけて、八幡原の社家のうちに庇うておいたぞ。はやく戻って、無事を見て来い。いや、拾うて来い」

「ありがとう存じまする。……いつの間にお目にふれましたやら、果報者、おことばにあらまえて」

「そちひとり、遅れて甲府に入るも、さしつかえない。伴うてゆるりと、凱旋せよ」
大軍は、彼ひとりを残して、先へ甲府へ還つて行く。

伝右衛門は、主恩に感泣しながら、ふたたび、きのうの戦場へもどつた。

一夜の雨に、満地の血しおは、きれいに洗われ、数日の人氣もない夜霧朝霧に、踏みしだかれた草の葉も花も、みな生き生きと、姿を擡げ直していた。

八幡原の森の外に、初鹿野伝右衛門は駒をつないだ。誰が掃き清めたのやら、神社の境内は、きれいに箒目すら見えていた。さしもの修羅狼藉のあととも掻き消され、そこに見えるのは寂とした中の蔦紅葉と杉木立の青い仄暗さだけであつた。

伝右衛門は社家の裏へ歩いて行つた。いつぞや水を汲んだ覚えのある井戸のそばに、禰宜の妻が嬰兒のむつきを洗濯していた。

「あつ？」

何気なく振向いた禰宜の妻は、伝右衛門のすがたを見ると、すぐいつぞや激戦の恐怖を衝かれたように、濡れ手のまま跳びあがった、極度に顔いろを顫かせた。

で、伝右衛門も、物腰に気をつけながら、特にことばもやさしく訊ねた。

「こなたの家に、鶴菜つるなという若い女子が世話になっておろうが。わしは鶴菜の身寄りのもの。甲府の伝右衛門が迎えに来た。そういうてくれぬか」

「はい。……かしこまりました」

禰宜の妻は、手を拭きながら、後退あとずさりに彼の前を去った。そして急に台所口から奥へ

駆けこんだ。

家の中で、鶴菜の声があった。鶴菜はまだ弾傷が癒えないで床に横たわっていたが、父の伝右衛門が来たと聞くと、濡縁ぬれえんまで転び出して来てさげんだ。

「お父さまっ」

この日は伝右衛門もいつぞやのような怖こわい顔の人でなかった。つかつかと歩み寄るなりその腕に、このいじらしいものを深々と抱いて、

「むすめ。むすめ……」とのみでしばし何のことばもない。

父娘おやこの者が、人目もなく、そこに相擁ふとこしているすがたを奥から眺めながら、禰宜の妻は、いぶかしげに、懷ふとこをあけて、児に乳ぶさを与えていた。

呉越の道

次の日、ひとつ駒の背に、父娘は乗って、いわゆる「信玄の棒道」を、初鹿野伝右衛門は甲府へ向ってゆく。

身はなお具足よろに鎧よろっていたが、主君に許されて今は鶴菜の父となりきっている彼だった。一城を賜い、一郡を受けるよりも、彼として、これは無上な主恩と感じている。

「鶴菜」

「はい」

「母の顔はおぼえているか」

「わすれません」

「叔母御の顔は」

「覚えております」

「弟たちは」

「うつすらと……」

「無情な親共と恨んだことはないか」

「さらさらごさいません。ただはやく戦^{いくさ}が勝てばお膝のそばに帰れようと、そればかりを楽しむに」

「今こそ、父の膝に還^{かえ}つて来た」

「また、いつの日か、越後へ行かなければなりませんか」

「もうよいよい。こんど行くのは、お嫁の先だよ」

急がない旅となった。秋はいよいよ深い。鶴菜は夢のような心地だった。

すると、甲府もやがて近い頃、彼方から来る一群の旅人があつた。

「あ……？」

鶴菜は、父の背に、すがりついた。駒の背はひとつである。彼女だけ逃げかくれするこ
とが出来なかった。

「鶴菜。何を怖がるか」

伝右衛門が振向きながら、手綱をとめてたずねると、鶴菜は怯^{おび}えた鶯^{うぐいす}のように、そつと

眸をあげていった。

「彼方から来る大勢の衆は、みな越後の土方さむらいです。そのなかに、黒川大隅おおすみ様もいらつしやいます。大隅様はわたくしの御主人でした。昨日までわたくしをわが子同様に育ててくれたお方。どうしたらよいでしょう」

「なるほど」

と、伝右衛門も彼方へ眼を凝こらして、

「馬上の二人は、その大隅と、斎藤下野らしい。その他は、先に越後の使者として、甲府に参り、合戦と共に捕えられていた越後衆。はて、どうしてこれへ来たか？」怪しみながら佇んでいるまに、先の十人ばかりの一群は、彼の眼のまえに近づいていた。

「やあ。初鹿野のではないか」

元氣よく、まずこう先方から声をかけて来た。紛まぎれもない片目の使者斎藤下野である。また副使の黒川大隅とその以下の随員たちである。

「才。下野どのか」

双方から馬を寄せ合つて、あたかも旧友の如く、懐かしげに話し出した。

「すでにわれらの手に捕われ、以後、甲府の牢獄におられたはずの御一行が、どうしてこ

れへ見えられたか」

「されば、見給え、この通り、信玄公の手形もいただき、木戸も関所も、悠々と通つて参つたもの。決して、破牢脱走などして来たものではない」

「元より信玄公のおゆるしなくては能わぬことだが、それにして、御帰国後、直に無条件で其^{そこもと}許^{もと}たちを放さるるとは、腑^ふに落ちぬこと。いかなる理で御帰国をゆるされたか」

「はははは」

例の調子で斎藤下野は哄笑しながら、

「このたびの合戦も、まず一応終りを告げたというもの。そこでわれら如き喰いつぶしを、いつまで、甲府の牢に留めおかれたところで、何の意味もござるまい。というて、馘^{くびき}らんか、越後表にも、甲府の隠密や信玄公が一類の者、何十人か捕え置いてあれば、いつでもその者共の首を斬つて、お酬い申すことができる。——そこはさすがに御賢慮に抜かりのない殿、昨日われらの縄目を解いて、一書を授け、且^かついわるるには。——お身らを解いて国許へ帰しつかわす故、春日山に囚^{とら}えておる甲州の家人共をも、無事に解いて放されいと、つまり敵人と味方との生命^{いのち}の引換えを申し出られた。——われらもとよりさして欲しい生命でもござらぬが、折角、助けるといふものを、無碍^{むげ}に断つて捨去るのもいかがと思

い、のそのそと戦も果てた今頃を、これから越後へ帰る途中でござる」

「いや、それで様子がよく分った。まずは、無事御帰国で、目出度いと申しあげる」

「其許も、川中島に一戦を遂げ、且^かつは、久しぶりに、おむすめ御も連れ戻られ、この上の祝着はござるまい」

「お察しのとおりでござる。むすめに代つて、黒川大隅どのには、とりわけお礼を申しあげる」

互いに礼を施して、甲府へもどる者と、越後へ帰る一行とは、東西に道を交わし合った。そしてしばらくやり過してから、鶴菜が振向くと、黒川大隅もこなたを振^{ふり}顧^{かえ}っていた。

個人的には深い情誼^{じょうぎ}や恩を感じながらも、この戦国の棒道では、こういう別離やこういう挨拶が、何の不自然もなく取交わされて戦わぬ日といえども、黙々のうちに、

「彼は越後」

「彼は甲州の土^{さむらい}」

と、はつきり国土をべつにして顧みなくその国に生きその国に死ぬことを希^{ねが}いとしていた。

秋ぐさ供養

桔梗は褪せ、芒はのびている。

斎藤下野の一行は、川中島を斜めに通つて、北国街道のほうへ馬を向けていた。

千曲川の彼方に、海津の城の白壁が見える。いまなお、甲州軍の一部はそこに充満しているらしいが、さもさも、戦はどこにあつたかといわぬばかり、城のすがた、山川のたたずまい、すべて平和な光に春き濡れていた。

「——甲州方討死、四千六百余人。上杉方討死、三千四百七十余名。ああ……大きな犠牲」黒川大隅は無量な感につつまれている。的確ではないが、両軍の戦況や損害は、はやくも沿道に伝わっていた。これへ来るまでに、一行はかなり審さにそれらのことも知った。

「ひと休み致そうか」

下野は、馬を降りた。そして秋草の中に坐りこんだ。

千曲の水の岐れが、涼々と近くを流れている。過ぐる日の大戦に、味方はどこで苦戦したろうか。郷党の知己、縁者、誰の兄、誰の弟と、思い出さるる幾多の面々は、どこに戦い、どこに討死したろうか。

思いめぐらしていると、陽の沈むのもいつか忘れてしまう。そしてひしと、

「ここに骨を埋めた三千のいのちを、犬死とさせてはならない」

斎藤下野は胸に誓わずにいられなかった。そして居るに堪えなくなったように、急に馬の背へ回^{かえ}つて、供の人々へ呼ばわった。

「おういつ。行こうぞ。陽が暮れかけた。……先へ参るぞ」

人々は野に散らかっていた。その影を見まわすと、或る者は、石を積んで塔を作り、或る者は鎧のちぎれや兜の鉢^{はちがね}金などを寄せ、花を折って、供養^{くよう}していた。――だが、不意にわれに回ると、石も捨て、花も捨て、思い思いにみな斎藤下野の馬のまわりへ駆け寄つて来た。

静夜

たれ様の御次男も、さすがによい死^{しにかた}方をなされたそうな。

あの家の御主人も、比類ない働きして、見事な戦死をお遂げなされたとか。
遺^{のこ}るお家族の人々も、さだめし肩身がお広かろう。日頃のおたしなみの程も窺^{うかが}われる。

次の戦にはあやかりたいものよ。

川中島の戦も果てたあと。

春日山の城下は一しきり人と人とが寄りあえば、そうした噂にもちきっていた。

そして毎日のように、戦死者の野辺の送りや、遺族の家の弔問に、たれも彼も、わが家も打捨てて歩いていた。

広からぬ越後一国から、一時に三千余の戦死者を出したのである。こういう戦後の現象は春日山城下だけではない。村へ行っても、山間の部落へ行っても、香煙がにおっていた。毎日のように、寺々の鐘が鳴っていた。

上杉謙信は、日を卜ぼくして、城下の林泉寺で、大供養を執とり行つた。

もちろんこの日は、春日山の二十四将以下、家中悉ことごとく参列し、また身分のひくい足輕の遺家族といえ、誉ほまれある家々の老幼はすべて法筵に列して、親しく、謙信からことばをかけられた。

夕刻、謙信は、帰城した。

晩秋の庭に対して、いつもの如く、寂として坐っていた。
燭が来る。

その燭をすえる位置まで、日常、疊の目ひとつ違っていない。

そういう風に、規律正しく、躡^{しつ}けられている近習であつた。

彼には、妻がない。夜食も禅僧のように質素である。済むとまたすぐ居室に帰る。居室をそのまま、宴樂の席とするようなことはない。ここに戻つて坐れば、いつも本来の自分に立ち還つてゐる。默想か、読書か、稀に、硯^{すずり}をよせて、何か書きものなどしている。

「……誰だ」

うしろを見た。

袖部屋のふすまが静かに開いたからである。

中へ入つて、うしろ向きに、ふすまを元のように閉めている者がある。

謙信はすぐ思い出した。

——義清か。と。

夕方、近^{きんじゆう}習が燭を運んで来たとき、今夜、村上義清が折入つてお目にかかりたいと申されていますが、と内意を訊ねていた。いつでも参るようにと、答えてあつたのを、謙信はそのまま忘れていたのである。

「お邪^{さまた}げになりませぬか」

義清は、遠くに平伏して、そつと燭の方を窺った。

謙信が独り居室に静坐しているときは、たいがい禅に潜心せんしんしているのだということを常々聞いているので、こよいもと、畏る畏る、憚はばつたのであった。

——が、謙信のかたわらには、めずらしく、古今集こきんしゅうか何かの和歌の書が読みさして伏せてあつた。

「いや、かまわぬ。おはいりなさい」

謙信は、近習をよんで、しとねをすすめた。村上義清は、久しく上杉家の帷幕に加わっているが、臣下ではない、客である。いわゆる客将かくしょうであつた。

歌ごころ

「せつかく、御学問中を」

「いやいや、徒然つれづれのまま、ほんの慰みの書を手にしたまで」

「和歌のお書物のようですが」

「近衛前嗣卿から贈られた古今こきんです。みずから和歌を詠よもうなどとは思わぬが、兵馬へいば倥こうそ

惚のあいだにも、歌心は有りたく思う」

「歌心と仰せられますと」

「さて、どういうてよいか。……大和心と申さばややそれに似かよう気もする。もつと小さくいうならば、剛に対する柔、殺に対する愛、刹那に対する悠久、動に対する静」

「すこし分りかけました」

「年々の合戦、日々も戦い。自然心は一途となる。しかしこの戦国の果てなき末を思うと、たとえば長途を行くが如く、高き山へ登るがごとく、呼吸の調べが大事と思う。吐く息、吸う息、そして長きを保ち、乱れを知らぬ呼吸。つくづく思う。その大事をな」

「きのうは、単騎、信玄の中軍へ馳せ入られ、きようは、静夜に、そのようなお考えを抱かれますか」

「たとえば、琴の絃も、懸けたままにしておいては、音がゆるむ。弓は、射るときのほか、弦を外しておくものぞ」

「外せば、外したまま懸けるを忘れ、懸ければ外すことをつい忘れ。なかなかその心機を転じることが、われらには難しゅうござりまする」

「されば、凡夫われらには、暁けては、兵馬を見、燈しては書に親しみ、血腥い中に

あるほど、歌心も、欲しいとするのじや。平易に申せば、身ひとつに文武ふたつをあわせ持つこと。至極やさしい。しかし難しい。——いうことだけは謙信にもいえるが、さて、おこな行うとなるとだな。……ははは」

おおらかに一笑すると、短たんけい檠の灯までが華やいだ。折ふし近習がそれへ供えた麦菓子くつろをひとつ撰とつて、茶をふくみ、寛いだ客あしらいを見せて、やがて彼のほうから訊いた。「ときに、折入つて、こよいは何事のお越しかの。承ろう。義清どの、ちと、お願いもすぐれぬようだが、何とせられたか」

窮鳥

義清はうなだれた。落涙している。

「……………」

燭は白々しらじらと主客の沈黙を照らし、庭のしじまをゆく泉の音おとがせんかんとその灯を湿らせてくる。時折、時雨かと思ふばかり木の葉が大殿の廂ひさしを打った。

「思い極めて参りました。義清のねがい、甚だ身勝手にござりますが、お聞き届け賜わり

ますように」

平伏している。

そしてなお涙しているらしい。

謙信には思い当ることもないようであった。小首を傾^{かし}げて聞いていたが、一体、そのねがいとは何かと、再び義清に訊ねた。

義清は、流^{りゅうてい}涕^いを拭^{ぬぐ}つて、漸^{かた}く、容^{かたち}を正し、謹^{かしこ}んで今日までの恩遇に謝してから、こういった。

「どうか、九年前に、私から御当家に対して、お継^{すが}り申したお頼みの一条は、取消していただきとう存じます。——つまり今日限り、村上家に対する御任侠はおやめねがいたいのです。それがし自身も、直ちに、お暇を乞うて、高野の山奥へでも、遁^{とん}世^{せい}仕る所存にござりますれば」

非常な勇気をもって、義清は一息にいった。生来、善人で遠慮がちなこの人が、これ程のことをいうには、よほどの決意と勇気を胸に誓つてであらうと、正直にその心もちは受けとれるのである。

「ほう」

謙信はその大きな眼を殊さら大きくみはった。

「……では、何といわるる。あなたは、祖先以来の地、旧領信濃に帰って、ふたたび以前の領民にまみえる望みを断念したと仰せらるるのか」

「そうです。……折角、今日まで九カ年のあいだ、お館を初め越後衆全体の御援助をこうむりましたが」

ここまでいうと、義清はまた胸をくずして、べたりと、畳に両手を落とし、その上におもて伏せてしまった。

髪の毛がふるえている。その髪にもはや白い霜が見える。

いまこそ、他家の客分となつて、かく謙信の前にも卑下ひげしているが、この人の血液には正しく高貴のながれさえある。清和源氏の末流、信濃の名族だ。気のどくな境遇よと、謙信はその老いを見るにつけすぐ思う。そしてその一半の罪は自分にあるような責任すら覚えるのだった。

いまから十余年前までの村上氏というものは、北信濃一円を威令して、坂城さかきの府、葛尾くずのの城を中心に、祖先鎮守府將軍源頼義の一族が末裔まつえいとして、誰も仰ぎ敬う位置に榮えていたものである。

それが、天文年間の半ばごろから、年々、甲斐の武田氏に蚕食され、上田原の戦を
 さいごとして、本城は落去、一族は離散、夫人は千曲川に身を投じて果てるなどという、
 世が静かなら有り得ない惨たる滅亡を告げてしまった。

天文二十二年の八月。

義清は、殆ど身ひとつで、敗軍の中から遁れ、この越後へ来て、

（救って下さい）

と、謙信にすがった。

時に、謙信は年まだ二十有余。この名族の果てが、膝を屈して、義に訴えるすがたを、
 何で、すげなく見ていられよう。そのとき彼が義清に与えた言葉は、

（よろしい。御安心なさい）

明瞭な、然諾の一語だった。小国辺隅、しかも士馬少なく、産業もふるわない北国
 から起つて、謙信が、甲州の強大武田家と、以来、殆ど年々といってよいほど、戦雲を曳
 いて対峙することになったのは、実に、この一羽の窮鳥が、越後へ入国したのが抑《そ
 もそも》の端緒である。機ツかけである。謙信対信玄の相剋はここに起因を孕んだもの
 である——とは、世上一般も、越後の人々も、甲州方でも、あまねく信じているところだ

った。

かくて、一片の義氣から発した戦は、きようまで、九年の長いあいだに及んでいる。しかも敵国は強い。土馬精銳に鳴る甲山の猛将勇卒だ、また宇内^{うだい}幾人のうちにかぞえられる名将武田信玄だ。

義清のねがいはまだ達しられない。義清の旧領には、依然、武田の侵略が、そのまま暴威を誇っている。——この状態はついにこのまま永遠のものではないかと、近年は義清も、祖先の地へふたたび還ろうとする夢を、自ら儚^{はかな}い望みにすぎないものと諦めかけていたふうであつた。

そこへ、きよう。

義清の胸を、痛切に打ちなやましたことがある。林泉寺の大法要であつた。

苦衷の義清

きようの大法要に、義清も、もちろん参列していた。

眼^まのあたりに、彼は、川中島で討死した人々のたくさんな遺家族を見た。

老いたる父母、今からは親のない幼き者たち、乳飲^{ちの}みを抱いている白き面の妻、その甥、その叔父、その姪など、無数の縁者を、きょうの法筵^{ほうえん}に見た。

一山の高德天室、宗謙、その他の衆僧が、曹洞最大な法華^{ほつけ}をささげて、英魂の冥福をいのるあいだも、義清は、ひとみをあげて、その壇を仰ぐことができなかった。また、眼をそらして、伽藍^{がらん}の廊上階下に満ちている多くの遺家族たちを正視できなかった。

(これもみな帰するところ、自分が越後に遁^{のが}れて来たために生じたこと)

と、ひとり問い、ひとり責め、居ても立つてもいられないような心持になっていた。

ひとたびそういう自責を抱いてからは、耳元に鳴る鐘も、戦歿三千余魂が声をあげて、自分を責めるかと思われ、義清は生きている空もない心地だった。

実のところ、彼はすでに、林泉寺にいるうちに決意していた。剃髪^{ていはつ}して仏門に入ろう。そして争鬭興亡の圈^{けんない}内から遁れ去ろう。同時にかつての栄門に還る夢望を捨て、一切の執着^{しゅうじやく}を洗い、上杉家の長い恩顧を謝して、飄乎、高野の塵外^{じんがい}へかくれよう。

そうすれば、ふたたびこの大きな犠牲はなくなる。今までの償い^{つぐな}には、ひたすら故人の冥福を祈って生涯する。沙門に入ってそれを詫^わびる。

「……かように思い決めたのでござりまする。今日まで、殆ど、この流寓^{りゅうぐう}の孤客を、

お身内同様に思し召され、連年、多大の軍費と将士の尊い血を以て、義清を御庇護下された大恩は死しても忘れはいたしませぬ。が、これ以上、おびただしい人命を捨てさせ、遺^{のこ}る御家中の人々に嘆きをかけては、義清、いかにお詫びしてよいやら分りませぬ。また、ふたたび祖先の地へ還り得るとしても、独りの歎びとすることはできません。一切、ことばには尽せぬが、御^ご愍^{びん}察^{さつ}あつて、私の身勝手、どうかおゆるし賜わりますように」
縷^る々として、義清は、衷^{ちゆう}心^{しん}のものを吐いた。

謙信は、ややし^くばし、うす眼をとじて、聞いていたが、彼が、その苦衷を長々と述べ終ると、初めて、刮^{くわつ}と、^{まぶた}瞼^{まぶた}をひらいた。

「だまれ。……義清どの。だまんなさい」

声はひくい。

しかし、実に、盤石をもつて、そつと頭から圧するような声調であつた。

大乘小乗

「はっ。……はいっ」

義清は思わずおののいた。

日常の謙信公はまるで女性のようだとたれもいう。その人から畳のうえでこれほど恐い眼を向けられたことは、九年のあいだでも初めてであつた。

謙信は決して猛^{たけ}らない。吠えない。けれどもいかに静かな声のうちにも、怒りはふくむものである。たしかに、彼は怒つていた。

「何をいうか。何をいわるのだ。だまつて聞いておれば、あなたは戦^{いくさ}というものを、さながら人間の物好きか、退屈人の気散じの如く心得ておられるらしい」

「め、滅相もない。不肖、村上義清ほど戦の艱苦を、つぶさに嘗^なめて来たものはございませぬ。戦の惨禍は、骨髓にまで、知り尽している身なればこそ」

「やかましい」

「は……」

「よいお年をしながら、愚かないたずらに舌をうごかさねな。戦とは、一個の村上義清が、わずか国を追われたぐらいで、知り尽したなどといえるほど、簡単なものでもなし、そのような意義の小さいものでもない。あなたの口吻^{こうぶん}から察すればあなたは戦の中をただ通つて来たに過ぎないようだ。真の戦とは、何か、まだ御存知ないらしい」

「……左、左様でしょうか」

「混沌こんとんたるお顔色だな。かくいわれて初めて、真の戦とは何か、御不審を抱かれたであろう。嗤わらうべし。あなたは、この謙信が、九年にわたる信玄との血戦を、ただ其そこ許もとに頼まれたための義心一片と思いこんでいられたか。……何で。何で」

謙信は声を放たずに肩で笑った。そしてなお莊重な語をつづけていう。

「考えてもごらんなさい。応仁以後、宇内の暗黒は、各地に割かつぎ拠よする豪族たちから、遅ち々、自覺されて、東海に徳川、織田の起たつあり、西海に、毛利、大内の起るあり、甲山に信玄、ここに謙信、相模に北条、そして駿遠の堺に、今川氏の一朝に瓦滅がめつするなどあつて、今や日本のうごきは、急潮に変わり、急激に大革新を示そうとしている。かかる時代のうしおの中に、いかに信濃の名族たろうと、一個の村上義清が亡ぼうと興ろうと、死のうと生きようと、何の問題でもない。この日本のうごきにとっては、大海にただよう藁一本の存在でしかない」

特に、語尾をつよめた。

義清は真つ蒼になつてゐる。聞き澄ますその薄い耳たぶにも血の色はなかった。

「——さるにこの謙信が、何故信玄と長年戦つて来たかと申せば、元来、謙信には謙信の

信条があつてのことです。自分、年二十三にして、初めて、国内平定の業一まず備わり、微勲^{びくん}天^{てん}聴^{ちやう}に達するところとなり、畏^{かしこ}くも、叙位任官の優寵を賜う。——微賤、遠くに坐^{いなが}ら、またひとたびの朝^{ちやうきん}覲^{しん}もせず、さきに優渥^{ゆうあく}なる天恩に接す。勿体なきことの極みと、すなわち翌年、万難を排し、上洛して、闕下^{けつか}に伏し、親しく咫尺^{しせき}を拝し、また天^{てん}盃^{はい}を降しおかる。……実に謙信が弓矢把^とる身に生れた歎びを知ったのはこのときにであつた。戦わん、戦わん、この土にうけた生命^{いのち}のあらん限りはと、戦うことの尊さ、戦うことの大きな意義、それらのことどもも、同時に、肝に銘じ、心魂^{しんこん}に徹し、わが生涯は御^み階^{はし}の一門を守りて捨てん。悔いはあらじと、深く深く心に誓うて退京いたした」

「……………」

「爾来、謙信の弓矢は、それ以外に、つがえたことはない。こえて永禄二年初夏、ふたたびの上洛にも、その前の折にも、畏^{おそ}くも、綸旨^{りんじ}を降しおかれ、隣境の乱あらば討つべし、皇土をみだし、民を苦しめるの暴国あらば赴^{おもむ}いて平定せよと、不才謙信に身にあまる御^ご諛^うであつた。およそ臣子の分として、この叡慮^{えいりよ}にお応え申し奉らざるものやあろう。遠く、この北越の辺隅にあつても、一日とて、そのありがたい優^{ゆう}諛^うをわすれたことはない。いわんや、兵をうごかすの日においては——」

夜は時雨しぐれとなつたらしい。雨樋あまじいをあふれる雨だれの音が烈しく軒下を打つ。

禅家にも似た道者羽織、鶯茶の頭巾ずきん、室に妻もない謙信であつたが、烈々、こういう問題に真情を吐き出してくると、そのひとみは実に若い。ともすれば義清とともに涙を沸たぎらせてしまひそうであつた。しかし義清の眼は飽くまで小乗小愛の悩みに溺れ、彼の眼は大乗の海にも似て、満々たる涙をたたえながらも、なお仰ぐ人をして、何か洋々たる未来と暖味あたたかみを抱かしめる。

昨夜風雨窓前を打つ

「それまでの御心事とは、こよい初めて伺いました。志の小、身の至らなきにひき較くらべ、義清はただ恥じ入るのほかございませぬ。……要いらざる小人わづらの煩わづらい事をお耳にいれ、折角の静夜をお邪さまたげ仕りました。どうぞおゆるし措おきをを」

彼は心から詫わづらびた。

また、蒙もうを啓ひらかれて、謙信のなして来た戦が、何を志し、何を意義しているものかを、初めてはつきり覺さとり得た。

そうとわかると、連年、甲州との合戦が、一村上義清のために起ったものと考えていたことは、義清自身、恥ずかしくなつて、消えも入りたいここちだった。

謙信はことばを和らげて、

「いやいや、わしこそ、思わず今宵はちと激語を吐いた。実申せば、このたびの川中島の大戦に、年来手飼てがいの家の子郎党など、可愛ゆきもの三千余名を失うて、この謙信も人知れず、愁心癒いやし難いものがある。いや、心に受くるその傷いたみにおいては、御許おもとよりも、誰よりも、謙信こそはその重責と傷心に深く自らを鞭打つものだ。ましてや今宵のごとく、戦のあと、いとど寂やかに時雨しぐるる夜などは」

と短檠たんけいの灯にじつと、眸ひとみをこらして、なおいおうとしたが、義清の惨心に思いを遣り、またあまりにいい過ぎては味もないとするように。

「……察しられない。此方の心中も」

「よくわかりました。お察しいたしまする」

「されば、たとえこの後、いよいよ戦場に屍しかばねを積み、この越後一國、夫なき妻と、父なき子らに満とうとも、何ぞ、それは一個御身のせいではない。身ひとりのためかのように気を小さく萎なめられるな。それよりは、其許そこもとのいのち一つも、謙信がいのち一つも、息あ

るうち、いかに大きく捧げ奉らんかを、朝暮に都の方へ向って念ぜられよ」

その夜のはなしはそれだけであつた。けれど村上義清は、わが邸にもどつてからも、終^よもすがら謙信のことばを想い、その心事を玩味^{がんみ}してみた。そして何かしらここ十年來は忘れていたような快い安らかな眠りにひきこまれた。

この日までは、戦といえ、ただ惨たるもの、激しいもの、苦痛なもの、犠牲を出すものとのみしか考えられていなかったのが、にわかに、大きな意義に行当つて、今や弊^{へい}悪^{あく}の脱殻、次への建設など、戦によらねば成しとげられない日本国全土の改^{かい}耕^{こう}こそ、戦であつて、それに流す血も、それに埋める白骨も、すべてただその忠業に帰一してゆくものなることを彼も覺^{さと}つたのである。

以来、義清は、眠るにも、安らかな^{いびき}息をかき、醒^さめても快活になり、また戦う日には、なおさら大らかに先頭へ立ち、年五十過ぎてからいよいよ勇敢であつたという。

大義大私

川中島大戦後、もうひとつ謙信の氣^き宇^うをあらわしたものがあつた。斎藤下野、黒川大隅な

どの甲州に捕われていた使者の一行が、信玄の寛度かんどによって、無事、越後に帰って来てからである。

彼の寛度に対し、謙信ももちろん寛大な処置を早速にとった。国中に監禁している甲州方の隠密数十名を、春日山の城下に寄せ、

「おまえ達も主命をうけてこの越後に紛れ入り、空しく捕われて、獄中しか見て帰らなかつたとあつては、主人にも不面目だろうし、身寄りや朋友にも肩身が狭かろう。越後表にはさして要害という要害もないが、そちこち見たいところを見てまいるがよい」

と、奉行から達しさせ、役人が連れて、彼らを幾組にもわかち、三日ほど諸所見物させ、たうえ、旅費を持たせて、国外へ送還してやつた。

「いかに信玄が、わが方の使者に、寛度を示したからとて、それは正當に使者として甲州へ赴いたもの。こちらの放したのは、すべて始末のわるい敵の隠密。こんどの御処置は、あまり御寛大に過ぎたようだ」

非難というのではないが、憂いのあまりに、家中にはこういう声も多少あつたが、越後領から放された甲州乱波らっぱの面々は、

「もういかん。二度と春日山の城下へは入りこめない。三日のあいだ、白昼、あのように

諸所を歩かされて、城下の女子どもにまで、この顔をありありと見覚えられては、どう身み扮なりを変えても次にはすぐ見み頭あらわされてしまう」

というあいつつ、また謙信の度量にも惧おそれをなして、這ほう々ほうのていで甲州へ帰り去ったということであつた。

これを見ても謙信の戦が、ただの自己の遺恨とか利己の侵略でなかったことが窺うかがえる。彼は敵兵すら日本の一民と観ていた。もののあわれを知る兵家へいかだつた。敵といい味方というも、この日本国の内においてながしあう血はことごとくみなこの国の大生命ひとつに帰するものでしかないことを達観していた。村上義清の気の弱さを叱つたのもそれだし、敵の乱波に宥いたわりをかけたのもそういう心根が肚にすわっているからであつた。

けれど彼はやはり兵家である。絶対に勝たねばならぬことを誓っている。だからたとえ敵方の乱波にそんな処置をとつたにもせよ、それが味方の禍いになるような愚ぐは断じてしない。むしろ彼のとつた処置は、後々、最後の国防をかえつて強化したことになつていたようだ。

そのほか、彼の一令一言、四十九歳を以て、この世の終しゅうえん焉を告げる日まで、事々日常の行いすべて、戦に勝つためのものだつた。

勝たねば、自分がない、自分がなくては、理想の実現は遂げられない。自己を愛すること、日常の慎み、身の養生にいたるまで、彼ほど忠実な人は武将には稀まれであろう。

かくはいえその自己は、尋常一様な自己ではない。私利私欲の自己とはちがう。謙信そのものは、すでに謙信一個人でなく、彼が生命をうけた国とひとつものになりきっている。——いわゆる公儀の人、公人の範をそこに持っていたのである。

彼が年わかくから早くもこういう大義大私に到達していたのは、何といっても、両度の上洛がその信念をかく誓わせたものにちがいない。二十四歳、越後の辺境から遙かに都へ上つて、天顔に咫尺しせきし、また当年の落莫らくばく荒涼たる御所の有様や朝儀の廃すたれや幕府の無力や人心の頹たい廢はいなど——見るもの聞くものに若い心を打たれながら——実に彼の大志は泉のごとく噴き出したものだった。そのとき上杉謙信なるものの生涯はすでに決していたのである。

山海美事

戦場こそ、年々に変つて行くが、戦は川中島以後も、絶えることなく続いた。

永祿五年には、信玄が上野に乱入したので、謙信も上州沼田へ出馬した。

六年には、佐野城を救うため、関東へ出征し、また翌七年には、ふたたび川中島へ陣した。

このとき、信玄が、こんどは飛騨へ軍を向け出したからである。——八年七月にも、その信玄を牽制^{けんせい}するため、越軍も信濃へ入った。

「甲州の足長どの（信玄のこと）には、老来いよいよお足が伸びてゆくふうだな」

と、謙信もあるとき戯^{たむ}れていったほど、信玄の八面六臂^{めんろくび}な行動は、連年予測をゆるさないものがあつた。

そのうちに、この足長どのも、遂に、その長い足を敵に咬^かまれて、生涯いちどの悲鳴をあげたことがある。

永祿十一年から元龜^{げんき}元年にわたるあいだ、この長い年月、甲州には塩の無い生活が始まっていた。国中、塩攻めになったのである。

足長な信玄が、駿河へ兵馬を出したことから、敵方の苦策によって、反噬^{はんぜい}をうけたのだった。今川、北条の二家が相提携して、

「信玄の勢力下へは、一合の塩も入れるな」

と、甲信二国と上州の一部にかけて、嚴重な輸送停止を實行し、もし眼をかすめて一握りの塩でも敵に売った者があれば、斬罪に処すると発令した。

半年や一年は貯蔵で凌^{しの}げた。また山中や河川で小量な闇取引も行われた。けれど足かけ三年にもなると、さすがの信玄も困惑した。三十年来まだかつて戦に弱音をふいたことのない彼も、

「いかにせん乎^か」

と、日々屈託^{くつたく}顔^がに見えた。

由来、甲信上毛は、塩ばかりでなく海産物はすべて、北条、今川家の領に依存していたので、この苦痛は徹底的にこたえた。領民の皮膚は目に見えて青味を帯び、病人は急に殖^ふえ出した。わけても、味噌、漬物が喰えないことは、百姓の生活を致命的におびやかした。従つて、農産も減退するし士氣はふるわず、さしもの甲府も自滅のほかなかった。

「今ではありませんか。一挙、甲府を撃砕するのは」

うわさは頓^{とみ}に高い。越後表でも謙信にたいしてしきりにすすめる武将もあつた。が、謙信はその期間、敢て、甲信に兵馬をうごかさなかつた。

のみならず今川家から、この塩止政策の同盟を求めて来た使者に対しても、

「当家においては、疾とくに当家として、策も立ておれば、御喙容ごかいようには及ばぬ」と、追い返してしまった。

しかし三河の徳川家康とは、この年、対甲同盟をむすび、いよいよ信玄に対しては、間か隙んげきをゆるさなかった。

苦しまぎれか、信玄は依然、諸州へ兵を出した。専ら塩を獲えようとしたのであろう。上州の上杉領へも突出して来た。捨ておけじと、謙信は直ちに三国山脈を越えてこれを撃退し、彼が、甲府へ退ひくと、自分も越後へ帰国した。

帰るとまもなく、謙信は、糧倉ろうそう奉行の蔵田五郎左衛門を呼び、

「このたびの出征に、甲信地方の領民の生活を聞き及ぶに、うわさ以上の塩切れに、百姓共の苦悩は言語に絶しているらしい。——早々、わが北海の塩を、水陸より甲信地方へ転漕してつかわせ」

と、命じた。

五郎左衛門は耳を疑って、

「敵国へですか？」

と、怪しみながら念を押した。——そうだ、と謙信は大きく頷いて見せ、且かつ、注意を

加えた。

「もとより城中の塩倉を開けるわけにはゆかぬ。城下の商賈しょうこに令を出して、甲信側の塩商人へどしどし塩を売ってやれ、と奨めればよいのだ。ただし先の欠乏につけこんで、暴利をむさぼる惧れおそがある。価格はすべて越後値段に限ることを厳命し、平価をこえることなきように致せ」

君と我とは

国境をこえて、限りなく塩が入って来たという。

甲州の百姓は生色をとり回かえした。町々はどよめいた。商賈は眼の色を変えて塩を頒わけ歩いた。塩を見たものはその白いものを一握り握ってみて、

「ありがたい」

と、涙した。塩を拝んだ。

郷社の神前にも、塩があげられた。煌々あかあかと神灯みあかしがついた。

——こういう状況をつぶさに聞いては、躑躅つづじヶ崎の館たちにあつた信玄も、眼を熱うせずに

いられなかった。が、彼は、

「……そうか」

とのみで一言もまだそれに就いての是非、感激をも、また批判をも口から吐かないのであった。

「……？」

むしろ彼は初めのほど、苦痛に似た顔つきをあらわしていた。次に懷疑的に見えた。ちやうど、過ぐる永禄四年の大戦に、謙信が捨身の戦法に出て、その不可解なる妻女山の陣をながめたときのように、信玄は心の霧につつまれていた。

そこへ、一書が到着した。

春日山の謙信からである。なお信玄は多分な疑惑をもちながら、その書簡を披いた。

書は簡単であった。文意には、

春秋幾星霜、君と我とは、兵馬を以て呼び、兵馬を以て応う。争う具は、弓箭にして、戦う心は、すなわち所存の相違にあり。我の理想するところ、君の理想にあらず、君の望むところ、私の望みに非ず、すなわち対峙連年、天下の野を借りて、戦陣を布く。

さりと雖も、兵家の戦に、何ぞ米塩を用いんや。米塩ひとり君が舐むるにあらず、百姓

の生資たるもの、百姓は是、国の大みたから、また攻伐にかわりなし。駿相二氏の下策、賤陋せんろうの心事、たれか憎まざるものやある。

昨今、わが領の商賈しょうこを通じ、貴国に塩を給すの意、ほかあるなし。希ねがう安んじてこれを取れ。なお君の麾下きかをして更に士馬精銳たらしめよ。戦陣ふたび相まみえん。

「……………」

信玄は再読三読した。眉の霧は霽はれている。しかし疑いもなく彼は謙信にたいして心服を抱いた。彼のうるわしい心事に照らされて信玄の心も美化いさぎよされていた。何か潔い清らかな呼吸を感じるだけだった。勝敗の念も超えていた。

ていねいに書簡をたたんで、押しいただいて傍らの手筈てばこへ納めたが、このときも信玄は、一言の感動も洩らさなかった。いうべきことばもなかったと思われる。

塩祭

ここ両三年の越後と甲斐とは、依然、宿命的な敵対国として双方、国境を堅持しながらも、その活動は、各べつな方へ向けられていた。

元龜三年から翌天正元年にかけての信玄は、東海を目標に、三方原に出て、徳川家康の軍を粉碎し、その本城浜松にまで迫っていた。

同じ年、謙信は、その八月から越中平定に出征して、天正元年の正月を陣中に迎え、三月富山附近の攻略を終り、四月、春日山の城へ帰って来ると、まもなく、

「甲斐の晴信入道信玄には、この三月中に、卒去そつきよされたそうです」という寝耳に水のような報告をうけた。

謙信はちょうど昼の食事中であつたという。早打ちの知らせを、側近の臣から聞いて、「なに。甲斐の入道は亡くなられたとか。……ああ、多年の好敵手とも、ふたたび相見える日はもうないか」

箸の手を膝に落して、漣さんぜん然と涙の下る瞳をとじていたが、またこう呟いて、諸臣の士気を戒めたということである。

「——敵なき国は亡ぶという。或いはかえつてこのために、越後の弓矢も弛ゆるむかも知れぬ。とはいえ、信玄ほどな大才を敵として、それに敗られまじ、それに打克うちかたと不斷に己れを磨く目標はいまやこの世になくなった。惜しい。寔まことにさびしい」

家中の武将のうちには、この訃ふを伝え聞いて、

「絶好のときだ。甲府の一門宿将は、おそらく暗夜に燈火を失うたような滅失の底に沈んでいるにちがいない。いま大挙して征けば、彼の全領土を一朝に覆すは易々たるもの」

と各 寄つて、策を謙信に説くものもあつた。

謙信は笑つた。

「止めよ、止めよ。天下の蔑みを求めるだけだ。死後一朝にして覆るような甲州であつたら、その柱であつた信玄の死も惜しむには足らん。しかし、三年間はむしろ前にも増して甲府は金城鉄壁であろう。三年先のことは、誰にもわからぬ」

その後、謙信は、海津の城まで重臣を遣つて、篤く信玄の死を弔わしめた。

その弔問の使者の歸つて来るころ、信玄の死の実相もつぶさに知れて来た。果たせるかな、さすがに彼の死は彼らしく、死後あらゆる方策をその帷幕の者と一門にいいのこして、甲山の旗幟が為に急衰を呈すようなことはなかつた。

信玄の病氣は、浜松城を包围して、いよいよ、三河にまで働きかけていた軍旅のうちに起つたものである。その死が急だつたし、折も折だつたので、いろいろ異説を生じ、諸国から懷疑されたが、野田城の囲みを解いて、急遽、甲府へ歸つて来る途中、いよいよ重態に堕ちて、躑躅ヶ崎の甲館へもどつたときは、もう遺骸であつたというのが真相らしい。

死に臨んでは、嫡孫信勝、勝頼以下の一族諸將を枕頭に呼んで、

「わが亡きのちは、構えて、みだりに兵をうごかすな。特に隣国の謙信には、信をもつて汝らの倚託きたくをうけて、裏切るような謙信でない」

そう遺言して、また、筆を乞うて、

大底他ノ肌骨キコツ二還ル

紅粉ヲ塗ラズ自ラ風流

と、最期の一偈げをふるえる手に書き終るとともに息をひきとつたという。

病についてから死ぬまでのあいだに、料紙八百枚に自分の花押かおうを書いておいて、死後もなお、信玄死なずと、世に思わせておくように要意を遺しておいたという一事を見ても、いかに彼が、あとあとの備えに万端心をもちいていたかが窺われる。

英雄の心事は英雄のみが知る。謙信の想像は外れていなかった。また彼のいったとおり、信玄の死後も両三年のあいだは依然、甲斐源氏武田家は四隣に重きをなして何の破綻はたんもあらわさなかった。

だが、ひとたび長篠ながしのへ出て、織田、徳川両軍の迎撃げいげきに惨敗を喫してからは、衰退とふみ頓とみに甲山の旗幟に濃く、さしもの土馬精銳もその面影を失いつつあった。

こうした情勢のあいだに、人生の不測は、謙信にもめぐって来た。信玄死後五年目、謙信もまた忽然^{こっぜん}と世を去った。両雄ともに世を去ることの急だったのも一奇であり、何となく宿命的なものを想わせる。

日頃の謙信は実に強壯快健であつたが、ただ酒を好んだ。彼が愛用したという馬上杯など、後々まで遺族や家臣の涙をそそつた。今に上杉神社に遺^{のこ}っている日常の酒盃などもおそろしく大杯である。肴などに好みはなく時としては梅干一つで、斗酒を傾けたとあるからその快飲ぶりは想像に難くない。

むかしよりさだめし

四方にたち返り

治めさかふる

千代のしら雪

これは彼の旧作だ。若年上洛した折、將軍義輝と一夜雪見を催しながら詠^よみ出でた一首という。

雪一色の美に寄せて、そのときもう胸に抱いていた復古の精神を吐いている。また雪よりも純な国体観を洩らしている。

義輝はこのときまだ弱冠十九歳の將軍だった。果たして彼の理想を汲み得たろうか否かわからない。しかし謙信は、その義輝が非業ひごうの死をとげ、次代の義昭將軍となっても、な
お情誼じょうぎを変えなかつた。倒れんとする室町幕府を隠然たす扶けるに大いな力をかしていた。
為に、彼は信長と対立した。信長は彼とはまったく反対な倒壊とうかい者である。当然な衝突
は、外交に軍事に、熾烈しれつに闘わされた。

青空文庫情報

底本：「上杉謙信」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年10月11日第1刷発行

1996（平成8）年12月12日第15刷発行

初出：「週刊朝日」

1942（昭和17）年1月4日号～5月24日号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：川山隆

校正：トレンドイースト

2014年3月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

上杉謙信

吉川英治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>